鈴木敏充 原案
松枝蔵人 著

バブルガムクライシス

サイレント・ファンファーレ

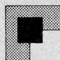


12

バブルガムクライシス

—サイレント・ファンファーレ—

鈴木敏充 原案
松枝蔵人 著



富士見文庫

本文イラスト　山根公利
　　　　　　　夢野れい
本文イラスト監修　園田健一

プロローグ

1

西暦二〇三二年、東京。

しかし、国際化と巨大化が果てしなく進行した現在、「東京」よりも「ＴＯＫＹＯ」と表示されるほうがはるかに多い。二〇世紀末から急激に進行した変化は、すでに「東京」を化石とし、その地層の上に「ＴＯＫＹＯ」というまったく別な都市を建てたと言い表わしてもよいほどのものであった。

この徹底的な変容は、ひと昔前には「情報化」と呼ばれていた現象の、急激な進行に端を発していた。

「すべては情報である」という理論は、二〇世紀が最後にたどりついた結論だった。しかし、光ファイバーケーブルの網の目の中でどれほどのことが起こっているかということについては、それがある時点を期して目の前に噴出し、実際に形をとるまでは、人々はさしたる自覚を持たなかった。世界中が目にして驚いたもの——それが「ＴＯＫＹＯ」だった。

東京にではなく、「ＴＯＫＹＯ」というものの出現にであるところに注意が必要だ。

二〇三二年現在でもっともひんぱんに聞かれることばに「システム」というのがある。それは〝活動するかたまりとしての情報の集積〟と説明されている。「富」や「文化」がその代表例であるが、「時間」、「権力」、そして「生命」までもが、システムであるとされている。

そして、システムとは、0と1の行列で表わされる単位情報としてデータ化され、流通と組みかえが可能なものを同時にさすことばもである。

システムとして認知されたものはすべて、ただちに情報と名づけられ、めまぐるしい流通を開始した。AのシステムとBのシステムからひき出された情報が、Cというシステムに結合され、A、B、Cのどれともまったく似ても似つかない新しいシステムDを形成する。

無数の巨大で複雑な「メビウスの輪」である大都市に流入した情報は、あらゆる可能な結合をくりかえし、はてしなく増殖、肥大化していった。そして表面に現われる変化は、突然であり、急速であり、巨大であり、徹底的であり、多くは予想もしなかった形をとった。

この現象は、期せずして世界のさまざまな都市でほぼ同時に起こった。ボストン、ベルリン、上海、シドニー、ニューヨーク、モスクワ、筑波……。それは世界革命とも呼ぶべき事態であった。なぜなら、それによって起こった変化、変革は、産業構造はもちろん、世界の政治体制、文化にまでおよんだからである。

これがもっとも典型的な形で現われたのが、ほかならぬ東京であった。

東京は、歴史上かつて世界のどの都市も経験したことのない速度と規模で、情報を吸収し

はじめた。世界中の財貨、文化、産業が、海底ケーブルと通信衛星の回線を滝のように流れおちた。そして、その流れを追って、さまざまな民族、さまざまな階層、さまざまな文化をもつ人々があとからあとからおし寄せてきた。東京はその波をブラックホールのように飲みこみ、際限なく巨大化していったのである。

——こうして東京はTOKYOとなった。

2

ここTOKYOを都市と呼ぶのが適当かどうか、それはさだかではない。

さまざまの人種の大量流入は、〝市民〟という一定のレベルの意識を崩壊させてしまった。流れこんできた人々の動機がすでに、民族とか国家というものを越えており、ほとんど無差別と言ってもいい人種の結合、混血がつぎつぎと起こった。

人種間の対立が問題にならなかったかわりに、「人種のるつぼ」の先輩格にあたるアメリカ合衆国にあったような、「フロンティア精神」といった統合のスローガンもなかった。

こうやって三代目を迎えようとしている〝TOKYO人〟は、意識のうえでも無国籍人種として巨大都市TOKYOの中を浮遊していた。

また、TOKYOの果てしない拡大は、日本という国家さえ侵蝕し、日本をどんどん周辺に追いやるような形をとって進行した。それに追いうちをかけるように、七年前に起きた関

東大震災に匹敵する大地震は、風景から街区の区分、居住区域と工場区域の立地まで、徹底的な変化をTOKYOにもたらした。

いぜんとして首都であり、日本人ならばもちろん自由に出入りできる。しかし、そこに住む人間も、住む動機も、仕事も、生活も、そして概念から貨幣価値にいたるまで、TOKYO以外に住む日本人とは異なってしまったのである。

TOKYOは日本ではない、という言い方が可能ならば、世界中のどことも緊密につながっているという意味では、世界中どこにもTOKYOがあると言ってもいい。

このようにとらえどころのなくなった超メガロポリスTOKYOを、ある者は皮肉っぽく、またある者はほんのわずかな愛着をこめて、「ティンセル・シティ」——見せかけの都市、安ピカの街——と呼ぶ。

ティンセル・シティは、いわば世界の上にユラユラと浮かんだ風船——どこまでも膨張をやめない、巨大で、危険きわまりない風船なのであった。

3

いくつもの矛盾が共存し、さらにそれが複雑にからみ合って新しい矛盾を生みだし、肥大化していく最先端都市——そんなティンセル・シティを象徴するように勢力を競い合う二大権力システムが、宇宙防空軍、USSDと、超集合企業体、GENOMである。そして、そ

の二大勢力の思惑と利害関係から生みだされたのが、〝ブーマ〟である。

　来たるべき宇宙時代にそなえ、最新鋭の科学技術がおしげもなく投入された宇宙工学。その成果がゆがめられ、盗用され、ついにブーマという、外見からはまったく人間と見分けのつかぬ〝亜人〟的サイバードロイドとなって姿を現わしたのだった。

　ごく短期間のうちに、ブーマは日本の最重要輸出品目のひとつにのしあがった。目的用途別にタイプも多様化し、カタログは日々その厚みをましていった。

　ブーマの特許権と製造技術を一手ににぎるゲノムには、使用目的に応じてさらにグレードアップされたブーマを求める特別注文もあいついだ。本来、宇宙空間や海底といった、人間の不向きな場所での作業を目的として造られたはずのブーマだったが、注文書の表向きの使用目的からはおよそかけはなれた機能が要求されている場合がめずらしくなかった。ゲノムはほとんど注文にクレームをつけることなく応じたし、闇から闇へと秘密のうちにおこなわれる取り引きも数知れなかった。

　ブーマ生産の基地でもあるティンセル・シティの街角で、ブーマの姿が見うけられるようになるのに、そう長い時間はかからなかった。が、それは、それまでの常識をはるかに超えた、高度なテクノロジー犯罪の手先としての出現だったのである。

　あいつぐブーマ犯罪に対処すべく、ＡＤ（アドバンスト）ポリスという重機動部隊も警察機構内に設立された。

　しかし、雑多な住民たちはその脅威におびえながらも、なにひとつ変化がないかのように日常の生活をつづけている。いや、急激な変化になれっこになっている彼らにしてみれば、前代未聞の破壊者、殺りく者であるブーマこそ、いっそティンセル・シティにふさわしい存在に映ったのかもしれない。最終最後の危機の到来を告げる、現代の黙示録中の怪物として……。

　ここに、ブーマ犯罪に対抗すべく立ちあがった、ひとつの科学武装集団があった。自称『ナイトセイバーズ』——金を報酬として事件解決の依頼を引き受ける、闇の仕置人グループである。

　——この物語は、超現代都市ティンセル・シティにまき起こった、ある代表的なブーマの犯罪を通して、ナイトセイバーズの活躍を描いたものである。

一章

1

おそい午後の陽射(ひざ)しのなかを、あざやかな深紅色(スカーレット)のスポーツカーが疾走(しっそう)している。

昼と夜のちょうど中間の時間帯で、四六時中渋滞(しろくじちゅうじゅうたい)、渋滞をくりかえすので世界的にも悪名高いティンセル・シティの超高速高層道路(スーパーエクスプレスウエイ)も、車の流れはだいぶスムーズだ。ところどころに、真空地帯(しんくうちたい)のような空白(くうはく)がポッカリと生(しょう)じ、ラミネート・アスファルトの路面(ろめん)がしばらくにぶい光を照(て)りかえすのが見てとれたりもする。

そうした車間のゆとりをうまくぬって、深紅色のスポーツカーはぐんぐんスピードをあげていく。ほろ付き(コンバーチブル)開閉式のルーフをオープンにし、サラッとしたやわらかい髪(かみ)を風になぶられるままはためかせ、みごとなハンドルさばきを見せているのは、流行の濃いサングラスをかけた女性だ。

「フエーッ!」

全長二〇メートルの大型トレーラーの高い運転席で、ひげヅラのドライバーが思わず声をあげた。さっきバックミラーをのぞいたとき、二、三〇台うしろにヤケに派手(はで)な車がいやがるな、と思ったばかりだったのだ。それが、もうトレーラーのわき腹をくすぐるかのように

ピッタリ横につけていたからだ。

ごっついトレーラーが、とびのくように、あわててその巨体(きょたい)をわきに寄せた。

すると、スポーツカーの女性がサングラスをはずし、トレーラーの運転席にむかってニッコリほほ笑(え)んだ。無邪気(むじゃき)な表情は、ちょうど二〇歳(はたち)ぐらいだろうか。

それに、高いトレーラーからはオープンにしたスポーツカーの中がまる見えだ。強いむかい風を受けて、その若い女の子のコスチュームが体に密着(みっちゃく)し、少々やせぎみながらびっくりするほどみごとなプロポーションを、くっきりと浮かびあがらせている。

運転手が無精(ぶしょう)ひげにおおわれた太い首をつきだし、ゴクリと生つばをのみこんだが、そのときにはもう、深紅色(スカーレット)のスポーツカーはトレーラーの横をすりぬけ、つぎの車を追いぬきにかかっていた。

スポーツカーは、しばらく走ったところで減速(げんそく)し、超高速高層道路(スーパーエクスプレスウエイ)をおりた。

人工並木の植えこまれたシャレた街区(がいく)を、眺(なが)めを楽しむかのようにゆっくり流していく。

どうやら、特別急いでいたのでもないらしい。さっき超高速で見せた荒っぽい運転ぶりは、「超高速の上でモタモタしてるなんて、カッタルイじゃない」という理由のためだったようだ。

一年中落葉(らくよう)することのない人工並木の豊かな葉(は)むらから射(さ)す木もれ陽(び)が、サングラスを取った色白(いろじろ)の素顔(すがお)にはえる。

リンナ山崎――。

最近、一般市民のあいだでもチラホラと噂を聞くようになった、ブーマ退治のプロフェッショナル・チーム、『ナイトセイバーズ』のひとりである。

もちろん、メンバー以外に彼女の正体を知る者はない。大型トレーラーの運転手が目をみはったバツグンのプロポーションと健康美が示すように、リンナの表むきの職業は、エアロビクスのインストラクターだ。

やがて交通のはげしい表通りが見えてくる。リンナはその角の直前の車寄せにスポーツカーを停め、むかいのビルを見上げた。

上階までショーウインドウのように大きなガラスをはめ、メタリックな輝きをはなつフレームでふちどられた、めずらしくアカぬけたデザインの建物だ。

手にとるように中の見える店舗は、美容室、ブティック、貴金属店など、すべてファッション関係のテナントである。

リンナがきょろきょろ視線を走らせているのは、一階のワンフロアを独占している女性下着店。『ＳＩＬＫＹ・ＤＯＬＬ』とウィンドウにペイントされた店だ。

探す相手が店内にいないのを見てとると、リンナは横の通用口からそのビルに入りこんでいった。

2

「な、なあに、この騒ぎ!?」
最上階の屋上住居に着いてエレベーターのドアが開いたとたん、リンナは室内のありさまに驚いて声をあげた。
ふだんなら、最新型とはいえ小型のコンピュータが一台あるきり、あとはどう見ても独身女性の個室。しかもいつもこぎれいにしつらえられて、リンナにはどうにも立ちうちできない大人の女のそこはかとないエレガントさが漂っているはずなのに……!
「あ、リンナさん。コードに気をつけて入ってきてね。やっと配線終わったばっかりなんだからサ!」
接続用の絶縁テープの切れっぱしをほっぺたにいくつもぶらさげた少年が、ごたごた積みあげられたコンピュータ・ディスプレイのむこうから顔をのぞかせて言った。部屋じゅうにところ狭しと置かれたコンピュータは、ざっと数えただけでも一〇台はくだらない。
――いったい、何が始まったんだろう?
「……そう。じゃ、うまくいったのね。ええ、こちらも準備OKよ。ちょうどリンナも着いたところだし。あなたはしばらくそのまま待機していてちょうだい、プリス。ご苦労さま、気をつけて――」
言い終えてTV電話を切った女性が、くるりとこちらをふり返った。年齢はリンナより二、

三歳上、二〇代の前半といったところだろうか。短い髪型とすずしげな目元が、年齢以上の落ちつきと知性を感じさせる。
「リンナ、くわしく説明している時間はないの。とりあえず、そのへんに腰をおろして見ていてちょうだい」
高圧的なところのないもの言いだが、さからえない重みを感じさせる。
ナイトセイバーズの発起人にしてリーダー、グループの頭脳であるシリア・スティングレイ。ナイトセイバーズの本拠でもある屋上住居の主であり、同時にこのファッション・ビルと一階のランジェリーショップのオーナーもかねている。
シリアにすわれと言われたものの、ちょっと移動しようとしただけでも床じゅうにのたくっている光ファイバーや導線に足をとられそうだ。コンピュータのまわりをうろうろしていると、部屋の別のコーナーから黄色い声がした。
「リンナ、目ざわりなんだからウロウロしないでよね！」
「ネネ……!?　あんたも来てたの？」
声の主は、ネネ・ロマノーヴァ。対ブーマ犯罪用として警察機構内に新設された暴徒鎮圧隊・ADポリス（アドバンスト・ポリスの略）に所属している。もちろん、それは仮の姿で、実体はナイトセイバーズのメンバーだ。
「ひっどいわねー。『来てたの？』はないでしょっ。あたしはシリアから連絡受けて、超

特急ですっとんできたのよ。コンピュータは運ばされるわ、配線やらされるわで、テンテコ舞いだったのヨ。それに、今の電話聞いたでしょ。プリスはもう外に出かけてひと仕事終わっちゃったトコだってゆーのに、あんたぜーんぜん連絡とれなかったじゃない。いったい、どこをうろつきまわってたのよっ！」

「だってェ……こんなに天気がいいんだもの。ちょっとショーナン・エリアまでドライブしてきただけよ。やっぱ、海ってイイわねェ。けど、あんたこそ、ADポリスの仕事サボっちゃって、お給料へらされる心配ないの？」

「きょうは非番なのっ。たく、口がへらないんだからァ。でも、こんどの仕事ばかりは、あんたに好き勝手言わせないわヨ。ごらんの通り、コンピュータがズラ〜リ。フル・オートマチックでなくちゃ手も足も出ないだれかさんは、指くわえて黙ってなさい！」

ネネは口をとんがらせて言った。丸い顔がますますふくれ、ただでさえ少女のような表情がよけい子供っぽくなった。

「ネネ、むだ口たたいてないで。さ、スイッチをいっせいにオンするわよ。——三、二、一、オン！」

シリアのきびしい声が部屋中にひびきわたった。

と、同時に照明の光量が半分以下に落とされた。反対に、コンピュータ・ディスプレイの輝度が上昇し、画面表示をくいいるように見つめる四人の顔が、うす暗いなかにボウッと浮

かびあがる。当惑してうしろからのぞきこんでいるリンナ以外は、みんな極度の緊張で表情がこわばっている。

「も、もうチョイで、アクセスできそう……」

そうつぶやいたのは、まだほっぺたに赤い絶縁テープをくっつけたままの少年だ。彼は、積み上げられたディスプレイの中でいちばん大きなモニター画面の前に陣取り、目にもとまらぬ速さでキーボードをたたいている。

シリアの弟のマッキー。グループの最年少で、ナイトセイバーズの助手的存在。ことこういった機械操作の腕はピカ一で、メカニックを自称している。

マッキーのコンピュータにむかってどの機器からも配線がのびているところを見ると、どうやらそれが全体のシステムを統括するメイン・コンピュータとなっているらしい。

「アクセス完了！　姉さん、ネネ、流入してくるデータをひろい分けるんだっ！」

マッキーは怒鳴るようにそう言うと、別の端末コンピュータにとび移った。

今まで彼が見入っていた画面には、猛烈なスピードでデータが表示されつづけている。しばらくの間は、三人がキーボードをたたくパシャパシャ、カタカタいう音と、ときたまコンピュータ内部からあがる読みこみ音しかしなくなった。

「やたっ！　一個つかまえたわよ！」

突然ネネが叫んだ。リンナがそっちに目をやると、さっきまでメイン・コンピュータ同様

にプログラムの行列が並んでいたネネのコンピュータの画面に、何やら色あざやかな模様が映し出されていた。

「でも、これ、何かしら？　モヤモヤしてるだけで、サッパリわけわかんなーい」

シリアがそのディスプレイをチラッと横目で見やった。

「温感よ。全身の熱センサーからの情報。ネネ、それはそのままファイルされるようにセットして、別のにとりかかって！」

「オッケー！」

シリアの命令がとぶやいなや、ネネははじかれたようにとなりのキーボードにとびついていった。

「触覚、キャッチしたわ。嗅覚も、ＯＫ！」

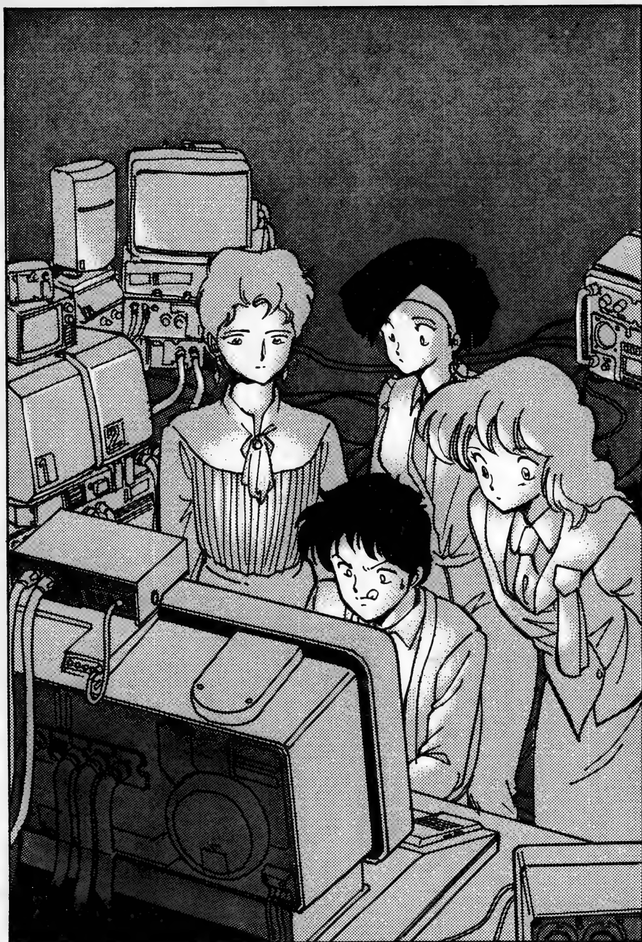
シリアもわずかに興奮ぎみに言うと、別の装置にかわった。

「バランス感覚……あれ？　ヘンよ。なんだかばかに揺れてるみたい」

「いちいち気にしてちゃダメよ、ネネ。あなたは、こんどは視覚をさぐりあてて。わたしは思考系統にリンクできるかどうかやってみるから。聴覚は……あら、マッキー、あなた、もう聴覚はさぐり出せているんじゃないの？」

シリアがコンピュータの山ごしにマッキーに問いかけた。

マッキーは、リンナのすぐそばのコンピュータにむかい、両耳をヘッドホンでおおったま



ま、うす気味悪いニタニタ笑いを浮かべている。

「マッキー、シリアが呼んでるよ――」

言いながらリンナがヘッドホンをひったくった。が、手にしたヘッドホンからかすかにもれてきたのは……。

リンナはいきなりマッキーのほっぺたを張りとばした。

「エッチーっ！　この子、なに夢中で聞いてるのかと思ったら……！」

「リンナ、マッキーがどうかしたの？」

シリアが顔をあげた。

と、そのとき、けたたましい叫びが、反対側からあがった。ネネの悲鳴だった。

とっ組み合いになりかかっていたリンナとマッキー、そしてシリアもキーボードをほうりだしてネネのところへ駆けつけた。

ネネは両手を口にあて、恐ろしそうに体をディスプレイから遠ざけようとしながらも、目は大きく見開いて画面をくいいるように見つめている。

「うひゃー。こ、こりゃすごいや！」

モニターをのぞきこんだマッキーが、思わずうれしそうな声をあげた。

「なに？　なんなの？」

あわてて身をのりだしたリンナがヘッドホンを引っぱったため、そのコードのジャックが

はずれ、壁(かべ)に埋(う)めこまれたスピーカーが大音量(だいおんりょう)で鳴りだした。

——あん、あ、ああん……。あん、あう、あう、ああ……。

画面(がめん)では、そのうめき声をあげている女が大映(おおうつ)しになっていた。女がのけぞると、のど元に汗(あせ)がにじんでいく様(さま)がはっきりと見える。

画面が全体に赤っぽいのは、赤外線(せきがいせん)カメラでとらえているからにちがいない。中で別な色がついているのは、コンピュータ・スコープの緑(グリーン)のふち取りだけだ。そこから細い線が内側にむかってはがれるように一本分離(ぶんり)し、座標軸(ざひょうじく)の中央に近づくにつれて丸くなった。と、それは女の裸(はだか)の肌(はだ)の上をまさぐるように不規則(ふきそく)に動き、やがて画面右下に来て動きを止め、さらに収縮(しゅうしゅく)して白い点となり、二、三回点滅(てんめつ)した。と、こんどは画面全体がその点にむかって移動する。

画面中央にきたのは、女のあらわな乳房(ちぶさ)だった。焦点(フォーカス)を合わせるように、カメラが女の体に接近(せっきん)していく。

カメラの動きが止まったとたん、そのときを待ちかまえていたように現(あら)われたのは、ゴツゴツした男のものらしい手だった。それが豊かにはずむ乳房をつかんだと思うと、鼻(はな)にかかった長いため息のような女の声が、スピーカーからなまめかしくあがった。

「ポ、ポルノじゃない！　きょうの仕事って、こんなもの見ることだったの!?」

リンナが叫(さけ)んだ。

シリアがあわててネネのひざの上のキーボードを操作した。緑色のスコープと座標、そして白いカーソルと画面下の細かい文字はそのままだが、女の肌と男の手は消え、その形だけを無表情な直線が表わす画像に切りかわった。

マッキーがうらめしそうな目で追うのもかまわず、ネネがとんでいってスピーカーの接続をオフにしてしまった。

「シリア、プリスはターゲットがどこにいるって報告してきたの？」

ネネがいかにも憤慨した表情でシリアにつめ寄った。

「そういえば、ホテルへ……女の人と連れだってホテルに入ったって言ってたわ」

「シリアって、いい歳してドン感ねェー。男と女がホテルに入ったら、やることってば決まってんじゃない。あたし、ノゾキの趣味なんかないんだから、こんな仕事、いくらお金積まれたってマッピラよ！」

「でもねえ、ネネ。この仕事は、ターゲットの行動パターンをすべて調査するっていうのが目的で……」

「そうとも、姉さんの言う通りだよ。あいつらが、あいつらが生身の女の人相手にこんなことするなんて、完全に初耳だよ。このチャンスにこそ、あいつらの凶悪な手口をしっかり研究しとかなくっちゃ！」

マッキーがそう言いながら、うれしそうに元の画面にもどすコマンドを入力しに行こうと

するのを、リンナがえり首をつかんで引きもどした。

「あんたの興味があんのは、そーゆーことじゃないんでしょっ。ねえ、シリア、わたしにもちゃんとわかるように、きょうの仕事っていうのを説明してよ。〝ターゲット〟っていったい何なの？」

「そうね。さっきの画面、あれは実はブーマなの」

「というと、まるで人間みたいにセック……いえ、その……イヤラシイことしてた女が、ブーマだっていうのォ？」

「いいえ。そうじゃなくって、女の相手。つまり、あの画像は、ブーマの眼を通して観察された実際の行為なの。こんどの仕事の内容というのは、ブーマの行動パターンを内部からさぐる……かんたんに言えば、ブーマの内部に忍びこむことなのよ！」

3

プリスは愛車のバイクにもたれ、いらだたしげに目の前の建物をにらみつけていた。

雨ざらしの合成モルタル壁がどぶネズミ色に変色した、見るからに怪しげな安ホテルである。〝ターゲット〟のブーマが若い女性とその中に姿を消してから、すでに四〇分が経過していた。さっきまでプリスの立つ狭い小路にも光の腕をさしのばしていた太陽は、いつのまにか西へかたむき、くさったオレンジのような毒々しい赤だけが空の端っこにこびりついて

残っている。
シリアから受けた指令は、まずとにかくブーマらしき者を探しだせということだった。これはそれほどむずかしい注文ではなかった。ADポリスの中にも機器を使わずにブーマと人間を識別するプロフェッショナルがいるが、プリスにはその連中に一歩もひけをとらない独特の嗅覚のようなものとカンの冴えがあった。
が、もうひとつの注文が大変だった。発見したブーマに、けどられないように注意しながら、ある機械――ちっぽけな発信機のようなものだったが――をセットしろというのだ。当然、場所が制限された。人影まばらなところで、敏感なブーマに気づかれずに接触することなど、絶対と言っていいほど不可能だ。そうしてみると、なかなか適当な場所はないものだ。
ブーマが潜伏していそうな場所で、なおかつ見知らぬ者同士が体をぶつけても不自然でないところ――そういう条件を満たす絶好の場所としてプリスが選んだのは、二四時間フル営業のディスコティックだった。ディスコなら、よく気晴らしに踊りに行くし、バックバンドのレプリカンツをひきいて出演することもある。事情はのみこめている。
プリスの表むきの顔は、ライブハウスやロック・パブで歌う、ストリート・ロッカーなのだ。
が、ブーマ探しはそう容易なことではなかった。一軒目のディスコはあてはずれだったし、

二軒目では、これはブーマだと目をつけた相手の首に例の機械をおしつけたとたん、スピーカーの大音響さえふきとばすような悲鳴をあげられてしまった。

シリアによれば、首のまうしろはブーマの感覚器官の死角のはずだった。だが、相手が苦痛に顔をゆがめながら首をおさえた手には、べっとりと血がついていた。人ちがい、いや、ブーマではなかったのだ。ケンカになりそうなところを、やっとのことで逃げだしたのだった。

ブーマをはじめて見つけたのが四軒目。だが、近づくチャンスがなく、今プリスが見張っている安ホテルにシケこんだブーマを発見し、機械の取りつけにも成功したのは七軒目。めったに行ったことのない、比較的高級な部類のディスコだった。

そいつをプリスがブーマにちがいないと判断したのは、あまりに正確でみごとな踊りっぷり。それと、疲れをまるで知らないかのようなタフネスさだった。連れの女のくたびれはてた様子とは、きわだった対照をなしていたのだ。

案のじょう、プリスが機械を取りつけても、一見神経質そうな顔つきとはうらはらに、まゆひとつ動かさずに踊りつづけていた。

プリスの心に疑念がきざしたのは、ブーマが連れの女性といっしょにディスコを出てからだった。シリアに言われた取りつけは成功した。気がかりはそのことではない。

連れの女性は、足どりがおぼつかないくらい疲れていたようだ。酒もかなり入っていたようだ。

ブーマは女性の腰にやさしげに手をまわし、ほとんどその体をささえるようにして、このうらぶれた街区までやって来た。そして、入っていった先が、高級ディスコとはずいぶんおもむきのちがう安ホテル。そのギャップが気になった。

男と女の密会なんてそんなもの、とも思ったが、女の服装はそれほど目立たないわりにはキチンとしており、センスの良さを感じさせる。どう見ても有閑マダムの浮気じゃないし、はすっぱな若い娘のアバンチュールでもない。やはり、男がなかば強引にホテルへ連れこんだと考えるのが妥当なところだろう。

「――にしたって、ブーマが色気づいて女を誘惑したなんて話、聞いたことがないぜ」

プリスは自分に言いきかせるようにつぶやいた。

(あのブーマ、いったい何をたくらんでやがるんだろう……。仕事上の〝ターゲット〟ってことでもなきゃ、踏みこんでって頭をふっとばしてやるのに……)

自分でも気がつかないうちに、プリスは唇を強くかんでいた。

ブーマが人間社会に入りこんでうろつきまわることはもちろん、人間とまぎらわしい格好をすることさえ違法行為だが、だからといって相手がブーマなら好き勝手に破壊していいというわけではない。ましてやこの場合、はたして人間に危害を加えたことになるのか……?

プリスはバイクのハンドルにひっかけたヘルメットに眼をやった。もうとっくにコンピュータのセッティングは終わり、ブーマ内部の組織へのアクセスもすんでいるはずだ。ブーマ

が不穏な動きを見せれば、ヘルメットにしこまれた通信機に連絡が入ることになっている。プリスがいだいた疑念は、さっきの連絡時にシリアに伝えられているのだし……。

「よう、おネエちゃん。変わった格好で客引きしてるじゃねえか」

プリスのそばへ寄ってきたのは、髪を派手な色に染め、シャツをだらしなくズボンからはみ出させた若くたくましい男だった。道の両側を見ると、一見して娼婦とわかる女たちがいつのまにかあちこちにたむろしている。街灯はとっくに使いものにならなくなっているが、けばけばしいネオンサインやホログラムの広告灯の光で、安ホテルに出入りするカップルや、一夜の快楽を求めてやって来た、その男の同類の姿も見えている。

「いくらだい？　相手んなってやってもいいんだぜ」

「おあいにくさま。あたしはそんなんじゃないよ」

「ほー。じゃ、こんなとこで彼氏と待ち合わせか？　ディスコだとかバーだとか、まだるっこしいことはすっとばして、ベッドへ直行ってわけだな。いい心がけだぜ、気に入った。なら、彼氏が来るまでオレがウォーミングアップにつき合ってやっからよ、な、な」

男が酒くさい息を吐きかけてせまってきた。プリスの三倍もありそうな巨体をのしかからせ、無理やり唇をうばおうとする。プリスは思わず顔をそむけた。と、そのとき——。

ヘルメットの通信機から、かすかな緊急信号音がもれた。

4

「さ、三〇〇〇万ですって——！」
コーヒーの入ったマグカップを手にしたリンナが、すっとんきょうな声をあげてソファからとびあがった。そこは、電機系統に弱いリンナが、配線のあまりの光ファイバーや導線が雑然と積みあげてあったのを、まるできたないものでもあつかうようにこわごわした手つきではらい落とし、やっと確保した場所だった。コーヒーがとび散った。
「キャッ、あっつーい！」
リンナの足元、カーペットにすわりこんでいたネネが悲鳴をあげ、片耳にかけていたヘッドホンをほうりあげた。
「たく、リンナったら、お金のことになると夢中になっちゃうんだからァ。仕事の内容のほうは忘れてないんでしょうね？　といっても、コンピュータもろくに使えないんじゃ、こんどばかりは出番がなさそうだけどネ」
ネネはヘッドホンを手元に引きよせながら皮肉たっぷりに言った。
「じょ、冗談じゃないわ。三〇〇〇万もらえるんなら、あたしダンゼンはりきっちゃう。出遅れたばっかりにプリスに先こされちゃったけど、次はあたしの番よ。C系列の戦闘用ブーマを腕づくでつかまえてみせるわ。エアロビクスできたえた華麗なフットワークは、ダテじゃないんだからねっ！」

「そうね、期待してるわよ、リンナ。今アクセスしているブーマは戦闘用じゃなく、どうやら前から噂には聞いていた情報収集用――つまり、スパイ・ブーマらしいからね。ゲノムあたりでは、すでに秘書用とかでだいぶ実用化が進んでいたようだけど、なにしろ目立つところに出てくるわけじゃないから、キャッチしたのははじめて。しかも、その活動の性格からすれば、この『ビー・チップ』みたいなものなしでは正体がつかめたことにならないんだから、これは予想外に大きな収穫よ」

シリアはそう言って積みあげられたコンピュータのほうを見やった。

一二台の大小のコンピュータは、今やフルに稼動している。安ホテルにひそんだブーマの感覚情報器管からひろい集められたおびただしいデータがメイン・コンピュータに流れこんでおり、そのデータは残りのコンピュータに選別されていく。そして感覚別に再構成され、個々のデータ・ディスクに記録されているのだ。

「じゃ、戦闘用ブーマのデータは取らなくっていいの？」

リンナはいささか拍子ぬけした表情で、ふたたびソファにもたれこんだ。

「もちろん、それは必要よ。この仕事の依頼主は、ほかならぬADポリスなんですもの。ブーマの破壊活動にはほとほと手を焼いているし、日々ブーマの犠牲となる隊員の数も増える一方。ADポリス付属の対ブーマ戦略研究所がこの『ビー・チップ』を開発したのも、理由の第一は戦闘用ブーマ対策のためよ。このデータを分析すれば、ブーマの弱点や死角をつ

く兵器を造れるし、実戦における隊員のフォーメーションの研究にも役立つはずなんだからね。リンナの活躍の場は、まだまだあるわよ」

シリアはリンナをなだめるようににっこりとほほ笑み、手の中でころがしていた『ビー・チップ』のひとつをつまみあげた。

黒っぽい楕円形で、長いところの直径でもせいぜい一〇ミリていど。やや平べったくて、吸着用の先のとがった針が一本つき出しているのが目につくほか、ブーマの感覚回線をさぐりあて、そこに侵入してデータを吸いあげる、毛のように細い端子が両側面に三対、合計六本はえている。『ビー・チップ』という呼び名は、その形状から取ったものだろう。昆虫のハチ（BEE）にそっくりだ。

リンナはビー・チップを手のひらに受けとり、鼻の先までもっていった。

「ヘェー、こんなちっぽけなのが、コンピュータ一二台が束んなってとっかからなきゃなんないほどの情報を集められるなんて、オッドロキよねェ。ADポリスの研究者も、やたらものものしいロケットランチャーとか、小回りのきかないゲルリヒ・ライフルみたいな芸のない武器を造ってるだけじゃなかったってわけか……」

虫でもなでるようにビー・チップを指先でいじっていたリンナが、そこまで言いかけたところで顔をあげ、シリアに不思議そうな眼をして問いかけた。

「でも、ちょっとヘンじゃない？　ブーマ退治ってことでいえば、あたしたちナイトセイ

バーズはADポリスの最大のライバルでしょ。先を越されて、いつもジタンダふんでるくせに、こんな大事な切り札をあたしたちにまかせちゃうなんて……」

　そこで、ヘッドホンに聞き耳をたてていた、ADポリス勤務のネネがふり返り、身ぶり手ぶりをまじえて得意そうに説明した。

「ADポリスって警察機構の一部門だけど、元をただせば、ブーマの製造元であるゲノム――つまり、ブーマ犯罪の元凶が、自分たちの造りだしたものが悪用されるのを防ぐ目的で政府に莫大な献金をして作らせた機関だってことは、公然の秘密になってるわよね。金ヅルであるブーマ製造をやめるんじゃなく、自分たちにつごうの悪い使われ方をしたブーマが、自分たちの評判まで落としちゃうことを心配して、それで他人を使って悪いブーマを退治させてる。言ってみれば、たれ流しのまま、ひとに尻ぬぐいさせてるわけよ。ひっどいと思わない！」

「それとこれと、どういう関係があんのよ」

「だからさァ、つまり、その、えーとォ……」

　頭がこんがらかったらしいネネの説明を、シリアが引きついだ。

「こういうことよ、リンナ。ゲノムがADポリスに求めているのは、犯罪を起こしたブーマがさらに暴れまわり、被害が大きくなるのをくいとめることであって、ブーマ犯罪そのものを未然に防いでほしいわけではないのよ」

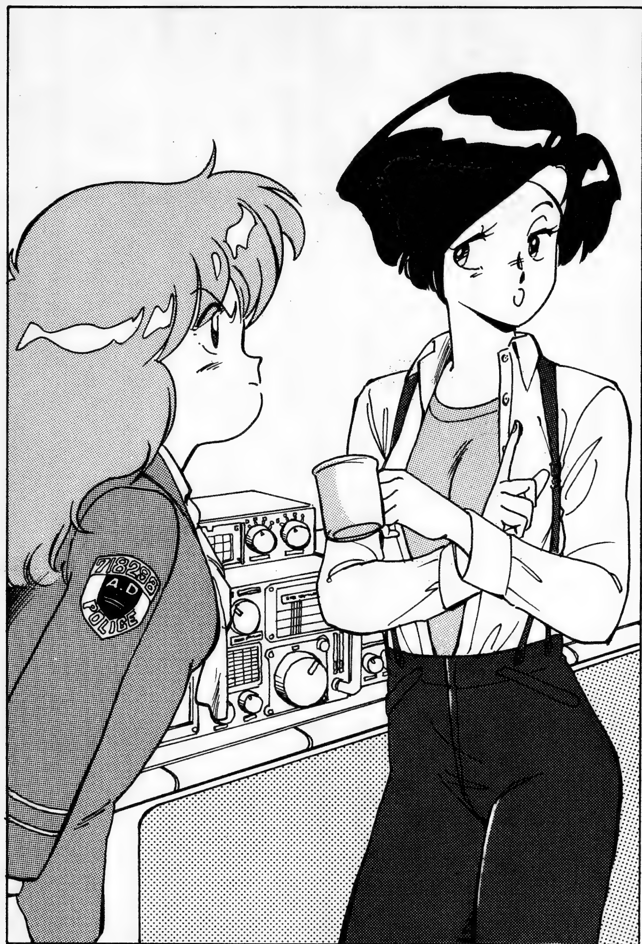
「未然に防ぐということは、つまり……」

「ええ、ブーマが活動できなくする、ということよね。ゲノムの意向はどうあれ、ADポリスの目標はブーマ退治。そのためには、ブーマを見分ける確実な方法や、ブーマが役に立たなくなるほどの強力な武器を発見し、造りだすこと。となれば、まず必要になるのがブーマの性能を知るためのデータ……」

「なるほど。ゲノムとしちゃ、完ペキなブーマ対策をあみだされたら、それこそブーマの商品価値がガタ落ちになってこまるわけね。だからADポリスには、目についた悪ダマを追っかけさせるだけで、根本的な対策は立てさせないように圧力をかけてる、と。すると、このビー・チップは？」

「おそらく、ゲノムには知られないように、極秘のうちに開発したのだと思うわ。でも、実際に実験したり使用したりする段階になると、秘密を数人の技術者の中にとどめてはおけなくなるし、ADポリスの隊員がブーマにこれをつけようとしたことがわかってしまえば、ADポリス自体の存続もあやうくなるでしょ」

「ははーん。それであたしたちナイトセイバーズにおハチがまわってきたのね。まあ、ネコの首に鈴をつけるネズミの役っていう、コワ～イ仕事のわけだ。どおりで、ネネなんかにはスズメの涙ほどのお給料しかくんないADポリスが、三〇〇〇万もの大金を気前よく出すと思ったわよ」


718298
A.D
POLICE

「な、なによ、スズメの涙はひどいじゃないのォ。あたしは堅実に生きてんのよ。あんたなんて、派手な生活しすぎて車のローンでクビがまわんないんでしょ。プリスに聞いたわよ、あんたがまた新しいバイトはじめたって！」

「フン、才能とセンスがなきゃできない、カッコイイ仕事なの！　生活費の足しにナイトセイバーズのギャラをケチケチためこんでるだれかさんには、言ってもわかんないでしょーけどねっ！」

「言ったなァ、このっ！」

「や、やめなさい、ふたりとも――」

ゲンコをふりかざしてカーペットから立ちあがったネネと、マグカップをほうりだしたリンナが、たがいに目をむいてにらみ合った。シリアがあわててふたりの間に割って入ろうとした。

「たいへんだっ！」

いきなり大声を出したのは、マッキーだった。

「画像、元にもどってんじゃない！　このマセガキ、ひとりで妙に静かにしてると思ったら……」

ネネが怒りのホコ先をマッキーにむけた。

「ち、ちがうよ。画面……画面見てっ！」

全員の視線がマッキーの指さすモニターに集中した。

粗末な安ホテルの室内。ナイトテーブルが倒れ、割れた水差しのガラス片が散乱し、床の上は水びたしだ。

画面の中央に、ひざのあたりから血をしたたらせたさっきの女が、ソファにすがりつくように倒れている。

「なにが起こっ……」

リンナが口をはさもうとしたとき、画面の中の全裸の女が、乱れて顔にかかった髪をふりはらうようにこちらにむき直った。両手でささげ持つようにかまえているのは銃だ。

そのとたん、画像がグラグラと揺れだし、恐怖にひきつった女の顔が急速にアップになっていった。ブーマが突進しているのだ。

シリアがスピーカーをオンにするのと、女が銃のトリガーをひきしぼるのが同時だった。

安ホテルからはそうとう距離のある屋上住居に、ロケット弾でもぶちこまれたかのような轟音が響きわたった。

5

通信を受けとったプリスは、むかいの安ホテルめがけて走りだした。

からんでいた男が、なんのことかわけのわからないままプリスに追いすがり、狭いロビー

のところで腕をつかんで引きとめた。
「あんたにかまってるヒマなんてないんだよっ！」
「待ちなったら。ホテルは、女のひとり客じゃ入れてくんないぜ。オレがいっしょに行ってやっからよ」
「勝手におしっ。ついでに料金もはらっといとくれ！」
カウンターで足止めされた男をしりめに、プリスは非常階段を駆けあがった。
五階まで昇ったところで話し声が聞こえた。通路のまん中あたりに数人の男女がかたまって声高に話しあっている。あわてて部屋をとびだしてきたとみえ、シーツを体に巻きつけた女がひとりいるきり、あとは男も女もみんなすっ裸だ。
「銃声は、どこ？」
プリスの問いに、全員がこちらをふり返り、革ツナギをしっかり着こんだプリスのほうをかえってめずらしいものでも見るように、ジロジロ眺めた。
プリスがブーツにしこんだ小型のレイガンを引きぬくと、ひとりの男がやっと正気にかえってあわててみっともない部分を手で隠し、もう一方の手でひとつのドアを示した。
「こんなとこにいたのか、ネエちゃん。何事もアセリは禁モツだぜ」
派手に染めた髪をふり乱し、さっきの大男が階段のところに現われた。
銃声のした部屋のドアは、当然のことながらカギがかかっていた。

「あんた、このドアぶち破れる？」

「オウ。ネエちゃんのためなら、たとえ火の中水の中だい」

むかいの部屋のドアが開きっぱなしになっている。銃声に驚いてとびだした裸のカップルのどれかの部屋なのだろう。男は助走距離をとるためにそこに入りこむと、呼吸をととのえて一気に突進した。

——バキッ！

ドアがまん中で割れ、勢いあまった男の巨体が、もんどりうって部屋の中にころがりこんでいった。

「げっ、ブーマっ！」

男のひきつったような声が聞こえたと思うと、次の瞬間、部屋の中がものすごい轟音とともに爆発した。中にむかってひしゃげていたドアが、紙のように廊下側へはねかえされ、そのすぐわきに立っていた全裸の女を直撃した。

プリスはとっさに床にふせた。

と、つづいて起こった二次爆発は、ドア口いっぱいに火柱を吹きあげた。

プリスの目の前に、部屋の中からとばされてきた黒こげのかたまりが落ちた。腕時計をしたままの、女の腕だった。その時計バンドの止め金が、ま近に光をはなった。

そこに刻みこまれたマーク、それだけを脳裏にしっかり焼きつけると、プリスは体を反転

させ、ころがるように階段を駆けおりた。

壁にたたきつけられた男や、失神した女、狂気のように逃げまどう者たちも、ひとりとして救いだす余裕はなかった。命からがらホテルの外へ脱出し、やっとバイクまでたどりついたプリスがふり返ると、安ホテルの五階以上はすでにまっ赤な炎につつまれていた。

ぜいぜいと息をきらしたプリスは、それでもなんとかヘルメットから通信機のマイクを引っぱりだし、ささやくように声を送りこんだ。

「ブーマに殺られた女、あいつ……ゲノムの社員だぜ！」

二章

1

七インチの小型モニターが、ゆったりとカーブした金属壁にそってびっしりと埋めこまれているのが見える。残りの壁面をしめる計器類のランプ、発光ダイオードの小さな光が点滅し、その壁面自体と、前面に広がる狭苦しい空間の存在を知らせてくれる。

が、そのわずかな空間も、さまざまな色にコーティングされたケーブルや光ファイバーの束が複雑にからみ合い、むぞうさに積めこまれている。

モニターに映しだされた画像のいくつかが、ときおり思いついたように切りかわる。そのたびに、焦点を合わせるジーッというかすかな音がどこかからともなく聞こえてくる。

その音を聞く者は、どこにも存在しない……する場所すらないのだ。

なのに、なぜモニターがあるのかといえば、それはこのシステム全体が実際に役目につく以前、システムが作動するかどうかのチェック用に必要だったからにすぎない。

ここは、最初から無人だった。生命あるものを探すなら、ここから二〇万メートル以上も下らなければならない。

——そう。ここは地上からはるか上空に浮かぶ、人工衛星の内部。それも、ＵＳＳＤ（防

空宇宙軍）の誇る、軍事用ビーム軌道衛星の中枢部なのである。

モニターの画像は、どれも上にむかって動いている。これは、衛星のカメラが正確に北から南へとたどっていることを示している。

モニターによって移動速度がことなるのは、もちろん、像の倍率の差によるものだ。極大の広角なら、地球の端から端までが、完全にひとつの画面におさまってしまう。逆にセンチメートルの単位まで探査する画像をそのままリアルタイムで映しだせば、あまりの速さに、とうてい人間の眼では内容を追うことはできない。その場合には、ある地点、地点を選び、静止画像として伝えるのだ。

ＵＳＳＤの所有するビーム軌道衛星の数は、二〇三二年現在、約二〇〇といわれる。宇宙工学の発達によって、無人衛星でも、自己修復機能、軌道修正装置が飛躍的に改良されたことからすれば、おそらくそのほとんどが正常に稼動しているはずである。

二〇世紀後半、核兵器の脅威がさかんに取りざたされた時期、核兵器をある伝説にたとえて言うことがあった。昔、ある国の王は、強大な権力の座のあやうさをみずからにいましめるため、玉座のま上に鋭利な剣をひとすじの髪の毛でつるしていたという。核を所有する超大国は、たがいに相手の頭上に剣をつるして警告しあい、それによってどちらかが最終戦争にむかって暴走することを抑止していたというのだ。

そのたとえが適当であるかどうかは、ここではどうでもよい。

問題は核兵器の上に、さらにビーム軌道衛星という新たな剣が加わったことである。たしかに、ビーム軌道衛星は、核ミサイルがどこから打ちだされた場合でも、かならず二〇〇個の衛星のいくつかが自動的にその弾道をサーチし、二分以内に確実に撃ち落とすというすぐれた機能を持っている。

が、逆に、地上物なら誤差数センチメートルの範囲で目標を正確に射抜く、強力なレーザービーム砲をそなえたビーム軌道衛星は、それ自体、人類にとっては、ある意味で核兵器以上に恐るべき存在であった。

なぜなら、核兵器であれば、現在の科学力をもってすれば直撃さえまぬがれれば生きのびることは十分可能であるし、主要都市、軍事施設でもないかぎり、まず直撃にみまわれる心配はない。しかし、ビーム軌道衛星は、特定の個人さえ識別して追跡してくるのだ。一生地中深くひそむのでもなければ、のがれられる可能性は皆無にひとしい。そのうえ、この条件は地球上であるかぎり、どこでもまったく同じなのである。

かつてひとりの王の生命だけをおびやかしていた剣は、いまや世界のすべての人間ひとりひとりの頭上にきらめいているのだ。

そのビーム軌道衛星のひとつが、現在、東経一四〇度のライン上を、南へむかってカメラをゆっくり移動させている。

北極海から陸地に入るとまもなく、さかんにフォーカスを合わせる音が、ジージージーと

うるさいほどに連続して起こる。起伏のはげしい、東シベリアの山岳地帯にさしかかったのだ。同時に、モニターの画像切りかえもひんぱんになる。画面を小動物が駆けぬけたときなど、一瞬静止画像になり、正体の確認をすることもある。

やがてカメラはオホーツク海に出て、タタール海峡をなぞるようにして南下する。日本海に入ると、次に見えてくる陸地は日本である。北海道と東北の西端をかすめ、本州へ上陸し、山地をへて関東平野に進んでいく。

システム全体が急にいそがしく活動しはじめたのは、日本のハイテク・センターとして一時世界的にその名をはせた、技術集積都市・筑波エリアにさしかかったからだ。いくぶん整然とした街区となってはいるものの、印象は五〇年前の東京を思わせる混雑ぶりだ。実際、東京がＴＯＫＹＯとなってしだいに日本から遊離していくにつれ、事務的レベルの司法、行政機関などは、もっと生臭くて巨大な権力システムや経済システムに追いたてられるように、筑波へと移ってきていた。

だが、そこには、かつての東京がもっていた、人を何かにむかってやみくもに駆りたてるようなものが欠落していた。ビーム軌道衛星は、主要官庁、研究所などのお決まりのチェックポイントの探査を終えてしまうと、ためらうようすもなく筑波を通過していった。

筑波の南端からほんのわずかな距離をへだてただけで、まったく印象の異なる街区に入る。外縁をそこまで拡大してきている巨大な都市とは、もちろん現在のＴＯＫＹＯであるが、そ

れより「ティンセル・シティ」と呼ぶのがもっともふさわしい地帯のことである。

2

日本は今、一日のうちでもっとも感動的な時刻をむかえようとするところだった。夕暮れである。

ビーム軌道衛星の画像では、東経一三〇度から一五〇度までをカバーするものを選ぶのがいちばんわかりやすい。その範囲でなら、東は北海道のエトロフ島から、西は九州の長崎まで、ほぼ日本の全エリアを一望のもとにとらえることができるからだ。

東から進行してきた夕暮れは、北海道の全域を闇の中にのみこみ、三陸をはじめとする東北地方の海岸線を侵蝕し、南北に垂直にのびる直線をゆっくりと西へ移動させていく。

もっと拡大した画像では、昼と夜のせめぎあいがさらに鮮明に見てとれる。

光と闇の境界線が近づく前に、まず、山岳地帯に最初の変化が現れる。山々の東側に水がしみこんでいくように点々と沈んだ色の部分が生じ、じょじょにその色を濃くしながら影を拡大していく。山腹をおおいつくした影は、あっという間にふもとまで飲みこみ、やがて一定の速度になって平野部を東へ東へとのびていく。そして西にむかってきた巨大な闇と出会い、ついには薄暮にかろうじてとどまっていた部分までをそのふところの中に抱きとめてしまう。夜の完成である。

ティンセル・シティを中心とする関東マス・エリアは、西側にさしたる山脈がないため、なかなか夜にならないように見える。が、事情はそれだけではない。巨大都市の発散する莫大なエネルギーが上空にわだかまり、太陽光線を乱反射しているために、すっきりした闇が広がりにくくなっているのだ。

同時に、闇の接近にそなえるかのように、つぎつぎと街の明かりが点灯していく。闇を拒否する都市全体の光の量は、月面からでも肉眼でティンセル・シティの位置を認めることができるほどだという。

しかし、ビーム軌道衛星にとっては、そのように感動的な眺めもまったく問題にならない。それどころか、この位置にさしかかったときこそが、もっともいそがしく全システムが作動する瞬間なのである。

チェックポイントの数は、筑波の場合の十数倍にもはねあがる。さらに太陽光線の残光の干渉も加わっているため、探査はあつい雲がおおったとき以上に困難をきわめている。

地上では、夕暮れの太陽はくさりかけたマンダリンのようにどぎつい色をしていたが、はるか上空から見おろすティンセル・シティは、その太陽光線に美しく照りはえて見えた。そこでひときわ目につくのは、南北にみにくく折れまがりながら走る巨大な亀裂である。

七年前、関東マス・エリア一帯を恐怖のどん底につき落とした、第二次関東大震災。それが残した鋭いツメ跡、大断層だ。

それと、かつて「副都心」と呼ばれた旧新宿——現在の六区にそびえる、超集合企業体(スーパーコングロマリット)GENOM(ゲノム)の牙城(がじょう)である、巨大なゲノムビルの偉容(いよう)である。

ゲノムと対抗(たいこう)する一方の権力システムの雄(ゆう)であるUSSD。そこに所属するビーム軌道衛星(きどうえいせい)のスキャニングは、当然、ゲノムビルをはじめとするゲノムの諸施設(しょしせつ)を中心に行われることになる。

が、このときティンセル・シティのま上を飛んでいたビーム軌道衛星NO一二六は、日没時(にちぼつじ)という、探査(たんさ)のもっともむずかしい時間帯にぶつかったこともあって、重要な見落としを犯していた。それが、この事件におけるもうひとつの因子(ファクター)だった。

NO一二六が規定のチェックを完了したころには、すでに衛星の本体はティンセル・シティのはるか南、小笠原諸島(おがさわらしょとう)上空にさしかかっていた。それ以上、ティンセル・シティのスキャニングを続けることは不可能だった。次の軌道衛星がシベリア上空を南下しつつあり、NO一二六はテリトリーをそちらにゆずって、ゆっくりとニューギニア、オーストラリア方面へと去っていった。

3

ビーム軌道衛星(きどうえいせい)NO一二六からUSSDに届けられた、ティンセル・シティ関連の最終レポートは、第一一区、旧渋谷エリアの専用居住区域(ハビテーション・ゾーン)における火災(かさい)だった。

それは、ただちに情報公開チャンネルにのせられ、混乱した火災現場からの通報よりもはやく都市防火組織の出動をうながす情報となった。

プリスからの連絡の直後、シリアたちがファッション・ビル最上階のペントハウスで確認のために参照した情報も、それと同じものだった。

「ブーマ、自爆しちゃったってこと？」

ネネが、コンピュータ・コンソールで情報公開チャンネルにアクセスしているマッキーの肩ごしに、モニターに映しだされた静止画像をのぞきこみながらたずねた。

画面中の狭い路地には、半裸の男女や遠目にもその手の商売女とわかる派手な服装の女たちがパニック状態にひしめきあい、プリスのバイクらしきものは映っているが、プリスの姿は人混みにまぎれて判別できない。

「よかったァ。これだけ混乱してたら、きっとプリスはＡＤポリスにつかまったりはしてないわよね？」

ネネの質問などどうでもいいとばかりに、横から割りこんだリンナがマッキーをせかした。マッキーがテン・キーで位置指定し、路地の部分をつぎつぎと拡大していったが、はっきりプリスとわかる人影は見つからない。

「だいじょうぶだよ、リンナさん。バイクのナンバープレートから車体番号まで、ちゃんとあらかじめマスキングしておいて、プリスさんはわざと人混みにまぎれこんだんだよ。さ

っすが、プリスさんは抜け目ないなー。でも、なんでプリスさんのこと、リンナさんはそんなに心配すんの？」

「そ、そりゃ、大切な仲間ですもの。心配すんのはとーぜんじゃない」

リンナはあわててとりつくろった。

「アーラ、そうかしらね。お金のことと自分のことしかアタマにないリンナが、ひとのことまで気にするわけないもんね。知ってるわヨ、プリスをダシにして、またお金もうけをたくらんでるんだってね。なんであたしを誘ってくンないのよぉ」

「ネネ、あんたみたいなブリッ子がはやったのは、日本中の人間がのんびり太平楽きめこんでた何十年も昔のハナシよ。危険と退廃ムードにみちた混沌のティンセル・シティじゃ、相手にされっこないわ」

「フンだ！」

ネネは機嫌をそこねてリンナのそばをはなれ、一台のコンピュータにむかっているシリアのほうへ行った。

「何してんのかと思ったら、シリアも悪シュミねェ。さっきのブーマのポルノ場面なんか再生して。まさか、男にウエてんじゃないでしょうね？」

ネネのことばに、きびしい表情でモニター画面に見入っていたシリアの口元が、ほんのわずかにほころんだ。

「たとえそうだったとしても、この画像がブーマの冷たい視線だと思うと、色気もふっとんでしまうわ。そうじゃなくてね、さっきのあなたの質問、わたしも気になってたものだから調べてたのよ。どうやら、ブーマが爆発したのは、自爆じゃなさそう。いいこと？　ちょっとここを見て――」

そう言うと、シリアはキーボードを操作し、あるところからスロー再生にした。

女がソファから顔をあげ、ブーマに銃をむけたところだった。正体を知られたブーマが一瞬にして人工皮膚を脱ぎすてたのが、とび散る人工皮膚の断片と黒くぶきみに光る鋼鉄の手が画像の端にちらりと現われたことでわかる。

作りもののビデオ・ムービーなどとは、緊迫感がまったくちがう。リアルタイムで見たときは、女の悪あがきとしか見えなかったが、銃はピタリとブーマの眉間にむけられている。つまり、画面をまっ正面から狙っているのだ。荒い息を吐き、むきだしの豊かな胸を波うたせているというのに、銃口のブレもほとんどない。女の血走った両眼に見すえられると、ネネの背すじがゾクッと恐怖にふるえた。

「も、もしかして、この女の撃った弾が一発でブーマを倒しちゃったなんて言うんじゃないでしょうね？」

「その〝もしか〟らしいわよ」

シリアはつぶやくように言った。



いつのまにか、リンナとマッキーも、画面に吸いよせられるようにネネのうしろに来て、じっとモニターをのぞきこんでいた。

「プリスはたしか、女の腕時計にゲノムの社員章が入ってたって報告してきたんでしょ。すると、ゲノム内部にも、ブーマ狩りのプロが現われたってこと!?」

リンナが思わず声を高めてシリアにたずねた。

「いえ……そういうこととはちがうと思うの。彼女の構えや呼吸の乱れ、あれはプロのものじゃない。それに、プロなら銃をつきつけてからあんなに時間をおかないわ。その間、ブーマとの会話もないんだし……」

「けど、たった一発で、しかもこの様子じゃ、迷わずブーマの急所を狙って倒してることになるじゃない。素人にこんなマネできる?」

ネネが、納得できないという表情でシリアにつめよった。

「そこよ、ネネ。女の相手は、情報収集用のスパイ・ブーマ。で、女自身はゲノムの社員だったとなれば……」

シリアが言いかけたとき、リンナが両手を打ちあわせた。

「わかった！　この女、ブーマ開発室の研究員だったのよ。ブーマは新しい機密を盗みだそうと女に酒を飲ませ、ディスコにまで誘ってフラフラにした。前後不覚の女を怪しげなホテルに連れこみ、寝物語りのうちに何か聞きだそうとした。ところが女は、男がブーマだと

気がついた。ブーマの弱点なら知っている。おびえながらも、なんとか護身用の銃を取りだして、その弱点をついて倒した……。どう、名推理でしょ？」

「女が研究員かどうかはわからないけど、情報用ブーマの弱点を知っているほどの地位かセクションの人間だったことはたしかね。あとは、リンナの推理でほぼ合っていると思うの。ブーマの思考系統にアクセスするのはむずかしいようだけど、会話の内容をサーチすれば、ブーマが女から何を聞きだそうとしたかはわかるはずよ。それは、近日中にわたしがなんとかやっておくわ」

「やったネ♡　じゃ、あたしプリスと待ちあわせてるから、お先に――」

リンナはそう言うと、最新流行の小ぶりのポケットバッグをつかんでエレベーターのほうへ行きかけた。

「ちょっと待って、リンナ」

シリアがリンナを呼びとめて立ちあがった。

「こんどはまああの成果だったけど、ブーマにこの『ビー・チップ』を取りつけないことにははじまらないわ。いつチャンスがめぐってくるかわからないんだから、リンナもこれを一個持っていって。それと、プリスに会ったらごくろうさんって言っといてね」

リンナは受けとったビー・チップをポケットバッグの中にほうりこみ、元気よく屋上住居から出ていった。

4

ビーム軌道衛星NO一二六が見落としたものとは何だったのか？

時刻にするとティンセル・シティ標準時一八時〇七分、第六区と一一区の境界あたりで安ホテルの爆発、炎上という事件が起こったのとほぼ同時刻に、ティンセル・シティの南の海面付近であるものが動いたのである。

安ホテルの爆発を先に察知しカメラをふりむけたのでなければ、ビーム軌道衛星は、わずかな動きを見せただけのものとはいえ、あきらかに異物であるそれをキャッチしていたかもしれない。それくらい微妙なタイミングだった。

が、見方を変えるなら、それはビーム軌道衛星がもっとも察知しにくい夕暮れどきを見はからい、しかもビーム軌道衛星がティンセル・シティの探査を完了し、次のビーム軌道衛星が上空にめぐってくるまでの空白を狙って動きだした、と見えなくもなかった。

いずれにせよ、それは、ビーム軌道衛星以外には察知できない場所を、ゆっくりと、慎重に進みはじめた。

ティンセル・シティの南、トーキョー湾エリアは、その約半分を埋めつくすように、鋼鉄の塊りが占めている。水上都市である。その西の端、カワサキ・インダストリー・ゾーンから水上都市にむかって注射針のように架けわたされた、リバーフロント・ブリッジ付近——位

置はそのあたりだ。
しかし、目標となるはずの水上都市やブリッジは、すでに形骸と化している。海面上に現われている部分にいたっては、直径数メートルもの鉄骨がアメのようにグニャグニャ曲がりながら天をさし、鋼板は巨木の根がびっしりとはった地面のようにボコボコとみにくいスジが一面に走りまわっている。さらに、中央付近は見るも無残な爆発のあとが、なまなましい大穴となってドス黒い海水をたたえている。ビーム軌道衛星に発見されなかった原因のひとつは、それが膨大な残骸にまぎれていたこともある。
リバーフロント・ブリッジは、数か所ある他の幹線ブリッジ同様、トーキョー・ベイ・エリア再開発プロジェクトの挫折によって水上都市が放棄されると同時に封鎖された。
しばらく前までは、そのブリッジはバイク少年たちのかわいらしい〝戦場〟だった。意味のない陣取り合戦がくりかえされ、危険なゲームも流行した。夜が来るたびにかならず、三つ四つと小さな影がブリッジのガードに新しい破れ目をつくり、眼下のよどんだ水面に消えていった。最後まで愛車と一体になったままとびこんでいった場合には、勝負は負けでも、〝至上の幸福〟と呼ばれ、敵味方の別なく祝福されたという。ティンセル・シティ市警が毎朝あわただしく発表する、都市犯罪による死亡者の中にも事故死者の中にも、ほとんどくり入れられることのない死者であることからすれば、その死を当事者たちが「幸福」と呼ぼうが「不幸」と呼ぼうが、自分の生命を自分の手で燃やしつくす自由だけは彼らに保証されて

いたわけである。

だが、その自由を彼らから取りあげてしまったのは、かつてリバーフロント・ブリッジのゲームでは無敵を誇る女王だったプリスを含む、ナイトセイバーズだった。

正確には、ブーマの一団と対決したナイトセイバーズの眼前で、水上都市全体を体の部分として取りこんでしまった、融合機能をグロテスクに進化させた特殊化ブーマを、USSDのビーム軌道衛星が撃ちぬき、破壊してしまったのである。

リバーフロント・ブリッジも水上都市と運命を共にし、ゾウの鼻のように先端を海中につっこみ、大きく傾いてしまった。こうしてバイク少年たちの〝戦場〟は失われた。

ナイトセイバーズが取りあげた、という表現は適当ではないかもしれない。が、あの事件によって、〝至上の幸福〟と呼ばれた、ちっぽけでささいな、勝手な「死」を死ねる権利をうばわれた少年たちがいることを、ブーマがはたして知るだろうか？　ビーム軌道衛星群は、地上をセンチメートルきざみで探査していて、海につっこんでいく果敢な少年たちを発見しても、救出の手をさしのべることはおろか、報告することさえなかった。事件現場の写真をパラパラとめくりながら、みにくくひしゃげたリバーフロント・ブリッジを見つけてしばらくもの思いにふけったのが、ナイトセイバーズのひとり、プリスだけだったことからすれば、彼女たちが取りあげたと言えないこともないはずである。

5

そのリバーフロント・ブリッジの、海中につっこんだ鼻先のあたり。大震災で機能マヒした汚水処理システムのつけをモロにこうむったドス黒い海水の中を、ひとつぶの気泡さえもらさずに、それは進んでいた。ブリッジの崩れた橋げたのあいだをくぐりぬけ、折れかさなった水上都市の残骸にそって身をひそめるように北上している。

その物体の中では、いくつかの人影がモソモソと手足を動かしている。どうやら着がえをしているらしい。だが、どういうわけかそこは真の暗闇だ。

カチッと物音がして、小さな明かりがともった。

「なんだ？　ジェーン」

筋骨りゅうりゅうとしたひときわ巨大な体格の人影がふりむき、低くかすれた声で言った。

光の中に女の首だけポッカリ浮かんだ、ぶきみな光景がそこにあった。

「ティンセル・シティの市街戦略データばっかりインプットされたあんたの頭じゃ、理解できないのももっともだけど、ティンセル・シティの女の子には常識のメイクアップ・セットよ。ほら、こんな暗闇でもメイクできるでしょ。ほんとは野外デート用なんだけど、明かりを落としたベッドルームでも役に立ちそうね」

光を発しているコンパクトから顔もあげずに、髪をこまかくウェーブさせた女が、いそがしげにパッドをほほにたたきながら言った。

「フン、明かりなんかなくても化粧くらいできるだろうに」
「それじゃ、正体を自分からバラすようなもんじゃない。さ、あんたになんかかまってられないのよ、ガルシア。はやくティンセル・シティの最新流行のメイクを仕上げちゃわなきゃ……」
鏡に見入った女は、うすい唇をわずかに横にまげてほほ笑んだ。ドキッとするほど残虐な表情が、ほんの一瞬、その美しい顔を悪魔に変えた。

6

――ブロロロロロロロォ、ブロロロロローッ。
バイクの爆走音が、なまぬるい海風をふるわせて聞こえてきた。
「おう、やっとわれらがロック・クィーンのご登場だぜ！」
歯の抜けたようにところどころガラスの割れた窓から首をつきだした少年が叫んだ。きれいにオールバックになでつけた髪が乱れるのもかまわず、少年がパイプの階段の手すりにまたがって下へおりると、バイクは正面の大扉のあいだからすでに建物の中にすべりこんでいた。
「遅いぜ、プリス。大事な日だってのによォ」
黒い楽器ケースに腰かけていた男が、ノロノロした動作で立ちあがりながら、不満げに言

った。

高い天井に声が反響する。ここは、湾岸ぞいに建ちならぶ倉庫のひとつなのだ。ベイ・エリア再開発プロジェクトがスタートしたころ、しばらくは資材置場とかに使われていたということだが、輸出入の主流がベイ・エリアの奥深いこのあたりまでは入りこめない超大型シーボックス船や空輸に移ったこともあって、倉庫はどれも、得体の知れない品物の備蓄庫や、こんなふうな空き屋になってしまっている。

「大事な日だって？　だったら、やる曲の選定からアレンジまで、ちゃんと打ち合わせはすんでんだろうね。新調の革ジャン着こんでめかしこんでるヒマがあったんならサ。え、どうなんだい？」

プリスはそう言って男のゴワゴワした革ジャンのえりを指先ではじいた。

「だ、だって、リーダーのプリスが来ないんじゃ……なあ、おい」

男はさっきの口調とはうって変わって口ごもると、同意を求めようとうしろをふり返った。そこにいるのは口ヒゲをたくわえたガッシリした男だ。

「そ、そうさ。けど、楽器のチューニングはバッチリやっといたよ。プリスがどんな曲やるって言いだしても、オレたちちゃんとバックアップするからさあ……」

体格に似合わず、高くうわずった声で男が答えた。ヒゲなんかはやした見てくれのわりには、一〇代のなかばをやっと過ぎたばかりというところらしい。

「わかったよ。じゃ、出かけようか。約束の時間に遅れちゃ、あんたたちの夢もパーだからね。こいつは、もう使いモノになんないんだろ？」
プリスは、ガレージの端に停めてあるオンボロのトレーラーのタイヤを蹴とばすと、倉庫の外へスタスタと歩きだした。
そのあとを、プリスのバックバンド、レプリカンツの四人のメンバーが、それぞれの担当楽器をあわててかかえあげて追っていった。
プリスは倉庫街を抜け、市街地との境界を走っているキャナル・ストリートの上に出た。そこでやっとプリスに追いついたレプリカンツは、プリスが楽器もろとも全員を乗っけてくれそうな大型車を探しているものと思いこみ、やれやれとばかり重い楽器類を道路のわきにおろした。ところが、プリスは、車の波がちょっと途切れたと思うと、さっさとむこう側へわたっていってしまったのだ。
「プリース、どこ行くんだよォ！」
レプリカンツがあせった声でプリスの背中に呼びかけた。
わたりきったところで、プリスはくるりとふり返った。
「他人の車の中で、打ち合わせや音合わせできると思ってんの。いいから、あたしについといで！」

7

「なーるほど、こいつァ、いいや。広さはたっぷりだし、黙ってても目的地のまん前まで運んでくれる」

「気がねもいらねえしな。なにより、安いのが最高だぜ！」

「さすがプリス、グッド・アイデアだよ」

レプリカンツは、口々にわめきながらホバー・バスの窓から楽器を投げこんだ。

ホバー・バスは、七年前に第二次関東大震災が起きた直後に導入されたものだった。マグニチュード八クラスの大地震によって、ティンセル・シティは一時、復興は不可能とまで言われたほどの打撃を受けた。とくに都市機能の要である交通は、ティンセル・シティのほぼ中央を南北に切断する形で生じた、最大落差五〇メートルにもおよぶ大断層のために、回復が大幅にてまどった。そこで、とにかく市民の足だけは最優先に確保しようということで使われだしたのがホバー・バスだった。

ホバー・バスは、断層を越えていくことができるのはもちろん、地震直後にはあちらこちらに残っていた道路の亀裂、倒壊した橋、道路をふさぐ建物のガレキも、なんの苦もなくのり越えて大量の人々を乗せて走りまわり、ティンセル・シティ復興のシンボルとまで言われたものだった。

が、道路の整備が進むにつれ、そのノロさと図体の大きさのせいで、ほんの数年のうちに、

迷惑このうえないジャマ者とされてしまった。
今では、陸のただ中にありながら孤立しはじめている地域に乗り入れたり、生活居住区域から生産工場区域への通勤用定期便の路線がわずかに残るだけだ。
プリスたちが乗ったホバー・バスは、キャナル・ストリートぞいの人口減少地帯から、断層のま下に点在する通称〝斜陽街〟と呼ばれる陽のあたらない孤立地域を結んでいく、定期路線バスだった。福祉局の経営だから、料金は格安で、最近仕事にあぶれて金に不自由しているレプリカンツにはもってこいだった。
「それにさァ、こんな経路があるなんて意外だったよな。放送局が取ってくれた貸スタジオまで、こんなノロノロ運転でも三〇分もあれば着いちまうんだぜ」
「おまけに、インダストリー・ゾーンから帰ってくる連中とは逆方向だから、ガラガラ。心おきなくドラムをたたけるってわけだ」
そのとき、目の前に三階建ての超高速高層道路が現われ、ホバー・バスは「障害物を越えます、どなたもお気をつけください」という合成音声とともに最初のホバリングにうつった。
「このアナウンス、覚えてる。ガキのころ乗ったときとおんなじだ」
「超高速が〝障害物〟とは痛快じゃねえか。このバスにとっちゃガレキの山や断層と変わんねえんだぜ！」
浮きあがっていくホバー・バスの揺れに合わせてシートの上で体をゆすりながら、レプリ

カンツはみんな、子供のように歓声をあげた。

プリスはひとり最後部のシートにもたれ、あの七年前の大地震がぶり返したかのように揺れているティンセル・シティの夜景をぼんやりと眺めていた。

あのとき……。

あのとき、すでに孤児院に入っていたプリスは、火災の発生した孤児院を夢中で脱出したのだった。先導していた先公どもとは、いつのまにかはぐれていた。いや、自分から集団をはなれたのかもしれない。なぜなら、金持ちや権力者どもが、いかにも善人ですよってツラをして食い物や服を与えてくれるのがたまらなくいやだったし、サンルームで日なたぼっこをして過ごすような安楽の毎日もガマンできなかった。

だから、ガレキの街へとびだしたプリスは、解放感を体いっぱいに受けとめたものだった。街には、両親とはぐれた子供がめずらしくなく、自分から求めでもしないかぎり保護施設に入れられることもなかった。

しかし、プリスには連れがひとりいた。プリスを姉のようにしたっていつもくっついて歩いていた女の子だ。ふたりは、食料を求めて廃墟と化したティンセル・シティを歩きまわった。一〇歳を一つか二つ過ぎたばかりだったが、早熟だったプリスは、生来の野性的な生活力も手伝って、その子を養いながら数か月も生きのびた。

だが、破局は突然やって来た。

ある日、荒くれ者の日雇い人夫にまじって働いていたとき、夕方プリスをむかえにきたその子が、うっかり「おネエちゃん」と呼びかけてしまったのだ。髪を短く切り、ふくらみかけた胸にタオルをきつく巻いて、プリスは少年のふりをして働いていた。その苦心が、少女のたったひと言で、もろくも崩れてしまったのだ。

『そうか、女だったとはなァ。よくも今までだまし通してくれたもんだ』

『おっと、仕事を取りあげようなんて気はねえよ。それどころか、みんなでちょっとずつ小遣いをやろうっていうんだ』

『そうとも。あの掘っ立て小屋の中に寝ころんで、一時間もガマンしててくれりゃいいのよ……』

陽に焼けた半裸の汗くさい男たちが、下卑た笑いを口の端に浮かべながら、われがちにプリスにむかって手をさしのべてきた……。

ホバー・バスが、ドスンというにぶい音をたてて着地した。プリスは、ハッとわれにかえった。

「ひぇーっ。やっぱ、年代物に乗るのは命がけだぜ」

シートからころげ落ちたレプリカンツのひとりが、情けない声で言った。

空圧機がシューシューやかましい音をあげ、すぐに動きださないので、故障かと思ったら、そこが停留所だった。ドアが開き、ハンチング帽をま深にかぶった、うす汚ないオーバーオ

ールの子供がひとり、おずおずした眼つきで乗りこんできた。

「エレン！」

プリスは思わずその子供にむかって叫んでいた。

たった今、自分がひたっていた思い出――その中に出てきた、自分にまとわりついてはなれなかった少女と、そっくりだったのだ。あどけなさの残る横顔、プリスを探すときとそっくりの不安そうなまなざし……服装まで、プリスが少女にさせていた格好に似ていた。

「知り合いの子かい？　プリス」

レプリカンツがきょとんとした眼でふたりを交互に見やった。

「い、いや、人ちがいらしい」

プリスはあわてて打ち消した。

その子供はますます不安げな表情になり、バスが発車した勢いで、倒れこむように手近のシートにかけた。

「なァんだ、そうか。いきなりプリスが叫ぶから、びっくりしたよ」

レプリカンツのあいだにまぜっかえすような笑いが広がった。

「あんたたち、そんなことより、選曲は終わったのかい？　スタジオに着くまでにアレンジも決めとかないと、時間内にレコーディングできないよっ！」

プリスがピシャリと言うと、レプリカンツはそれまでのはしゃぎぶりがきまり悪くなった

のか、黙ってモゾモゾとケースから楽器を取りだした。

やがてガヤガヤと相談がはじまり、プリスは、ギターのつまびきやドラムの乱打がホバー・バス中に反響するのをなんとなく聞きながら、前のほうの席にすわったさっきの子供をもう一度見つめた。

レプリカンツが変に思ったのは当然だった。プリスが「エレン」と女の名前で呼びかけた子供は、どう見ても男の子の子にしか見えなかったのだ。

（エレンのはずがない。だって、エレンはあたしの二つ年下だったんだから、生きていれば、もう一六、七の立派な大人の女になってる。そう、生きていれば……）

エレンは死んだ。

屈強の男たちに服をむしり取られていくプリスを見て、エレンは何が起こっているかもよくわからないまま、プリスを救おうと男たちにむかっていったのだ。眼を血走らせた男にたわいもなくはらいのけられ、掘っ立て小屋の横の深い穴に落ちていった。

プリスは半狂乱となり、手近な鉄棒をつかんでふたりばかりなぐり倒した。残りはあわてふためいて逃げ去った。エレンは頭を打って即死だった。プリスはなきがらを別の穴を掘って埋め、小さな、そして、すぐにブルトーザーに踏みつぶされたであろう、十字架をその上に立てた……。

「『青春の墓碑銘』をやろう――」



プリスはレプリカンツのほうをふり返り、思わずそう言っていた。
「げっ、『青春の墓碑銘（エピタフ）』だってェ！」
「あんな、クラ～イやつをかい!?」
「正気か？　プリス。だって、あんたの友だちのリンナがやるっていう番組（プログラム）は、〃真夜中のヘルシー・スポーツ・トーク〃とか〃ミッドナイト・エアロビクス〃なんてのがキャッチフレーズなんだろ？　テーマソングなら、パーッと派手（はで）でないと……」
「あーあ。アレンジいくらいじくったって、採用（さいよう）されっこないぜ。せっかくのデビューのチャンスだっていうのに、これじゃ帰りのバス代だって出やしない……」
レプリカンツの面々（めんめん）は、くたくたと力なく床にすわりこむ者やら、楽器（がっき）をシートにほうりだす者、プリスに泣き落としをかけようとする者と、反応はさまざまだった。
プリスは前のシートの背もたれを片手でつかみ、レプリカンツの四人をじっと見つめた。
「なあ、考え直してくれよ、プリス」
「自信がないの？」
プリスは、ぽつんとつぶやくように言った。
「え――」
「あの曲に自信がないのかって、聞いてるのよ。ライブハウスに来てくれる特定のファンにしか説得力（せっとくりょく）のない曲なの？　それとも、あたしの歌じゃ、ヘタでだめ？」

「そ、そんなことはないさ。プリスの歌がまずいなんて……だれにだってアピールする曲だしさ。でも、この場合、対象ってもんが……」

「曲の使い方なんて、採用するほうに判断させればいいんじゃないの？　いい歌で、いい演奏だったら、むこうだってなんとか使おうとするんじゃない？……いえ、使い方のアイデアなんて、いくらでも出るくらいインスピレーションを与えられるんじゃない？」

「そりゃ……」

男は反論しかけたまま、途中で口をつぐんでしまった。

場末のけばけばしいネオンや、ハロゲン投光器の光が、うすよごれたホバー・バスの窓ガラスを通してプリスの横顔を染めていた。まるで、厚化粧をした娼婦のようだった。

が、しかし、それは不思議な美しさだった。反論しかけた男は、そんなに美しいプリスを見るのは、はじめてだという気さえした。

秒きざみで点滅をくりかえし、青から赤へ、赤から緑へ、緑から紫へと、めまぐるしく変化するたびに、そして色と色がプリスの顔の部分部分をうばおうとせめぎあうたびに、その光の化粧は濃くなりまさるようだった。

こっけいなメイクと舞台衣装で隠せば隠すほど、ピエロのおかしみが奇妙な悲しさを漂わせはじめるように、表情の見分けがつかないくらいに光で厚化粧したプリスの顔は、直接心にうったえかけるような何かを秘めていた。

プリスの口がわずかに開いた。
「時代が忘れていったあたしたち
　フリーウェイ駆ける迷い子たち……」
バスの外の街並で夜通しバカ騒ぎをくり広げる群衆に語りかけるように、プリスは静かに歌いだした。リバーフロント・ブリッジで毎夜バイクをぶっとばしていたころのことを思い出して作った歌、『青春の墓碑銘』だ。
窓ガラスにほほを寄せたプリスの眼にひとつぶの涙が浮かび、街の色とりどりの光を映して虹色に輝きながらシートの上にこぼれ落ちた。
ま新しい革ジャンの男が、ギターを引きよせ、歌に合わせてそっとコードをつまびく。
「何に追いつこうとしてあせるのか
　虚空に散ったおまえに
　追い抜いたものが見えたなら
　〝見た〟とだけでも叫んでほしかった……」
暗い海面に消えていった仲間にささげた葬送の曲だった。
レプリカンツは呼吸をピッタリ合わせ、いまや全員でシリアの歌をバックアップしていた。ぴんと張りつめた緊張感と、それに矛盾しないゆったり漂うようなリズム。いくつか開いている窓からは街の喧噪が流れこんできていたし、古いホバー・バスの間のぬけたエンジン音

が振動とともに伝わってきているというのに、プリスはほとんど無音の世界でつぶやいていているようにしか感じなかった。レプリカンツのサポートは、それほど完璧だった。
ところが、そこに不思議な音色が流れてきた。
細い、かすれたような音だった。
（笛——？）
間奏部分にかかり、演奏に耳をかたむけていたプリスは、その音色の出所を探してバスの中を見わたした。
白い、木か竹のような棒状のものが、音に合わせてわずかに揺れているのが見えた。あやつっているのは、小さいながらすらりときれいにのびた指。背をまっすぐにのばしておこうとシートに深くかけているため、きちんとそろえた足がつま先立っている。ちょっと前かがみになったうなじの白さがいたいたしいほどだ。
（あの子供だ……）
レプリカンツも、いつのまにか手をとめ、こちらに背をむけて懸命にそのめずらしい楽器を吹いている幼い奏者に見入っている。
「ちぎれたガードレール
　おまえに似合いの十字架に……」
プリスは笛の音につりこまれるように、ふたたび歌いだした。伴奏は、あの子のかなでる

笛の音だけ。

レプリカンツの演奏（えんそう）が、プリスの歌声を上に浮かべ、よどみなく進ませる流れのようなものだとすれば、笛の音はプリスの歌に寄りそうに歩き、ことばのひとつひとつに「うん、うん」とうなずき返しているようだった。

「そのことばを書きこめたのに

そのことばを書きこめたのに――」

最後のリフレインが終わったとき、笛の音もひっそりと消えていった。

三章

1

「おまえ……」
プリスはホバー・バスの前部の座席にむかって呼びかけた。
汚れたハンチング帽がくるりとふり返り、その下の無邪気な笑顔を見せた。
レプリカンツがいっせいに拍手し、「ブラボー！　ブラボー！」と割れんばかりの歓声をあげた。
プリスが立ちあがると、子供のほうもそのめずらしい楽器を胸の前におさえてプリスたちのほうに歩いてきた。プリスがほほ笑みながら片手をさしだす。小さな手がそれにこたえてさしのばされた。
そのとき——。
ホバー・バスに突然、ものすごい衝撃が加わった。
レプリカンツの楽器類がガチャガチャ音をたててぶつかり合い、前のシートにころげ落ちる者もいた。プリスは、手をさしだしたままの格好で前のめりに倒れかかった子供を抱きとめ、汚れて黒ずんでいる床の上にふせた。

「じ、地震？　それとも、おんぼろホバー・バスが、とうとうイカレやがったのか？」
レプリカンツのひとりがいまいましげに怒鳴った。
「ギャーッ！」
バスの最前部から悲鳴があがった。運転手の声だ。ブルドッグのような不機嫌そうな顔をしたずんぐりした男だったが、レプリカンツのあたりはばからぬ演奏の音にも文句をつけるでもなく、そんな騒ぎくらいホバー・バスの運行するぶっそうなスラム街や歓楽街じゃあたり前のことだと言わんばかりに、黙々と運転していたのだ。
プリスは子供を腕の下にかばったまま、首をねじるようにして前部を見上げた。
「ブ、ブーマっ――！」
プリスは思わず声をあげた。
ホバー時には頭上の障害物にも注意しながら上昇する必要があるため、運転手のいるコックピットは一段高くなっており、サンルームのように頭上もわきも大きなガラス張りだ。その大きなガラスにクモの巣のようなこまかいひびが一面に走っている。そしてそのクモの巣の中央から、にぶい光沢のある、鉄仮面かドクロを思わせるブーマの恐ろしい顔がのぞいていたのだ。
運転手がノロノロと立ちあがった。が、逃げだそうとしているのではない。その男は、どう見ても、とっくに腰をぬかしていた。ブーマが巨大な手で運転手の首をつかみ、宙にさし

あげたのだ。

——グキッ。

いやな音がして、運転手の頭がガクッとかたむいた。ブーマの恐るべき力にしめあげられ、首があっけなくへし折られてしまったのだ。そして、巨体がこっちにむかってものすごい勢いで投げだされた。プリスの眼の前でバウンドした運転手の体は、二、三度けいれんをくり返してすぐ動かなくなった。

「ひ、ひでェ……」

「おい、ブーマのやつ、入ってくる気だぞっ！」

ブーマの手が窓わくをつかみ、もう一方の手がもっと確かなささえを求めてコクピットの中をさまよっている。

「運転手を殺っといて、どこへ乗ってこうってんだ。図々しいブー公め、そうは問屋がおろさねえぞっ！」

オールバックにきめたレプリカンツが、運転手の死体を踏み台にしてとびだした。

「ジョー、あぶない！」

プリスが叫んだ。

宙をさまよっていたブーマの手がスッといったん窓の外に消え、それからブンッと空気を切る音とともに黒いかたまりのようになってもどってきた。運転席の背もたれがふっとび、

フリスビーみたいにバスの中をくるくると舞い、プリスがさっきまでいた最後部のシートにグサッと突きささった。

体をちぢめて背もたれをよけたジョーは、そのまま丸くなって運転席の下までころがっていき、手を思いきりのばしてペダルのひとつをおさえつけた。

とたんに、ゴーッという機械音が床の下で起こり、こまかい振動がプリスの体に伝わってきた。窓の外のネオンサインやホログラムの広告塔が、ゆっくりと右へ旋回しながら下へおりてきた。

「ジ、ジョー、いったいどうなってんだ!?」

「きまってんじゃねえか、ホバリングさせたんだよ。ボビー、さっさとこっちへ来てハンドルをつかめ。オレはブー公をたたき落とすっ!」

ジョーは運転席の下の工具入れから大ぶりのスパナを引っぱりだし、窓わくをガッチリつかんでいるブーマの手を、四回、五回と必死になぐりつけた。

「だ、だってよォ……」

Tシャツを肩までまくりあげた、ガッシリした体格のボビーが、ひざをガクガクさせながら運転席のほうへはっていく。

「バッカやろう。はやくしねえと、バスが横っちょのビルに突っこんじまうぞ!」

叫びながら、ジョーはなおもなぐりつける。だが、超高密度アボテックで装甲されたブー

マの手はびくともしない。
「ボビー、さっさとコクピットへ行きな。ジョー、ブーマを狙ったってダメ。窓のフレームをぶっこわすんだよっ!!」
プリスがシートに足をつっぱりながら叫んだ。
ホバー・バスは、ブーマをぶらさげたまま上昇したため、ブーマの重みでじょじょにかたむきはじめたのだ。
ジョーがこん身の力をこめて窓わくを横になぎはらった。
――ギンッ。
重金属のはじける音がしたと思うと、ホバー・バスは沈みかけていたフロントのほうを反対に持ちあげた。バスの全体が一瞬バランスを失って大きくゆれたものの、ハンドルに取りついたメカ狂いのボビーの奮闘によって、どうにか平衡を取りもどした。
「やったァ！　ブー公め、街路にめりこんでもがいてやがるぜ。ボビーよ、逃げるなら今のうちだぜ」
「おう、運転ならまかしとけって！」
身軽になったホバー・バスは、ぐんと高度をあげた。
「調子に乗るんじゃないよ。はやく近くに着陸しな。さもないと、ブーマの標的にされちまう！」

プリスはそう言って窓から下を見おろした。
プリスの言う通りだった。ハビテーション・ゾーンのなかでも、このあたりはとりわけ人口密集地帯で、二〇階、三〇階のビルが街路の両側に壁のように建ちならんでいる。ビルにしたらせいぜい六、七階ていどの高さしかない超高速を越えるようなわけにはいかない。となると、街路ぞいに飛行するしかないのだが、浮かんでいる際のスピードなどたかがしれている。せいぜいパニック状態になって路上でひしめいている群衆や車にわずらわされずにすむ、というくらいのメリットしかない。
それに、レプリカンツは知らないことだが、ナイトセイバーズとしてブーマとの戦闘を数多く経験しているプリスは、ブーマには一度狙いをつけた目標をとことん追跡し攻撃するという習性があることを知っていた。そのターゲットが重要かどうかにかかわらずだ。包囲を破る場合でも、よほどの不利が生じないかぎり、かならず最初に決めたターゲットを倒して逃走するのだ。
ブーマは上昇中のバスからふり落とされ、路面に半分ほどめりこんでいたが、ラミネート・アスファルトを引き破って立ちあがると、案のじょうあたりには眼もくれずに空中のホバー・バスを見上げた。索敵用センサーをさかんに動かしているのが、オレンジ色に輝く眼のはげしいまたたき方でわかる。
「みんな、ふせるのよ！」

プリスがせっぱつまった声で怒鳴り、抱きしめている子供のハンチング帽を上からきつくおさえつけた。

とたんに、それまでにない強烈な衝撃がホバー・バスを襲った。バスの中央右側のシートの下からエメラルドグリーンのまぶしい光がじわじわとはいのぼってきたと思うと、一瞬にしてシートをひとつ蒸発させ、光の柱となって天井を丸く突きぬけていった。

レーザー——おそらくブーマに内蔵された小型レーザー砲だ。

バスが、ぐらりと急角度にかたむいた。一〇機あるホバー・エンジンの二つか三つはふっとんだにちがいない。体勢回復はほぼムリ——。

そう判断した次の瞬間には、プリスの足は無意識のうちに窓わくの上にかかっていた。地上までかるく三〇メートルはある上空、しかも足場はコントロールを失って急激に横すべりしているホバー・バスだ。目算もなにもあったものではなかった。ただ、生来の野性的なカンだけがあった。それが一刻一秒でもはやくここから脱出しろと命じていた。

プリスは子供を抱きかかえ、ためらうことなく虚空に身をおどらせた。

2

野性的なカンということなら、ここに、だれにも負けない自信を持つ男がいた。

キャナル・ストリートを流していた彼は、右手前方のハビテーション・ゾーンから星のない

夜空にむかってはなたれた、エメラルドグリーンの光線を眼の端にとらえ、ピクンと眉を動かした。

インターチェンジがすぐそこまで近づいていた。男はちゅうちょなく直進車線にあったロードチェイサーを隣の降下車線に強引に割りこませた。車線変更可能ゾーンは、もちろんとっくに過ぎている。

「あぶねえじゃねえか！」

すぐうしろを走っていた車のドライバーが、窓から首を突きだして怒鳴った。

「フン、だったらウチでおとなしく3Dテレビでも見てな！」

男は意に介すふうもなくそう吐きすてると、ほとんどスピードを落とさずリボン形のカーブに突入していった。数秒とたたないうちに、ロードチェイサーはハビテーション・ゾーンのひとつのうす汚ない街区に乗りいれていた。

「このあたりか……」

ギンギンのハードロックを流していたカーステレオを、警察無線に切りかえた。

「……ステーション・ワンより全パトロールカーへ、クリフサイド東側のハビテーション・ゾーンにブーマ出現との民間通報。急行されたし。なお、くわしい位置は現在確認中。おって連絡を……」

コンソールのビジ・フォーンの画面に映った制服の女性が、顔にかかる前髪をさかんに気

にしながら事務的な口調で言った。
「チェッ、深夜の彼氏とのデートのことしか頭にないらしいや」
かるく舌打ちすると、男はマイクのスイッチをオンに切りかえた。
ロードチェイサーの前方は車道まで人があふれ、その波がこちらにむかっておし寄せてきつつある。どの顔も恐怖にひきつり、秩序もなにもあったものではない。
「こちらADポリス一〇二。ステーション・ワンへ。ブーマを発見したぞ！　三区の第九ハビテーション・ゾーン、クリフサイドから二本目の歓楽街のどまん中だ。至急応援をよこしてくれ！」
マイクにむかって怒鳴るようにそう言い、男は拳銃をかまえてロードチェイサーからとびだした。パニックにおちいった群衆の悲鳴、叫び、怒鳴り声、車のクラクションといったものが、ひとかたまりになって男のほうへ迫る。
「どけどけ、ADポリスだ！　進路を妨害する者は、命の保証はしないぞ！　ブーマの位置のわかる者はすみやかに申し出るんだ！」
男の力強い声が、むらがる群衆を圧して夜の街路にひびきわたった。冷や水をぶっかけられたように、人波の中央にぱっくりと割れ目が生じる。男は一気に五、六〇メートルを走りぬけた。男を追っかけるように声が聞こえた。
「ホバー・バスだ、ホバー・バスが襲われてるんだ！」

男は頭上を見上げた。左側のビルをかすめるように、一台のホバー・バスが車体をかたむけながらゆっくりと落ちてくるところだった。ホバリング・エンジンのいくつかがイカレているらしく、ばかでかい図体をささえる浮揚力はもうない。何度となくビルに車体がこすれるたびに溶接機みたいに火花が散り、胸の悪くなるような金属的な擦過音をたてる。バスの下に位置する窓々にさがった洗濯物が、エンジンから吹きだす強風によってつぎつぎと舞いあがる。

（たのむから、ブーマを片づけるまではもちこたえててくれよ）

男は心の中でつぶやきながらブーマを探した。

ブーマは足をひきずりながら、あたりの物を手あたりしだいに破壊していた。新人のアイドル歌手が踊りながらうたうホログラム・クリップの広告塔がレーザーに撃ちぬかれた。ホバー・バスが舞いあげたシーツが炎につつまれる。ネオンサインがふっとばされた。車のかげからとびだした中年の男が火だるまになって歩道にころがった。

（なんだ、こいつは……狙いもなにもあったもんじゃないじゃないか。ブーマが気がふれちまったなんて、聞いたことがないぜ！）

そのとき、ホバー・バスがとうとう墜落した。その巨体の下で人工街路樹が数本ひしゃげた。バスは前半分をゲームセンターの中に突っこみ、人工並木とビルのあいだにもぐりこむようにして、ななめにかたむいたまま地面と衝突した。

　と、バスからこぼれるように、革ジャンの男が歩道に落ちた。そして炎上するバスから一刻もはやく遠ざかろうと、はうようにして駆けだした。
　ブーマの索敵センサーがその男の動きをすばやく察知し、首をぐるりとめぐらす。ブーマの口の奥からエメラルドグリーンのレーザー光線が吐きだされた。
　男の横の人工並木があっというまに燃えあがる。
「リック――！」
　反対側の建物から叫びが聞こえた。
　見ると、歩道の上にせりだしたバイオ合成繊維の広いシェードの上に、子供を抱きよせた革ツナギの女がいた。
　ブーマもその叫びを聞きつけ、体をゆっくりとまわした。
　女と子供はそれに気づいて逃げようともがくが、バイオ合成繊維特有のフカフカした材質のために、じれったいほどノロノロした動きしかとれない。女は観念したのか、子供を抱きしめてブーマをにらみ返した。それでブーマがひるむとでもいうかのように――。
　男はとっさに拳銃をブーマにむけてぶっぱなした。ブーマの体がその衝撃でわずかにグラリとかたむく。
（今のうちだ――）
　男はシェードのほうにむき直り、その支柱を狙って拳銃を発射した。弾はみごとに支柱を

折り、シェードがふわりとかしいだ。女と子供がその上をごろごろころがって地面に落ちる。が、そのとたんにシェードが炎につつまれた。ブーマがなおもふたりを狙ってレーザーを撃ったのだ。狂ったとはいえ、いちど狙った標的はけっして逃がさないブーマの執念深い性質はそのままらしい。

男はブーマをもう一発牽制しておいてふたりのほうへ走った。

「だいじょうぶかっ」

男は大声で怒鳴った。

子供をかばうようにして身をふせていた女が、顔にかかっていた長い髪をかきあげて男を見上げた。

「プリスさん——プリスさんじゃないか!?」

3

プリスは一瞬、ブーマに狙われていることも忘れ、眼の前に立っている男を見つめた。

「あ、あんたは——」

「オレだよ、ADポリスのレオン、レオン・マクニコル。忘れちゃったなんて言うなよ。ほら、あんたの熱烈なファンのさァ」

ブーマのことを忘れたのは男も同じらしかった。しかも、うれしそうに顔を輝かせ、ニッ

コリと照れ笑いまで浮かべた。
その瞬間、すぐそばのパイプテーブルがエメラルドグリーンの光線をあび、ジュッと音をたてて溶けくずれた。
「おっと、プリスさんに会えたうれしさで、ブーマ野郎のことをすっかり忘れちまってたぜ。さ、はやく逃げるんだ。あの野郎、いちど狙ったら、そりゃもう徹底的にしつこいんだから――」
言って、男はもう一発ブーマめがけてぶっぱなした。
そこに頭上からパタパタいう機械音が聞こえてきた。ADポリスのポータブル戦闘ヘリ、〝ファイア・ビー〟だ。四機がたがいの動きをさまたげない距離に散開し、旋回しながらブーマに二〇ミリ・バルカン砲の狙いをつける。
最初に接近したヘリが、ブーマの頭上を通過しざまバルカン砲をはなった。
ブーマの足元がバッとオレンジ色につつまれ、ラミネート・アスファルトの破片がとび散った。が、それはわずかのところでブーマの体をはずれていた。
「グガァーッ」
ブーマが口を大きくあけてほえた。鬼面と見まがうほどのおぞましい顔つきだ。ブーマは、急いで離脱しようとするヘリのほうに体をねじり、両腕を大きく左右に広げた。それはまるで、全身で怒りを表わしているような格好だった。

しかし、それは単なるポーズではない。ブーマの持つ最高最大の攻撃力を全開するときの態勢なのだ。

ブーマの腹部、肩、胸、両腕の装甲がオープンになった。と同時に、その各所から強烈な熱線が発射された。

ブーマに背をむけ、離脱態勢にあったポータブル・ヘリは、よけるひまもなく全体に熱線をあび、黒い煙のかたまりを吹きあげながら、もんどりうって地上に撃突した。

「キャーッ!」

子供が黄色い悲鳴をあげ、プリスにしがみついた。

レオンはプリスをせかしていっしょにロードチェイサーにむかって走った。

「クッ、たまんねえな。マシーン同士のけんかにつき合ってたら、こっちの身がもたねえや。プリスさん、まさかブーマ野郎との別れがつらいなんて言いやしないよな?」

「冗談言ってる場合じゃないだろ。さっさと車を出しな。まだあたしたちがあいつの第一標的なんだよっ!」

「ほー、ブーマのことにくわしいんだね……ま、いいか。そんなこたァ、命あってのモノダネだ。とばすぜ、しっかりつかまっててくれよ」

後部座席にころがりこんだプリスと連れの子供にむかってそう言うと、レオンは自慢のドライビング・テクニックを見せびらかすようにロードチェイサーを派手にターンさせ、ブー



マの出現であっという間にゴーストタウンみたいに人影のたえた街路を、気もちよさそうにぶっとばした。

（こいつ、どこまで本気で、どこまで冗談なんだか……まったくとぼけた野郎だよ）

ADポリスに勤めているネネの話では、この男の名はレオン・マクニコル。交通機動隊出身のA級ADポリスで、パトロール班のリーダーだという。以前からプリスのファンで、ひまさえあればライブハウスにかよってきていたということだが、プリスがレオンのことを知ったのは、例のUSSDのビーム軌道衛星が水上都市を破壊したことにはじまる一連の事件からだ。情報を引きだすために一、二度食事につき合ったことがあるが、チャラチャラした、いかにも女たらしといった軽薄なところが気にくわなかった。

「どうやら気違いブーマの野郎、やっとおとなしくなったみたいだな」

レオンがタバコに火をつけながら言った。

車は超高速にのぼり、さっきの街区からはだいぶ遠ざかっていた。レオンの手元のビジ・フォーンにブーマ鎮圧の連絡が入ったのだ。

どうしてブーマを追っかけてるとやたらにプリスさんと会うのかなァ、とレオンが言うのを適当にごまかし、リンナと待ち合わせているスタジオのある街区に送ってくれるようにたのんだ。レプリカンツは、ボビーの天才的な運転技術でホバー・バスがなんとか空中でもちこたえているうちに、ビルの窓にとび移ったりして脱出したのを見とどけた。無事ならはっ

てでもスタジオへ来るだろう。問題は妙なぐあいに道連れになってしまった子供のことだった。

「帰るところがないって？　じゃ、両親は？」

プリスが聞くと、子供は首を横にふり、プリスにしっかりとしがみついてきた。肩がまだ小刻みにふるえている。

「もうだいじょうぶだよ、怪物は追っかけてこないから」

そう言ってプリスは子供を抱きかえした。

（ん……？）

その子の体にまわしたプリスの腕に、やわらかいふくらみが感じられた。プリスが汚ないハンチング帽をずらすと、さっきの騒ぎでほどけたのか、リボンがひざの上に落ち、隠れていたサラッとした髪が肩にこぼれた。

「おまえ……女の子だったのか」

プリスがささやくように言うと、少女はすがるような眼でプリスを見つめ、小さくうなずいた。なにか事情がありそうだった。レオンが「迷い子か家出人なら、警察の少年課に送ってやるけど」と言うのをプリスがことわったのは、自分の警察ぎらいからというだけではなかった。

4

「プリス、いつ来るかとヤキモキしてたのよォ！」

ミキシングルーム入口前のかたいベンチにすわっていたリンナが、プリスの姿を見つけてカン高い声をあげた。プリスを旧式のコーラの自動販売機のかげに引っぱっていき、あたりに聞こえないように声を低めながらも、せっぱつまった口調はそのままにプリスに激しくかみついた。

——どうしてこんなに遅くなったのよ、いいえ、理由なんてどうでもいいの、スタジオの使用時間あと一時間もないのよ、あら、バンドの連中は？　あとから来るだろうって、あんた、それどういうこと？　ブーマ？　ブーマなんてどうでもいいのよ、今はビジネスの話でしょ、放送局のオーナーも来てるわ、このレコーディングがうまくいってあたしの番組のテーマソングに採用され、ティンセル・シティ・ヒットチャートにでも名前が出てごらんなさいよ、あんたは一躍スター、いえ、ワールドチャートだって夢じゃないかもしんないじゃない、そしたらモチ、あたしもトップDJ、おたがい華麗なるスターダムにのっかる絶好のチャンス、でもこの機会をのがしたら、いったいどうなると……ねえ、プリスってば、真剣に聞いてんの？

「聞いてるよ。けど、あたいはスターになんかなりたかないよ。リンナがバイトのDJ番組に、ピリッとひとつパンチのある曲が欲しいって言うから、じゃあって答えただけ。レプ

リカンツの連中も甘ったるい期待をしてるようだけど、そんなもなァ……」

「彼らのほうが絶対正しいわ。いえ、あんたが言いたいこと、わかる。あんなバックじゃ先が知れてるってワケね。だったら一発当てたらクビにしちゃえばいいのよ。ティンセル・シティのミュージックシーンには、テクもセンスもレプリカンツなんかよりずっとあるミュージシャンがごろごろしてんだからさァ——」

リンナは、そこまで言ったところで、背中をツンツンつつかれてふりむいた。

「きれいな顔して言ってくれるじゃないの、ええ、おネエちゃん。オレたちがどうなんだって？」

ニヤニヤしながらそう言ったのは、革ジャンのリックだった。そのうしろには、ジョー、ボビー、そしてドラマーのジョンの姿もあった。

「あら、も、もう来てたの——」

リンナが冷や汗を流しながら作り笑顔でごまかした。

「〝もう〟ってことはないだろ。時間がないのはわかってんだから、さっさとレコーディングに取りかかろうぜ。ブー公相手にウォーミングアップもしてきたしさ」

ジョーがコードが二本しか残っていないギターをかかげて言った。

「でも、楽器——楽器はどうするの？」

リンナがあわてて問いただした。

最後までブーマと奮闘していたレプリカンツの格好といえば、それは悲惨なもので、ボビーはひじからまだ血をにじませているし、ジョンは足を引きずっている。ホバー・バスからやっとのことで救いだせたのは、ジョーのギターだけらしかった。

「いくら安スタジオだって、ピアノやちょっとしたリズム楽器くらい備えつけてあるだろ。それだけありゃ、だいじょうぶ。打ち合わせはバッチリできてるんだから。な、プリス」

ボビーが言ってプリスにウインクした。

レプリカンツは、わいわい騒ぎながらレコーディングルームに入っていった。ガラスのむこうのミキシングルームには三人の男がおり、リンナは営業スマイルと低姿勢で、気のりのしない様子の彼らをけんめいに説得していた。レプリカンツの四人はそんなことをすこしも気にするふうもなく、にぎやかに冗談を言いあいながら楽器のセッティングをしている。ジョーがギターに予備のコードを張りおえ、リックがアップライトピアノのチェアーに腰をおろし、ジョンは古いマラカスをどこかから見つけてきた。

「プリス、オレたちは準備OKだぜ。あとはそっちだけだ——」

アコースティックベースに寄りかかるようにして、ボビーがスタジオのすみっこにしゃがみこんでいる少女のほうを眼で示した。

プリスはフロアのまん中に少女を手まねきした。

「おまえ、名前は？」

プリスは腰をかがめ、少女の目線の高さと同じところからやさしく問いかけた。
「エレンディラ」
「そう、エレンディラか――お姉ちゃんが昔知ってた女の子で、エレンっていう名前の子がいたけど、おまえによく似てたんだ」
「名前も、似てるね。その子、どうしたの？」
プリスの表情がさっとくもった。が、思い直したように眼をあげてほほ笑んだ。
「死んじゃったんだよ。いつもあたしといっしょにいたんだけどね」
「じゃ、わたしがその子のかわりにそばにいてあげる」
「ありがとう。さっきのきれいな音色、もいちど聞かせてくれるかい？　エレンディラ」
少女はコクンとうなずいた。
プリスとエレンディラの会話の途中から、ほとんど気がつかないほどかすかなピアノの音が、『青春の墓碑銘』のメロディをかなでていた。そこに、ジョンが、見つめ合うプリスとエレンディラの呼吸をはかってサインを出した。
ベース、ギター、ピアノ、マラカスがぴったりと息を合わせて演奏をスタートした。アコースティックな楽器編成ということもあるが、メンバーの心、メンバーの期待が一致してプリスとエレンディラの心のかよい合いの高まりを待つ雰囲気を形作った。
プリスとエレンディラのまわりの空気が、どんどん透明になり、澄んでいく――プリスは

そんなふうに感じていた。竹笛のような素朴な楽器を手にたたずむ少女だけが、いつしかプリスに見えるすべてになっていた。エレンディラという不思議な少女と、七年前に死んだエレンとは、まったく区別できない存在になっていた。自分が過ごしてきた青春の七年間をエレンディラに大切な思い出として語ろうとしているのか、それとも、死んだエレンに鎮魂歌としてささげようとしているのか、そのどちらともつかない、時空を超越した何とも形容しがたい心持ちのうちに、『青春の墓碑銘』を口ずさみはじめた。

「時代が忘れていったあたしたち
フリーウェイ駆ける迷い子たち
何に追いつこうとしてあせるのか
虚空に散ったおまえに
追い抜いたものが見えたなら
〝見た〟とだけでも叫んでほしかった
ちぎれたガードレール
おまえに似合いの十字架に
そのことばを書きこめたのに
そのことばを書きこめたのに」

少女の笛の音は、プリスの声にすりよるように、プリスのことばにうなずきかけるように、

そしてプリスの歌をはげますようにと、しだいに高まっていった。さっきの、わずかにあったためらいや遠慮がちなところはすっかりなくなっている。ついには、プリスはその繊細な音が廃墟の中を舞う無垢な少女の白い姿であるかのように思ったほどだった。

最後の音を、エレンディラはこんどは心ゆくまでゆっくりと長く引くようにかなでた。

レプリカンツのだれかが、プリスとエレンディラの陶酔ぶりをやっかんだように、最後にちょっと口笛をはさみこんだ。そのおかげで、プリスとエレンディラはハッと気がつき、ニッコリとほほ笑みあった。

プリスがミキシングルームを見やると、三人の男はじっとむずかしそうな顔つきで一様に眉に深いしわをよせていた。ちょっと離れて立ったリンナだけが、あきれたように口をポカンとあけ、大きな眼を見はってプリスのほうを見つめていた。

やっと演奏が終わっていることに気づいたリンナが、わきのドアからあわてて駆けおりてきた。

「ち、ちょっとォ、プリス！　まさか、今のがあたしの注文したテーマ曲だっていうんじゃないでしょうね！」

「そのつもりだよ」

プリスに同調するように、レプリカンツのメンバーがいっせいにかるくうなずいた。

「だ、だってェ——プリスだって言ってたじゃない、近ごろの歌はコンピュータで計算し

たみたいにガッツがないって。どうしてもっとパンチの効いたヤツにしてくんなかったの。これじゃ、はちきれそうなエネルギーとフレッシュさを売り物にしようっていう、あたしの番組のイメージがだいなしよっ！」

「そうかなァ」

まのぬけたような声でジョーが言った。

「だって、リンナさんの深夜DJは、青春まっただ中の若者向けなんだろ？　青春って、いっつもハッピーな気分でいるわけじゃないぜ。〝青春なんだから元気にいこう〟ってうったえるなら、聴いてる人間をまず〝ああ、オレは青春してるんだ〟って気分にさせなくちゃ」

「そんなノンキなこと、このティンセル・シティで通用すると――」

リンナが顔をまっ赤にしてくってかかろうとするのを、横からおしとどめた者がいた。ミキシングルームに立っていた三人の男のうち、プリスたちがスタジオに遅れてやってきたことにいちばん機嫌をそこねて、しぶい表情をしていた男だ。

「山崎クン、彼の言うのも、案外もっともなことかもしれないよ。なにもファンを最初から元気な若者というところに限定する必要はない。キミの軽快で元気なおしゃべりを聞いているうちに元気になればいいわけだからね。青春に対する思い入れというのは、ぼくらみたいな中年にも確実にあるものだ。この歌には、そういう普遍的な〝青春〟にうったえるとこ

ろがあるように思うんだ。番組のファンの層も広がるんじゃないかな。プロデューサーはどう思うね？」

男は、その横に来ていた、むずかしそうな顔をした同年配の男にたずねた。

「うん。オレはこれでもヒット曲はだいぶ手がけてきたが、久しぶりにアピールするものを感じたな。アコースティックな編成というのが新鮮だし、なによりその変わった音色の楽器がエキゾチックなムードを加えていてとてもよかった。うん、これはきっとヒットするよ。ただ、さっきのなんとも言えない緊張感が、レコーディング本番でもう一度出せるかどうかなんだが……」

「それなら心配ありません。録音はバッチリですよ」

横から口を出したのは、ラフな格好の青年だった。

「あ、ぼく、エンジニアですけどね、リンナさんがオーナーやプロデューサーに『楽器がそろわなくてレコーディングはムリだからのばしてくれないか』ってたのんでるとき、なにげなくフロアの音に耳をかたむけてたんです。だって、オーナーがそんないいかげんなこと許すはずがないですから、リンナさんが怒鳴られるのを聞いてたくなかったんです。――おっと、失礼。それでね、ピアノの弾きだしたメロディがおもしろかったんで、こっそりデジタルレコーダーをまわしてたんですよ。あのワンテイクで十分。録り直しなんか必要ありません」

「そうか、よくやったぞ。山崎クン、何がさいわいするかわからないもんだ。来週の第一回放送のテーマから使うぞ。ディスクの発売も考えるよ、レプリカンツの諸君」

オーナーと呼ばれたスーツの男が言った。

レプリカンツのメンバー、そしてリンナは信じられないといったふうに眼を丸くした。

「ディスク？　あ、それイケますよ！」

ふたたびエンジニアの青年が口をはさんだ。

「ゲノムの設立した新しい衛星放送ネットワークの開局を記念して、来週『世界民族音楽祭』が大々的に開かれるんだけど、ぼくもその仕事にかかわることになってるんです。なにしろ、地球の全国家、全地域をカバーする初のネットワークでしょ。参加者も膨大で、まだぞくぞくエントリーしているらしいんですけど、仲間うちじゃ、これを契機に音楽もだいぶ感じが変わってくるんじゃないか、エキゾチックな、異国ムードたっぷりなものが受けるんじゃないかって、さかんに噂されてるんです。この曲がディスクになれば、その第一号。売れることまちがいなしですよ！」

青年はプロデューサーとオーナーに熱っぽくまくしたてた。

リンナとレプリカンツは、さっきまでの気まずいムードはどこへやら、手と手をつなぎ、歓声をあげながらスタジオの中をはしゃぎまわった。

表情を暗くかげらせているのは、ただひとり、プリスだけだった。

（ヒット曲、ディスク、スターダム、金——あたしはそんなもののために歌ってきたんじゃないんだ。眼の前であたしの歌を聞き、反応してくれる人たちに対して、歌い、語りかけ、はげまされ、ライブハウスを埋める人たちと一体となって時間と空間を共有することがよろこびだった。レプリカンツのはしゃぎよう、リンナのうれしがる気持ちもわかるけど……）

プリスは唇をかみしめていた。浮かれ騒ぐ雰囲気のなかで、そんな彼女を見ていたのは、なにか言いたげな表情をした、少女エレンディラの不安そうなふたつの眼だけだった。

5

同時刻、ティンセル・シティ九区の路上。街路は複雑に入りくみ、曲がりくねっている。白色、黒色、黄色、さまざまな肌の色をした人種が、意外なほどの近さで接し合い、数か国語をごたまぜに使いながら会話をかわしている。

このあたりの通称は〝マーケット〟。数一〇年前この近くに建てられていた輸出入関連の高層ビルの名称が、そのまま地域の呼び名に変わったものだ。

そのころ、つまり世界的な情報流通革命が起こる以前のことだが、そのころからこの地域には中国人、フィリピン人などを中心とするアジア系民族が、産業大国日本の経済的繁栄に引きよせられるように故国をすてて住みつきはじめていた。

情報流通革命以後、世界中からこの都市に多様な民族がぞくぞくと流入してきたが、デー

夕や財貨の流入が直接には人の眼にふれにくい性質のものであることからすれば、副次的な現象であるはずの人間の流入のほうがはるかに目立った。ＴＯＫＹＯとなったこの都市で、人口流入の拠点となったのが、やはりこの地区であった。

しかし、ここに集まってきた外国人には、情報流通にかかわる人々、つまり欧米先進諸国の超大企業関係の人々のほか、直接には産業や経済の情報とは関係がないと思われる、アフリカ、中南米、アジアからの移民も数多かった。情報流通の革命が、単に〝情報〟の次元にとどまるものではなく、社会的なあらゆる〝システム〟の変革であることを象徴する現象であった。

システムの変革は世界経済のわく組みを変え、国々の社会体制を変え、人々の価値観にさえ大きな変化をもたらした。時ならぬ民族大移動は必然的なできごとだったのである。それが世界最大の情報の発信地、流入口であるＴＯＫＹＯで最初にそのきざしを見せたのは当然なことだが、世界に類を見ない単一民族国家である日本という土地柄を考えれば、信じがたいできごとであると同時に、逆に言えば、システムの変革ということが、いかに世界の様相を〝根こそぎ〟にする大事件であったかを証明しているだろう。

九区のこの街区を、どこか妖しい、わい雑な響きのある〝マーケット〟ということばで呼ぶのは、東西南北あらゆる地域の人種の入り乱れるさまが、植民地時代に世界各地にあった人身売買を目的とした市場「ブラックマーケット」を連想させるからという理由もあるが、

実際、ここでは女や麻薬はもちろんのこと、いまだ決定的な科学的治療法の確立されていないガンを数日にして消滅させるという漢方薬から、一九七五年当時ソビエト連邦が保有していた数の八倍にものぼる核弾頭ミサイル、最新のバイオテクノロジーによって作りだされた至上の快楽を与えるという超幻覚剤まで、手に入らないものは何もないと思われるほど種々さまざまなものが売り買いされている。ここはまさに、現代の〝秘密市場〟なのである。

夜だというのに白昼のように明るく人の行列のたえない街角から、数一〇メートル入りこんだ袋小路にある地下の安酒場。テキーラと老酒のカクテルをロシア特産の清涼飲料水クワスで割った〝パンダ殺し〟のグラスを眼の前に置いて、わけのわからないことをぶつぶつつぶやいているうす汚ない老人がいた。

周囲にたむろしている男たちは、人種や年齢はさまざまだが、いずれも浮浪者同然のうらぶれた格好をしている。店の荒れようも同様だ。高い天井だけが昔をしのばせるが、それも今となっては寒々しさのほうが勝っている。あばずれの街娼さえ、金にならないどころか、集団暴行されるのがオチだとわかっているから、一歩も踏みこもうとしない。が、こんな場所は、〝マーケット〟界わいではめずらしくもなんともないのだ。

この酒場にひとりの体格のいい労務者風の男が入ってきた。するどい眼つきで店内をゆっくりと見わたし、おもむろにカウンターのほうに歩きだした。

テーブルとテーブルのあいだのせまい通路に、老人の足がだらしなく投げだされていた。

男はそれにつまずき、一、二歩たたらをふんだ。だが、近くにいる者の体にもたれかかるでもなく、テーブルや椅子に手をつくでもなく、前のめりになった体が床にふれようとした瞬間、片足で床を強く蹴ったと思うと、酔っぱらった男たちの頭上をくるりと舞い、わずかに開いた無人の空間におり立った。

おうっ、といっせいにどよめきが起こったが、男は得意げな顔もせずに、足をかけた老人のところにツカツカと歩みよった。老人の胸ぐらを大きな手でぐいっとつかみ、ねじるようにしてその骨と皮ばかりの体を持ちあげた。

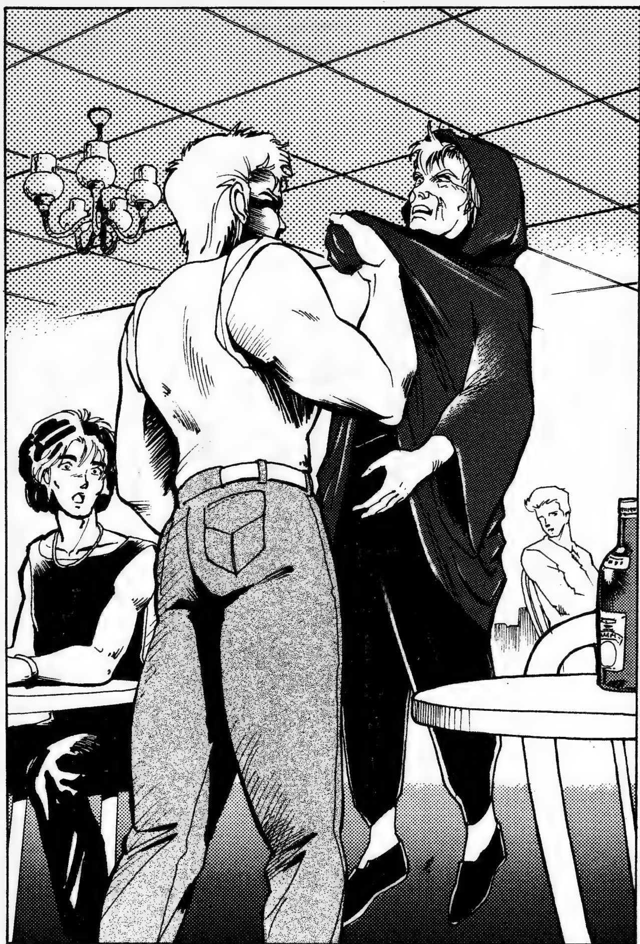
男はドスのきいたラテン系のことばで老人を怒鳴りつけ、腕の中でもがく老人は、ヒンディー語らしいことばで悲鳴まじりに意味不明なつぶやきをつづけた。

ふたりの様子は、さながらサムソンと堕落した聖者のけんかといったふうな、こっけいきわまりない眺めだった。周囲は、ばか笑いとはやしたてる野卑な声でひとしきりわき立った。

男は、一方的にまくしたてててやっと腹の虫がおさまったとでもいうように、老人を元の椅子の上にほうりだし、そのままふたたび酒場を出ていった。

たいしてめずらしくもないその光景は、酒場の雰囲気をすこしばかり活気づけ、酒の追加をさそって店の者をニンマリさせたくらいのものにすぎないように見えた。

だが、もうちょっと用心深い者がこの場にいれば、男の並はずれた身のこなしはもちろんのこと、あれだけ立派な体格の男を倒すほどしたたかに、老人の細い足が男の足元を強く蹴



りつけたことに気がついたことだろう。もちろん、大男と老人の、一見まったくたがいに勝手なことを言い合っていたかのようなやりとりが、次のような内容だったことを知る者など、その場にはひとりとしていなかった。

「なんだ、マリア、こんな格好をしていたのか。あやうく見落とすところだったぜ」

「好きでこんなふうにしていると思うの？　ガルシア。わたしだって前のようにきれいなままでいたかったわよ。まさか、こんな場末の酒場で例の秘密プロジェクトの情報が手に入るとは思えないでしょ」

「それがどうしてこうなったんだ。これは最終段階変身だろう。元の姿にはもどれまい。この格好でないと近づけない相手でもいたのか？」

「逆よ。いっしょに行動していたホセがやられたの。秘密プロジェクトに関係していたゲノムの女とおネンネしてるときにね。わたしも同じホテルの別の部屋にいたんだけど、銃声を聞いて駆けつけようとしたときに、革ツナギを着た眼つきのするどい娘がとびこんできてね、顔を見られてしまったのよ。ブーマじゃなかったけど、ゲノムの手の者かＵＳＤ、さもなければ警察だと思う。ホセの爆発のおかげで、わたしのきれいな体がふた目と見られないほど外皮を焼かれてしまったの。もう表だった活動はできない。あとはあなたたちにまかせるわ」

「その革ツナギの女に、ホセの収集した情報の内容を知られてはいないな？」

「ゲノムでなければね。でも、わたしもホセから回収できなかったわけよ」
「となると、基地に侵入して機械を破壊するのは、もうむずかしいな。衛星の打ち上げ開始は二日後だ。しかたない、作戦を変更する。コードネーム『サイレント・ファンファーレ』だ」
「『サイレント・ファンファーレ』……」

四章

1

夕刻からふりだした雨がまだつづいている。
例のホテル火災から五日目の夜だ。犬と猫が大ゲンカしているような、ひどい降りだ。台風というわけではない。二〇世紀の後半以来、人類がとめどもなく続けてきた自然破壊のツケがまわり、異常気象とはつまり通常の気象のこと、という状態になってしまっているのだ。
もちろん、気象だけをコントロールするくらいのことなら、現在の科学にとっては技術的な困難さはない。問題は、それが地球規模で行わなければ効果がないことや、やったからといって直接的な利益を得る者の数など、それにかかる莫大な費用とくらべればたかがしれているということだ。
実際、利益のあがらないことには手間も金もかけないという考え方は、技術が進歩し、豊富な情報によって対象となるものの性質が明らかになればなるほど徹底化されてきた。
そのいい例が、この雨の中で、ティンセル・シティのビルというビルの頭上に品のない帽子かカサのように濡れて光っている太陽光受光板だ。形はさまざまだが、いずれも物欲しげに首をもたげて南の方角をむいて並んでいる。それぞれのビルの上の受光板が、そのビルだ

けのために電力を作りだし、蓄積しているのだ。性能のアップした現在ではほとんど問題にならないが、かつては受光板の立地条件や大きさによって、作りだせる電力量にひどく差があったから、極端な話、陽かげのビルは電灯も暗いということがあった。大震災以降、公共電力の供給もなくなり、すべてのビルは太陽受光板をすえつけなければ生活も仕事もできなくなった。デザインもバランスもおかまいなく、すこしでも多くの光を受けようと空にさしのばされた受光板は、エゴイズムと効率がこの都市では何より優先することを象徴しているのだった。

いつもの夜なら都市の熱気とたゆまぬ脈動を強烈に印象づける、ネオンサインやホログラム広告の色彩、車のライトの流れも、それらを眺望する視点を上げれば上げるほど、みじめなくらいにぼんやりとかすんでいき、喧噪は激しい雨音にかき消されてしまう。

「ふん。こうして眼下に見おろすと、高層ビルの林立するティンセル・シティも、まるで一面に墓石で埋めつくされた広大な墓場に思えてくる。まったく寒々しい、さみしい土地だよ、ここは――」

そうつぶやいた人物は、毎秒三〇メートルの速さで地上から垂直に遠ざかるエレベーターの壁にもたれ、眼前に広がっていくティンセル・シティに、そのことばとは裏腹な、えものを狙う猛獣のような熱っぽい視線を投げかけていた。

男の名はメイスン。西側世界の政財界に絶大な影響力を有する、超集合企業体ゲノムの会

長クインシーに、特務秘書としてつかえている。彼の仕事の内容は、会長クインシーにしかわからず、また、クイシーに対してのみ責任を負う。ゲノム内部ではほとんどの部門にフリーに立ち入る権限を持ち、多くの内密の決定にかかわっている。メイスンの役職を知るほどの立場にある重役たちでも、彼を〝会長の片腕〟と知っているだけで、その正体がわからずに心中では戦々恐々としているというのが実態だ。

メイスンの視界がしだいにぼやけてきた。エレベーターの透明な強化合成樹脂壁に、モヤモヤとからみついてくるのは霧ではない、低くたれこめた雨雲である。

これほどの高度を誇る建造物といえば、もちろん、第六区にそびえる〝二一世紀のバベルの塔〟ゲノムビルである。今、見通しの悪くなった透明壁ごしにかろうじて見えるのは、ビルの足元に積み木のように並んだ、かつて旧新宿副都心の象徴であった高層ビル街だけだ。このゲノムの総本山は、着工以来八年を経た今も、なお天にむかってのびつづけている。

こんな夜ふけにメイスンが出向こうとしている先は、もちろん、クインシーのいる会長室だ。エレベーターがほとんど気がつかないうちに停止した。なにしろ一〇〇〇メートルに近い高さをわずか三〇秒ほどで昇りきるエレベーターだ。気圧の自動調節も衝撃吸収装置も完璧に作動している。

ドアが開くと同時に、メイスンはぶ厚いカーペットを踏んで広い廊下を進んだ。エレベーターを出て、正面の重厚な扉まで約四〇歩。ここをメイスンのようにごく自然な足取りで通

れる者は、クインシーとメイスンをふくめても数人しかない。二四時間の完全警護を五年以上受けているクインシーの愛人の女秘書でさえ、無情な合成音声の命令にしたがって、最低四回は立ちどまらされる。チェックを無視して一歩でも踏みだせば、その瞬間に、文字通りこの世界から消滅させられてしまうのだ。

「会長、メイスンです。明かりをおつけしましょうか？」

中に入って扉を閉じたメイスンが静かな声で言った。広々とした部屋の両側の壁に、小さな間接照明がわずかにひとつずつともっているきりだ。巨大な机のむこうに、こちらに背をむけてすわっている人物がシルエットになっている。

「いや、いい。わが社の放送衛星が打ち上げをすべて無事完了した日に、ティンセル・シティ中でこのわしだけが美しい夜空を肉眼で見ているのだ。もうすこしロマンチックな気分にひたらせておいてくれぬか。それとも、感傷的すぎるかな？」

「いいえ」

短く答えて、メイスンは机の前に進んだ。

クインシーの声に感傷的なところなどカケラもない。それどころか、現実的な満足感をステップに、次のターゲットにむかって新たな野望の火をメラメラと燃やしているのが、メイスンには手にとるようにわかった。

案のじょう、クインシーは、月光に青白く照らしだされた雲のカーペットの広がる、窓の

外の幻想的な光景に、ためらいもなく背をむけて話を切りだした。
「衛星の打ち上げは成功したが、あれは器にすぎん。中身のほうはだいじょうぶなんだろうな？　メイスン。あれにはゲノム企業体の命運がかかっているのだぞ」
「はい。放送衛星三〇基のうち、先に打ち上げた二〇基ほどのあいだでは、すでに相互交信テストが開始されています。地上局のほうも、チベット、アンデス山中、中央アフリカ、南極といった難視聴地域から、クリアなFM電波を受信したという報告が入っております。あと三日もすれば、人類史上初の全世界放送網が完成し、目先の利害にとらわれぬ画期的な事業の達成者として、ゲノム企業体が全人類から感謝と賞讃のことばを送られることになるでしょう。スウェーデン国立アカデミーは、今年度のノーベル平和賞の授賞候補として、会長のノミネートを正式に決めたそうです」
メイスンは、きわめて事務的な口調で、すこしのよどみもなくそう報告した。
「メイスン、冗談やおせじはそのくらいでいい。あんなもの、技術的には六〇年前でも十分できたことだ。それより、例のプロジェクトはどうなっている？」
「世界的なトップスター、ミュージシャンの出演はすべて取りつけました。伝統芸能、民族音楽分野も、国家推薦だけで四〇〇組以上にのぼっていますし、民間レベルのエントリーもぞくぞく決定しています。衛星の通信テストでも参加をつのるコメントを流していますから、いまだかつて耳にしたことのない首狩り族の出陣の歌も聞けることでしょう。チャンネ

ル回線は七つ用意してありますが、八つ目の使用も可能なようにしてあります。メイン会場となる神宮ドームの会場設営も順調に進んでおりますし、来日音楽家、舞踊家等のためにナリタ・スペースポートの発着ゲートを専用として二つ空けさせました。送迎用チャーター機五機は、すでに世界各地にむけて飛びたち――」

「メイスン！」

クインシーは声を荒げ、テーブルをドンとたたいた。

「とぼけるのもいいかげんにしろ。いくらおまえでも許さんぞ」

「はっ」

メイスンの無表情は変わらない。

「『世界民族音楽祭』のことなど聞いておらん。秘密プロジェクトのことだ！」

「おことばを返すようですが、会長。これらはあくまでひと続きのプロジェクトです。放送衛星が額面通り機能してくれなければゲノムの技術的信用が落ち、『世界民族音楽祭』を抜きにしては世界平和に寄与するというポーズが見せかけになります。世界人口七〇億の大半をゲノムの味方につけてこそ、例のプロジェクトの有効性が……」

「わかった、わかった。音楽祭は、その意味でも、われわれの予想をはるかに上まわる成功をおさめなければならん。が、わしは、そのことではおまえの腕を疑ってない。万事うまくはからってくれ」

「かしこまりました。――では、秘密プロジェクトのことですが」
「うむ――」
クインシーは大机にひじをついて身をのりだした。
「まず、行方不明になっていた女性技術者、マーシャ・クラスノワの一件ですが、彼女の死亡が確認されました。五日前、第一一区のビル火災にまきこまれたことになっています」
「偶然の事故か」
「いいえ。ADポリスが公表をひかえていますが、火災原因はブーマの爆発。すぐ近くで見つかった拳銃が、例のプロジェクトの関係者用に配給した、対ブーマ用特殊弾の入ったものと判明しました」
「なに!? つまり、女がそのブーマと接触していたというのか――」
「だと思われます。しかも、部品を調べましたところ、わが社の情報収集用ブーマと酷似しているものの、かなりの部分が独自開発されたものとわかりました」
「わが社の誇る研究開発スタッフと肩をならべるほどの者がいるのか、それとも……」
「ええ、ブーマ・プロジェクト発足当時からの研究者のリサーチを行いました。USSDの研究機関にいた者もです。しかし、怪しい者、または行方不明者もいないのです。これはゲノム以外の手で造りだされた新しいブーマとみてまちがいないでしょう」
「ブーマをわれわれの手に独占できないとなると、よけい秘密プロジェクトの重要性がま

すことになる。メイスン、衛星はだいじょうぶか？」
「打ち上げ前だった数基については、マーシャ・クラスノワの担当個所を中心に綿密な再チェックをやりました。破壊された跡も工作された跡もありません。先に打ち上げられたものは遠隔チェックのみですが、たぶん問題ないはずです」
「そうか。だが、われわれの秘密プロジェクトが何者かに察知されていることだけはたしかだ。つぎはどのような手段に出るともわからん。メイスン、どんな小さなことでも見落としてはならんぞ」
「はっ。じつは、わたくし、そのことでひとつ、どうも気になることがあるのです」
「何だ、それは？」
「マーシャ・クラスノワが死んだビル火災と同じ日の晩、三区の大断層近くのハビテーション・ゾーンで、ブーマが暴れだし、ホバー・バスその他を破壊するという事件があったのです。ブーマそのものはわが社の製品だったのですが、問題はその暴れ方です」
「暴れ方？」
「気にくわないのです。ブーマの基本的な行動パターンからはずれているところがいくつもある。それでいて、回収したブラックボックスには、手を加えられた形跡も、データの混乱も見られない……」
「ブーマが突然、狂った——ということか？　メイスン、徹底的に調べあげろ。なんとし

ても、秘密プロジェクトの達成まで、敵の妨害工作をゆるすな！」

「はっ！」

クインシーが興奮をしずめながら「下界は？」と問いかけたのに対して、メイスンは「何もかもひどい雨の中です」と短かく答え、会長室を出た。エレベーターの壁にふたたびもたれたが、こんどは透明壁の外には目もくれず、腕を深く組んで考えこんだ。

（会長は、USSDのしわざと思いこんでいるようだな。たしかに、秘密プロジェクトでもっとも大きな不利益をこうむるのはUSSDだ。当面の敵が妨害に出た、と考えるのは、理にかなっているし、それだけ十分な用心をおこたらないことにもなる……が、ほんとうにそうか？　最大の敵をつねに想定するというのは、いかにも巨大企業のトップらしい考え方だが、それが墓穴を掘らないともかぎらん。ゲノムがやっていることは、百年以上も前に西側先進国がやっていた単純な権力闘争じゃないんだ。愛国心だの忠誠心だのをあてにできる時代じゃない。最大多数の幸福が何事にも優先する、ということはもはやない。利益は最終的には個人のもの。そして、今はその〝最終の時〟にかぎりなく接近しつつある時代なのだからな……）

メイスンはクインシーの権力者ぶりがおかしかった。が、その冷たい横顔がゆるむことはなかった。メイスンの行きついた結論が、彼の心を重く支配していたのだ。

（つまり、すべては敵ということだ。それに、人間というやつは、どんなことが動機にな

って行動しはじめるか、さっぱりわからんものだからな……）

2

同夜同時刻。リンナをのぞくナイトセイバーズは、ファッションビルの屋上住居(ペントハウス)に集まっていた。シリアの部屋は、ガラクタのように山と積まれていたコンピュータ機器の大半がとり片づけられ、壁(かべ)ぎわに数台のモニターがきちんとならべてあるほかは、以前の、小ぎれいでエレガントなたたずまいをとりもどしていた。

エレベーターのドアが開いた。

「さあ、ごちそうができあがったわよ。シリアとあたしが腕(うで)によりをかけて作ったケッサクよ。マッキー、運(はこ)ぶの手伝って！」

花柄(はながら)のエプロンをしたネネが、重そうなワゴンをおして現(あら)われた。待ってましたとばかり、マッキーが目を輝(かがや)かせてすっとんでいった。

「す、すっげえや。これ、みんな手作りかい？　わあ、うまそー！」

「コラっ、この悪ガキ、つまみ食いすンじゃないのっ。リンナの番組がはじまるまでおあずけよ！」

ワゴンにかかった白いクロスの端(はし)を持ちあげたマッキーの手を、ネネがパチンとたたいて言った。

ネネは、部屋の中央に用意された大きなテーブルの上に、ごちそうの盛りつけられた皿をならべはじめた。マッキーがよだれをたらしそうな顔でそれをのぞきこむ。

「マッキー、あんたはもうあっち行って。プリス、のんびりしてないで並べるの手伝ってよ。これ、みーんな、あんたのために作ったんだからね」

「ああ、ありがとうよ」

だが、プリスはさしてうれしそうな顔もせず、立っていってネネを手伝うこともしなかった。そのかわりに、プリスに寄りそうようにしてすわっていた少女が、ピョンとソファから立ちあがって、かいがいしくナイフやフォークをそろえていった。

「まあ、よく気がつくわね、エレンディラ。そういえば、これはエレンディラのお祝いでもあるんですものね。はやく放送を聞きたいわ」

エプロンをはずしながら入ってきたシリアが、楽しそうに立ち働く少女にやさしく声をかけた。少女は、ちょっと手をとめるとシリアのほうに顔をむけ、まだあどけなさの残る笑み(え)を満面(まんめん)に浮かべてコクンとうなずいた。

(あ……やっぱりだれかに似ている)

シリアは、このところエレンディラの顔を見るたびに心の中に現(あら)われる思いを、そのときもまた感じていた。ソファのプリスのところに行き、横に腰(こし)をおろしながら小声でプリスに話しかけた。

「ねえ、プリス、あの子いったいどういう娘なのかしら。初めて会ったときから、わたし、どうしてもだれかに似てるって思えてしょうがないんだけど」

「へえ、そうか。前にも言ったけど、あたしがホバー・バスの中で会ったときには、昔孤児院からいっしょに脱走した娘に似てるって思ったんだ。けど、あの夜の、まるでタイムスリップしちまったような感覚がうすれてくるにつれて、だんだん相違点のほうが目につくようになった。まあ、他人の空似だったんだな。歳もどう考えても合わねえし……」

そんなふうに突きはなすような言い方をしたものの、プリスの眼は、彼女らしからぬやさしい光をたたえて少女の動きを追っていた。

(そうわかっていながら、こんなに気を許してかわいがるなんて……やっぱり、あの子にどこか親近感のようなものを持っているのね)

シリアは自分の疑問をしばらく忘れ、エレンディラを引きとって自分の棲み家にしているガレージにいっしょに住まわせているプリスの気持ちを思いやった。

エレンディラは、大震災に遭って脱走したころのプリスがそうであったように、これほど親しくなったプリスたちにも身の上をけっして明かそうとしなかった。

すでに外国人あつかいできないほどの人口が世界中からティンセル・シティに住みついており、一時的な入国者の数も一日数千人にのぼる今日の状況では、たとえ日本人であってもティンセル・シティ内では居住者証明カードの常時携帯が義務づけられている。一時入国者

ならば、昔のパスポートにあたる来訪者カードを持っていなければならない。しかし、エレンディィラはそのどちらも身につけていなかった。

（不正入国者も数多いことだし、その事情もさまざま。きっとそのうち打ち明けてくれるだろうけど、今はムリに問いただださないほうがいいみたいね。身元の手がかりになりそうなことといえば……そう、とてもきれいで流ちょうな日本語を話すのに、英語とか外来語の発音になるとちょっと巻き舌になるクセがあることくらいかしら。ラテン系……もしかすると中南米から来たのかもしれない）

シリアがその考えを口に出しかけたとき、プリスが真剣な顔にもどって先に話しかけてきた。質問はエレンディィラのことでなく、安ホテルの火災事件の原因となったブーマのことだった。ビー・チップから採取した情報をすでに分析し終えていたシリアは、すぐに頭を切りかえてその問いに答えた。

「ブーマの思考系統には、やっぱり何重にも侵入防止ブロックがかかっていて、そこからのデータはまったくひろえてなかったわ。アクセスしてからの行動は、視覚、聴覚、触覚などのデータから総合的に割りだすことができたんだけど、どこといって不審なところはない——というか、場面が場面だから、男と女がベッドの中で行為のさなかにかわすむつごとって域を出ないものなんだけど、女の態度が急変する直前のところで、男のブーマがこんなことを言ってるのよ……」

シリアはそこでいったん立ちあがり、コンピュータのコンソールの中からプリントアウトしたぶ厚いファイルを取りだしてきて、あるページをプリスに示した。ごちそうをならべ終わったネネとマッキーも、その話につられてソファの近くに椅子を引きよせてかけた。エレンディラだけが、おとなしくテレビの前に行った。

「『世界民族音楽祭』だって？　ふーん、たしかに色気のねえ話題だけど、近ごろはティンセル・シティ中どこでもこれでもちきりだぜ。とくに変わってるとも思えないが……」

「けどね、プリス、続いて放送衛星の話になってるでしょ。女が『私は通信系統関係じゃないから……』と、その話をいやがってるようなことばがいくつかあって、ブーマが『じゃあ、衛星のどのあたりを君が担当してるんだ？』となに気ないようすでたずねたところで、会話も女のあえぎも、プツンと途切れているのよ」

そのとき、テレビに見入っていたエレンディラの表情がサッと変わり、テレビの音量を少しずつしぼっていって、プリスたちの会話にこっそりと聞き耳をたてはじめた。

「じゃ、その情報収集用ブーマは、ゲノムとはり合ってる人工衛星メーカーの産業スパイかなんかだったワケ？」

ファイルをのぞきこみながら、ネネがシリアにたずねた。エレンディラが聞いていることを、その場のだれも気づかなかった。

「わたしもそう考えたのよ。そこで、ブーマが女のことを『マーシャ』と呼んでることを

手がかりにして、さっそくゲノムのコンピュータに侵入して人事関係のプログラムを調べてみたの。ぼう大なゲノム社員の中にマーシャという名の女性は何人かいたけど、技術系ではただひとり、マーシャ・クラスノワという白ロシア＝ドイツ系の女性だけ。表向きの職種は配電盤のチェック要員なんだけどね」

そう言って、シリアはマーシャ・クラスノワの調書をマッキーに渡した。

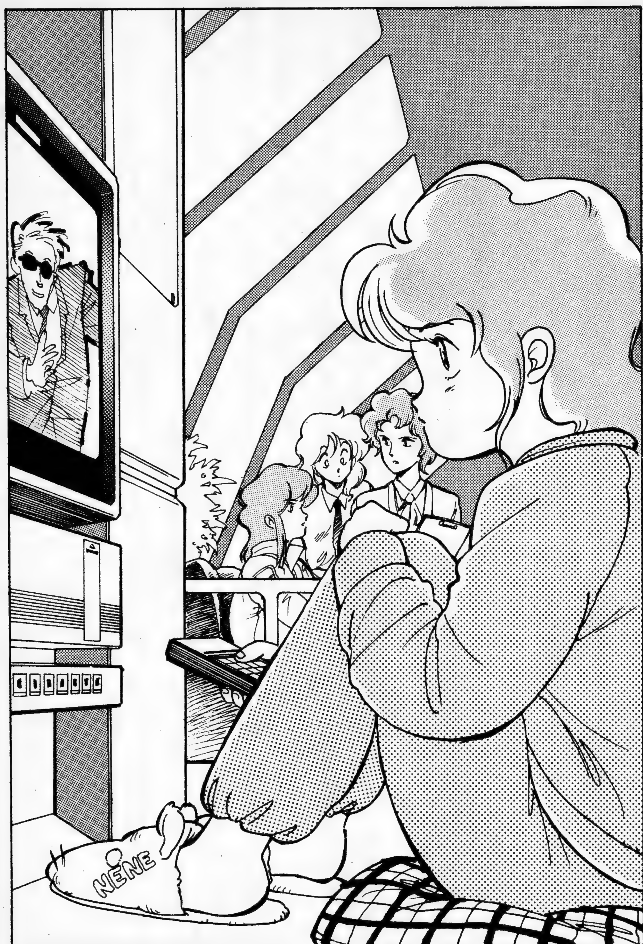
「えーと、キエフ工科大学光学科卒、四年前にゲノム入社、SA部門開発課に配属、おとしの二月にW部門LT―77プロジェクトに転属……ゲッ、こ、これ、いったいどういうことさ。LT―77って、三〇〇ミリ厚超鋼材で固めた要塞の壁も九秒六で撃ちぬくっていう、おっそろしいレーザー砲を装備した戦車のことだよ！」

メカニックに通じているマッキーは、兵器についてもくわしい。そのマッキーが思わず大声をあげた。

「その前のSA部門――つまり、携帯武器部門のほうも、彼女が兵器部門に移る時期に、ちょうど〇・七秒間隔で連射可能な高性能レイガンの開発を完了し、プロジェクトチームが解散してるのよ。これが何を意味するかわかる？」

シリアが全員の顔をゆっくりと見渡した。マッキー、ネネ、そしてプリス、ハトが豆鉄砲をくらったようにポカンと驚きあきれた顔をしている。

「じゃ、そのマーシャって女……ま、まさか、レーザー兵器の研究者だっていうの!?」


NENE

ネネがすっとんきょうな声で言った。
「そう。それもかなりのスペシャリストにちがいないわ」
シリアはきっぱりと言いきった。
「そんなぶっそうな女が、放送衛星なんていうのんきなプロジェクトに関わってたってわけか。世界中の難視聴区域を一掃して、文化的格差を解消するなんて、ゲノムはえらそうなこと言ってるけど、こりゃ、裏にきっと何かあるぜ。もしかすると、あのブーマは、女の正体を知ってて近づいたのかもしれねぇ……。ちぇっ、それにしても、例のビー・チップがブーマの頭ん中までのぞけりゃ、苦労しなかったのに」
「ええ、それでわたしね、ADポリスの作ったビー・チップにちょっと手を加えてみたの。こちらからブーマの頭脳にアクセス可能なように、発信装置を組みこんだのよ。侵入防止ブロックを破るコマンドさえ見つかれば……」
「でも、そこは、いわばゲノムの最大機密だろ？　かんたんにコマンドが見つかるかなあ。ブーマ一体ごとに変えてあるだろうし」
マッキーが腕組みしながらうなるようにそう言った。
「もちろんよ。でも、ブーマの頭脳は、人間とほぼ同量の情報をつねにインプットしつづけるのよ。穴がいくつも開いてるようなものだわ。どこかに侵入のカギが見つからないともかぎらない……」

そこまで言いかけていたシリアが、ハッとしてことばを切った。どこかから聞かれている——そんな気がしたのだ。横目でチラッとエレンディラのほうを見やった。

(まさか、そんなことはないわね……)

テレビの音量は元どおりになっており、少女はコメディアンの使い古されたギャグにたわいもなく笑いころげている。

「どうかしたの？　シリア」

いきなり黙りこんだシリアに、ネネがけげんそうに問いかけた。

「い、いいえ、なんでもないの。そういえば、そろそろリンナの番組の時間ね。みんな、テーブルについてちょうだい。マッキー、受信の準備はできてる？」

シリアにうながされ、プリスとネネ、そしてテレビを見ていたエレンディラもテーブルのまわりに集まった。チューナーの具合を調節していたマッキーが言った。

「バッチシ。昼のうちに高感度のパラボラアンテナをリンナさんのＦＭ局のほうに向けて合わせといたからね。あんな低出力じゃ、ふつうの受信機ならせいぜい一キロ四方でなけりゃ電波を受けらんないけど、四キロは離れたここでもちゃんと聞きとれるよ」

「えーっ、じゃ、それって、ティンセル・シティ中に七十局以上もあるミニＦＭ局のひとつじゃないの！　ミスＤＪとして大々的に売り出してスターダムに一直線——なーんて意気まいてるから、てっきりもっとメジャーの局かと思ってたのにィ」

ネネが拍子抜けした表情で言った。

「ま、そりゃそーだけどサ。あっ、はじまるよ!」

マッキーがヘッドホンを置いてスピーカーのスイッチをオンに入れた。

深夜一時の時報のしっぽが聞こえ、それが終わると同時に、ビートのきいたリズムがスピーカーをぶるぶるふるわせた。

「ハ〜イ、はじめまして、夜も眠れないほど元気いっぱい、ヘルシーたっぷりのヤングマン諸君! あたし、リンナ山崎。リ・ン・ナって覚えてね。今夜からスタートするあたしの『ヘルシー・ミッドナイト』。じゃ、ごあいさつ代りに一曲いくわネ。ヘッドライン・テーマ『青春の墓碑銘』。演奏は、ストリート・ロックの女王、プリス&レプリカンツ。レッツ・ゴーッ!!」

とたんに、ネネが用意してあったクラッカーをパンパンと続けざまに鳴らし、マッキーがくす玉を割った。『コングラチュレーションズ!』と書かれた垂れ幕がさがり、色とりどりの紙ふぶきがプリスの頭の上にまともにふりかかった。

「わぁーい。おめでとう、プリス!」

ネネがはしゃいで声をはりあげた。

「プリスさんとリンナさんに、かんぱーい!」

「ああ、ありがとう。エレンディラにもお祝いを言ってくれ。この子がいなかったら、こ

の曲はやれなかったんだから」

プリスが少女の肩を抱きよせて、照れくさそうに言った。

「そうね。おめでとう、エレンディラ。さあ、みんなで曲を聞きましょ」

シリアのそのことばに全員がうなずき、黙ってスピーカーから流れはじめた演奏に耳をかたむけた。

プリスの曲と聞いて、てっきりグイグイ乗せるロックン・ロールとばかり思っていたネネとマッキーは、リズム楽器のイントロに合わせて手や足でリズムを取っていたが、やがてささやくようなプリスのボーカルと、それにそっと寄りそうようなエレンディラの笛の音が入ってくると、動きをぴたりと止めて聞き入った。

プリスはエレンディラの手をにぎり、両の目をかるく閉じていた。

テーブルが消え、家具類が消え、屋上住居が消え、シリアも、マッキーも、ネネもいなくなった。プリスといっしょにいるのは、ただひとりエレン――いや、エレンディラだけだった。プリスは、いまわしい過去にとじこめられたエレンの記憶が今や完全に解放され、光につつまれて天に昇っていくのを感じていた。そして、今までエレンの記憶がしめていたプリスの心のその部分に、エレンディラが立ってほほ笑んでいるのを見た。

いつしか、プリスはエレンディラを両腕にしっかりと抱きしめていた。

3

どしゃ降りの雨の街。
真夜中すぎだというのに、煙るような雨の底では、まだまだ人々がうごめき、たむろしている街区がある。警戒パトロールにあたっているADポリスの戦闘ヘリ、〝ファイア・ビー〟が、とりどりの光が暴れまわる高層ビルの谷間に無遠慮に突入してゆき、窓辺の洗濯物や鉢植えをプロペラの風で吹きとばし、街灯をすれすれにかすめてまた飛び去る。
風圧でつぶされたにわかごしらえの屋台のテントの下から、売り物のスープにまみれた店主がやっとはい出し、ヘリにむかってこぶしをふりあげて怒鳴る。いつもどれかの店がそんな目に遭う。かろうじて難をまぬがれた他の店の者や酔客たちは、明日は自分がテントの下敷きになるだろうことを知りながら、とりあえずきょうは助かったと、被害を受けた者を腹の底から笑いとばす。毎夜くり返される光景だ。
二メートルを越すたくましい体格の男が、笑いさざめく屋台のひとつに頭を低めて入ってきた。労務者風の服装は、ぐっしょりと雨に濡れそぼっている。だが、男はまったく気にする様子もない。
「その、長いヌルヌルしたものをくれ」
ぶっきらぼうに注文する男の頭から、狭いカウンターの上にポタポタとしずくがたれる。
「あんた、ティンセル・シティに来たばっかりかい？　日やといのくせにチキン・ヌードル

を知らない奴（やつ）なんて、会ったことがないぜ。ほら、こいつでズブ濡れになった頭ときたねえツラをふきな」

でっぷりと太った赤ら顔の店主が、冗談（じょうだん）のつもりでよごれた雑布（ぞうきん）をほおった。それがモロに男の頭にぶつかり、ダラリとたれさがった。男はまったくよける気配（けはい）を見せなかったのだ。店内の酔（よ）っぱらいどもが、いっせいに爆笑（ばくしょう）した。

「おい」

雑布のかぶってないほうの目でギョロリと店主をにらみつけて、男が低い声で言った。そのなんとも言いがたい迫力（はくりょく）に圧（あ）され、店中の者の顔から笑いがスッと消えた。

「な、なんでえ。ひとのせっかくの親切がわからねえんだったら、むりにうちで食ってくれとは言わねえぜ！」

大きな手ザルを身がまえるようにふりかざし、店主が虚勢（きょせい）をはって意気（いき）まいた。

「ラジオを大きくしろ……」

「へ？」

「ラジオの音量を上げてくれと言ったんだ」

男が低い声でもう一度くり返した。

店の中は完全に静まりかえり、表の雨音まじりの喧噪（けんそう）が聞こえた。店主は流し台につかまりながら、やっとのことで油煙（ゆえん）でよごれ放題のポータブルラジオにたどりつき、ふるえる指

先でボリュームをあげた。
「……れたガードレール
　おまえに似合いの十字架に……」
　やっとまともに聞きとれるようになった歌は、リンナのかけた『青春の墓碑銘』だった。淡々とした歌声、感傷的なメロディ、なぜかなつかしい気分にさせる伴奏の笛の音。
　男の機嫌をこねまいと黙りこんでいた客たちも、いつしかボロラジオから流れてくる曲にじっと耳をかたむけていた。思わずグスンと鼻をすする酔っぱらいもいる。
　だが、その曲は、こんな屋台のひとつやふたつ軽くたたきつぶしてしまいそうな大男には、いかにも不釣り合いだった。横の男が恐る恐る大男の顔をぬすみ見ると、そこにはひとかけらの感傷もない、不敵な笑みがうっすらと浮かんでいた。
　曲が終わり、元気な女の子のDJのおしゃべりが始まると同時に、大男はゆっくりと席を立った。そのとたん、強力な金縛りにあっていたような店内に、ホッとした空気が流れた。
「お、お客さん、食ってかねえんですかい！」
　店主が、店を出かかった男の背中にむかって叫んだ。
「おれのかわりに、おまえがこれを食え」
　背をむけたままでそう言うと、男は肩ごしに何かを軽く投げるような動作をした。が、それはものすごいスピードでカウンターを越えて飛んだ。

「むぐっ！」
それを顔に受けた店主は、店の裏までふっ飛び、ハデな音をたてて積み重ねてあったゴミバケツにぶちあたった。店主の大口に、雑布がみごとにめりこんでいた。
店を出て雨の中にふたたび立った大男は、雑布についていたヌードルの切れっぱしをはらうように髪をかきあげた。プリスたちのレコーディングがあった日、つまり安ホテルの爆発炎上があった夜、九区の酒場で老人に姿を変えた女と会っていた、あの大男の顔が現われた。
「やっと見つけたぞ、エレンディラ。それにしても、なかなかおもしろくなってきたものだ……ふっふっふ」
男はひとり言をつぶやきながら歩きだした。しのつく雨と雑踏にまぎれ、その姿はすぐにいずことも知れず消え去った。

4

そのハビテーション・ゾーンから数百メートル西へ行くと、大きな河川につきあたる。スミダ・リバーである。そこからまたわずかに河川ぞいに南下したインダストリー・ゾーンに、一台の場所柄に似合わないクーペが停車している。
車体はメタリックブルーの気取った色だが、付近の街灯はあらかた壊されていて、車を浮かびあがらせるような光はとどいてこない。工場はもちろんとっくに終業しており、小さな

非常灯のみどり色が、鉄条網のサクのはるかむこうにボンヤリと見える。いちばん明るいのは、川の対岸の繁華街の灯が川面に乱反射するきらめきだろう。

クーペに乗ったふたりの男女は、そんなところまで自分たちの車をつけてきた、もう一台の車があることを知っていた。

男のほうは、『そんなにおれたちが楽しむところがのぞきたいってのか？』と後方の車をあざ笑っていた。

が、女のほうは、その車にひそんでいるのが何者かを、しばらく前から知っていた。そのうえ、五〇メートルも離れた車の中でその追跡者が立てる物音や、どこかに報告しているらしいつぶやきまで聞きとっていた。

クーペの男がいきなりルームライトをつけた。

「な、なにするの。ひとに見られちゃうじゃない」

女が声をあげた。ドレスの肩ひもがはずされ、豊かな白い乳房がルームライトの中にくっきりと見てとれた。男の手がそれを持ちあげるように愛撫する。

「あれ、君もうしろの車に気がついてたの？　いいじゃないか、こんなに離れてるうえにどしゃ降りだ。何も見えやしないよ、ジェーン」

「じゃ、なぜ明かりをつけたのよ」

ジェーンと呼ばれた女は、鼻にかかった甘ったるい吐息をもらしながら言った。女は、追

跡者がこんな雨を通してさえはっきりとこちらの車の中をうかがい、このやりとりもちゃんと聞きとっていることを知っていた。なぜなら、追跡者はブーマだからだ。そして、おそらくブーマがゲノムの手の者だということも……。
「見たがってるやつには見せつけてやるのが、ぼくの流儀でね」
男はさも愉快そうにクックックッと笑った。
「あなたって、サディストなのね。あっちの人、欲求不満でバクハツしちゃうわよ」
そう言って、女のほうも忍び笑いをもらした。
「だったら、見えやすいようにもっと派手にやってやろうぜ」
男は女の耳に口を寄せてささやくと、ピッチリと女の体にまとわりついているスカートの端を乱暴にまくりあげ、手をスッとさしこんだ。
「アアッ！」
女があたりはばからぬ声をあげ、背もたれの上にのけぞった。追跡者には、このふたつの乳房のゆれるのがはっきり見えているはず、とジェーンはすばやく計算していた。
案のじょう、追跡者は、どこかにむかって次のように報告した。
「やはり、ただの尻軽女らしい。男がゲノム主催の音楽祭のサブプロデューサーと知ってて近づいたんだ。さかんに会場案内のバニーガールにやとってくれと頼みこんでいた。どうする、引きあげてもいいか？」

（そうしてほしい……はやく行って！）
どぎついルージュをひいた唇をふるわせ、さかんに快感のうめきをもらしてごまかしているが、女は気が気ではなかった。
その女はもちろん、ブーマ——水上都市の残骸の下をくぐって潜入したブーマのひとり、ジェーンと呼ばれた女である。
安ホテルでゲノムの女技術者に正体を見破られ、頭を撃ちぬかれて爆死した仲間のことは、もちろん彼女にも伝えられている。それだけ相手を快楽に酔わせながら目的の情報を引きだすというのは、大胆な体技と微妙な会話のテクニックを要求されるのだ。
が、この場合はそれだけではない。音楽祭のプロデューサーには、やはりブーマのガードが本人にも内密でつけられていたのだ。分きざみのスケジュールに追われるプロデューサーをつかまえるチャンスはそうない。世界民族音楽祭は一週間後にはじまる。この機会をのがせば、彼女のラインからの計画は水のアワとなるのだ。
「どうしたんだ？　あんまりのらないみたいじゃないか」
若い女性歌手やタレントを何人も食いモノにしているプロデューサーは、さすがに女の反応には敏感だ。プログラムされたパターン以外の因子が入りこんできた場合、いくら優秀な情報収集ブーマでも、人間同様にとまどいは表面に現われやすい。
そのとき、うしろの車のエンジン音がした。つづいてUターンするタイヤのきしみ……。

「やっぱり明かりは消すかな。かわりに音楽でも流そう――」
ルームライトが消え、同時にカーステレオからゆったりしたバラードが流れた。
それを聞いたとたん、女ブーマはギクリと身をちぢめた。
(こ、この笛の音は――エレンディラ!?)
ジェーンはハッとリアウィンドウを見た。
河岸でUターンしかかっていた車が、うしろ向きのまま猛スピードで迫ってきていた。
(しまった、むこうはまだ盗聴していたんだわ!!)
女はとっさにシートの下にふせた。その瞬間、ドスンと激しい衝撃がきた。
女の上にのしかかっていた男の体が背もたれを飛びこえ、リアウィンドウに頭から突っこんでいった。
――グキッ！
男の首の骨がおれる、にぶい音がした。
ジェーンはそれにかまわず、紙のようにシワくちゃになったドアを蹴破って、外へとびだした。だが、そこにはすでに、ブーマが立ちはだかっていた。
カーステレオはまださっきの曲を流している。あられもない姿のジェーンを見おろすブーマの眼が、さらにランランと狂気の色を帯びていく。
「チェッ！」

女ブーマはひざで立ちあがり、右手をまっすぐブーマにむかって突きだした。指をせいいっぱい聞いた手のひらにみるみる黒い空洞が生じた。

――バババババッ、ババババババッ！

手のひらがたて続けに火を吹いた。二の腕にしこまれた機関銃だ。

不意打ちをくらい、ブーマが思わずのけぞった。無防備だった顔面に弾丸がさく裂する。高密度バイオ合成樹脂製の皮膚がこま切れになってはじけとび、むきだしになった黒い鉄の頭が雨で光る。バランスを失った体が、ドウッと重々しい音をたてて、水の浮いたラミネート・アスファルトにあお向けに倒れていった。

「ふん、ざまァみろ、ゲノムのあやつり人形め。情報収集用ブーマだって、これくらいの武器は備えてるのよっ！」

立ちあがった女ブーマは勝ち誇った笑みを受かべ、とどめをさすためにブーマに近づいていった。そして、自ら発射した弾丸のために黒こげとなった手のひらを、半開きになったブーマの口のま上に持っていった。

が、そのとき、閉じていたブーマの眼がカッと見開かれた。

あわててとびすさろうとする女ブーマ。

その動作よりもはやく、戦闘用ブーマの超高密度アポテックスでよろわれた手が、女ブーマの細い足首をガキッとつかんでいた。

女ブーマは尻もちをつくような格好で地面に倒れた。
その上に戦闘用ブーマが襲いかかっていく。
パワーでは戦闘用ブーマの足元にもおよばない女ブーマは、たちまち両腕を地面におしつけられた。豊かな白い胸のふくらみが、巨体にのしかかられて無残にひしゃげた。
「くそっ、もうダメか⁉」
女はブーマをにくにくしげににらみつけ、唇をギリギリとかむ。と、やわらかな両方の乳房を突き破り、鋭い切先の刃が二本、ものすごい勢いでとびだした。
だが、ブーマの反応ははやかった。切先のとどくギリギリのところまでサッと身を引き、次の瞬間にはこんどは自分も胸部を開き、いきなり熱線砲を放ったのだ。
「ギャ――アアアアアッ！」
ひと気のない工場地帯に、女の絶叫がこだました。
ブーマが立ちあがると、至近距離から熱線砲をくらった女ブーマは、焼けただれた胸を両腕で抱きしめ、気が狂ったようにのたうちまわりはじめた。
「グウルルルルアアーッ‼」
そのさまを見おろして、ブーマは血も凍るようなおたけびをあげた。
そして、女ブーマが動かなくなるまでの数十秒間のうちには、戦闘用ブーマは河岸の道路を猛スピードで駆けぬけ、前方を横断しているキャナル・ストリートをわずか数歩のジャン

プでとび越え、深夜ながらまだ人通りのたえないハビテーション・ゾーンの路上に乱入していった。

5

「えっ、ブ、ブーマですって！」

二曲目の曲紹介にかかっていたリンナの声が急にうわずった。マイクのぶつかる音、椅子の倒れた者らしいノイズが、屋上住居のスピーカーから聞こえた。

「なんだって！」

プリスが椅子を蹴って立ちあがった。

「マッキー！」

シリアが呼びかけた。

「わかってる。ADポリスの警察無線だね！」

マッキーが無線のコンソールにすっとんでいった。

スピーカーからは、悲鳴に近いリンナの声が聞こえていた。

「み、みなさん、ブーマがこっちへ……いえ、みなさんのほうへ、いえ、そうじゃなくって、とにかくすっごく近くで暴れてるんですって！　お、落ち着きましょう、お願いだから落ち着いてね。だって、いくらブーマだって、みんなを一度に襲うなんて、できっこないじ



ゃないの！　そ、そうよ、絶対助かるわよ。みんな助かるわよ。あ、でも、みんなはもしかして助かんないかもしんないけど、だいたい助かるはず……だれかは助かるわ……きっと。たぶん……もしかして。ねェ、わたし助かるわよね？　助けて、みんなーっ!!」

五　章

1

「リンナ、やられちゃうの!?」
ネネが椅子の上にとびあがって叫んだ。
シリアが「シッ！」とネネを制した。
「ブーマの出現したのは四区、スミダ・リバー沿いの第二ハビテーション・ゾーンだよ。たしかにリンナさんのFMステーションのある近くだけど、ブーマはまだ路上だ。しかも、なんだか無差別に破壊活動をしてまわってるらしい……」
透明樹脂板のマップを指でなぞりながら、マッキーが、傍受した警察無線から位置を割り出す。
「あたしとエレンディラが襲われたときとそっくりだ」
プリスが言った。
スピーカーからは、あいかわらずリンナのヒステリックな叫びが聞こえている。
「リンナったら、かわいそーに、完全にプッツンしちゃってる。ねえ、シリア、助けに行ったげようよ！」

「ええ、もちろんよ。ナイトセイバーズ、緊急出動！」
シリアのよく通るきれいな声が、屋上住居の緊張した空気をつらぬいて響きわたった。
数分後、シリア、ネネ、プリスの三人は、ランジェリーショップの営業用運搬車をよそおったコマンドキャリーの後部室にいた。壁面に小さく切られたウィンドウから、街の灯がコマ落としの映像のように後方に流れていくのが見える。
「あの子は？」
下着姿となったシリアが、その上にバトルランジェリーを手ばやくまといながらプリスにむかってたずねた。
「エレンディラなら、あたしたちがもどるまで屋上住居でおとなしく待ってろって、言ってきたよ。それがどうかしたのかい？　シリア」
プリスはすでにうすいレオタードのようなバトルランジェリーを着終わり、肩甲骨から耳の下までをおおう首あてを頭からかぶろうとしていた。
「ならいいんだけど……。ねえ、プリス。わたし、ちょっとあの子が気になるのよ」
「連れてくるわけにはいかないだろ。あたしたちの秘密は、たとえ相手がだれであろうと知られちゃいけねえってのは、シリアが決めたことじゃないか」
首あてに長い髪をむぞうさにたくしこみながら、プリスが不思議そうに言った。それがすむと、胸の上と背中の四つの三角チップでボディ部とネック部のウェアを接合する。インナ

ースーツの全体がセンサーになっており、肉体の微妙な動きによって生じるわずかな電気をひろう機能を持つ。三角チップは、その電気信号をハードスーツに伝える役割も果たすのだ。このシステムによって、七、八〇キロもあるハードスーツがごく自然で自由な動きを可能にするわけである。

「いえ、そういうことじゃなくて、わたしには、なんとなくあの子が今回のブーマ騒動と何か関係がありそうに思えてしょうがないの……」

「たしかに、襲われたホバー・バスには乗ってたけど、今夜はあたしたちといっしょだったんだぜ。どうやって遠くのブーマを狂わすことができたんだい？」

「なーに、シリアったら、急にヘンなこと言いだしたりして」

ネネが横から口を出した。もうハードスーツをすっかり着こみ、メットをわきにかかえている。

「それはそうなんだけど……ブーマのことを考えると、なぜかスッとあの子の顔が浮かんでくるの。思いすごしならいいんだけどね」

「わかった。エレンディラについては、あたしもちゃんと知っときたいからね、帰ったら、もいちど問いただしてみるよ。けど、今は暴れまわってるブーマを片づけるのが先だぜ」

「ええ。――マッキー、あとどのくらい？」

シリアがインターホンのボタンをおして、操縦席のマッキーにたずねた。

「七、八分ってとこかな。制限速度四〇キロオーバーだけど、真夜中でもギリギリのスピードだよ。その後のブーマの動きだけどね、やっぱりおかしいよ。動きがふつうじゃない。手あたりしだいって感じで破壊しまくってる。ADポリスもお手上げみたいだ」

「ADポリスにまかせとけないってことくらい、先刻承知してるさ。時間がおしい。シリア、先に行くからな。マッキー、モトスレイブおろしとくれ！」

プリスはそう叫ぶがはやいか、かたわらのバイク型マシーンにとび乗った。

マシーンを乗せたコンベアーがかすかなうなりをあげ、横にすべるように動きだした。同時にコマンドキャリーの側壁がせり上がる。

「あ、待って、プリス！」

シリアがあわてて呼びかけたときには、プリスのマシーンはすでに路上にとびだしてしまっていた。

「もう、プリスったら。リンナが心配なのはわかるけど、打ち合わせもしないで……」

プリスに遅れまいとモトスレイブにまたがりかけていたネネがふり返った。

「あれ？　フォーメーションなら、もうさんざんやってるじゃないの」

「ネネも忘れちゃってるのね。リンナを救いだすことのほかに、もうひとつ大切なことがあるでしょ」

シリアが指の先くらいの大きさの黒いかたまりを取りだした。

「あ、そっか、ビー・チップね。でも、なにもこんな緊急の場合に実験なんてやらなくったっていいじゃない」
「ブーマが暴れだしたときは、いつも緊急事態よ。今回は、たまたまリンナが危険にさらされてるだけ」
シリアはふだんと変わらない冷静な口調で言った。みんなが浮き足だっている分、その態度はよけいになみなみならぬ危機感をただよわせていた。
「これは単に仕事ってことだけじゃないのよ。なぜブーマが狂ったとしか思えない行動をとっているのか、その謎を探るには、このビー・チップを使うしかないじゃない。わたしたちが組むフォーメーションは、ADポリスのブーマハンター隊員が組む陣形と同じく、正常なブーマの行動パターンを想定したものでしょ。発狂したブーマに的確に応戦するためにも、ブーマの知覚からの情報を得ることは必要だわ」
「そ、そーだったわね。じゃ、どーすんの？　シリア」
「やっぱり直接この眼でそのブーマを見てから判断するしかないわね……そして、チャンスを見て、発信装置をとりつけたこの新しいビー・チップをためしてみるのよ」
言いながら、シリアはハードスーツのひじの内側にあるポケットに、ビー・チップを慎重にしまいこんだ。
「さあ、行くわよ、ネネ！」

「オーライっ！」
二台のモトスレイブが、コマンドキャリーと並走して超高速高層道路を駆けていった。

2

「チェッ、またかよ。ブーマの野郎ども、ここんとこまったくどうかしちまってるぜ。まア、ブーマなんていう存在そのものが異常なんだがな。それにしても、あの動きはいったい何だ——狂ってるとしか言いようがねえ」
四区第二ハビテーション・ゾーンの路上に愛車ロードチェイサーを停め、そうつぶやきながらとびだしたのは、ADポリス・パトロールチームのリーダー、レオン・マクニコルだった。
二街区ほどむこうでくり広げられているブーマによる破壊、殺りくは、数日前に別のハビテーション・ゾーンで起こったホバー・バス襲撃事件にそっくりだった。まるで無目的としか思えない、手あたりしだいの暴れ方だ。
鎮圧にあたっている武装隊員に対する反撃も、いつものブーマ犯罪に見られる、緻密な戦略とはほど遠いものだ。ぶ厚い装甲の隊員輸送車にむかって効果のないレーザー攻撃をしかけたと思うと、つぶれた屋台のうしろにとびこんで身を隠した武装隊員ひとりを狙って、胸と両腕の熱線砲を全開にして屋台ごと炎上させてしまうという具合だ。

「どう指示すりゃいいんだい……」
レールガンを両手でかかえ、レオンは歯がみした。
と、そのときだ。ブーマの進路をふさぐように、道路にななめに停車していたポータブルへリのキャリアトラックが、何の前ぶれもなくぐらぐらと揺れだした。
「ブーマが第二陣形を突破した。そっちへ行くぞ！」
悲鳴のような武装隊員の叫びが、キャリアトラックのむこうから聞こえた。
サーチライトが、つぎつぎにレオンの立つ方向に向きを変える。
まぶしい光の中、ひとつのたくましい人影が、キャリアトラックのルーフの上に立ちあがった。逆光になって見えにくいが、あの体形はまちがいなくブーマ！
「グォオォオッ！」
ブーマがほえた。
レオンが身をふせた瞬間、キャリアトラックの反対側から発射されたゲルリヒ・ライフルの銃弾が、頭の上をビュンビュン音をたてて通過した。
——ガシャッ、ガシャッ、ガシャッ！
レオンがふり返ると、ロードチェイサーのウィンドウがこなごなにくだけ散っていた。
「バカやろうっ。ブーマのデタラメにふりまわされやがって。味方を攻撃してどうすんだっ！」

レオンは大声で怒鳴った。
が、鼓膜をつき破らんばかりの激しい銃撃のさなかだ。声が隊員どもの耳にとどいた保証はない。たとえとどいているとしても、予想外のブーマの反応に陣形を破られ、気が動転している連中だ。ブーマをしとめることだけに血まなこになっている。一般市民を危険にさらす攻撃をしないという、市街戦上の鉄則を忘れ、包囲網を破ったブーマめがけてムチャクチャに発砲しているのだ。
ブーマはキャリアトラックからこちら側にとびおりた。そして、キャリアトラックの車体の下に太い腕をさしこみ、満身の力をこめてそれを持ちあげはじめた。
「あんなものをひっくり返して、なんの得があるっていうんだ。まったく頭にきたとしか思えねえぜ」
ロードチェイサーのかげにとびこみ、味方の流れ弾をさけていたレオンは、レールガンの狙いをブーマの頭部につけ、トリガーをひきしぼった。
――バシュッ。
キャリアトラックを持ちあげかかっていたブーマの後頭部で、閃光がほとばしった。
「やったぜ！」
ブーマが車体から手を離し、頭をおさえてころげまわる。と同時に、地面にたたきつけられたキャリアトラックのエンジン部が、オレンジ色の炎を吹きだした。

「逃げろ、トラックが爆発するぞ！」
レオンは叫びざまロードチェイサーに体をぴたりと寄せた。
轟音。閃光。爆風――。
しばらくは眼も開けられないほどの惨状にみまわれた。
「ブ、ブーマは――！」
レオンが頭をあげると、道路いっぱいにキャリアトラックの吹きあげる黒煙が充満していた。その煙を突きぬけて、マスクで顔をすっぽりとおおった武装隊員がとびだしてきた。
「隊長!?」
「バカやろうっ。オイラがやられちまうとこだったぜ！　ブーマ野郎はどこだっ!?」
「そ、それが……」
「まさか、見失ったなんて言うんじゃねえだろうなっ」
「しかし、いちばん近くにいらっしゃったのは、隊長ですし――」
「い、言いわけすんな。さっさと探すんだ。車や障害物は破壊してかまわん。報告書はオレがどうとでもごまかしとく。とにかく人間に危害を加えないうちにしとめるんだ！」
レオンは矢つぎばやに命令を発した。
（クソっ、こんなにあせるのは久しぶりだぜ。はやく見つけださねえと――ン？）
背後から軽やかなエンジンの響きが聞こえたと思うと、たちまちレオンのほうにむかって

一台のバイクが突進してきた。
「ブーマはあのビルにとびこんでったよ！」
捨てゼリフのようにレオンにむかってそう怒鳴ると、バイクはロードチェイサーのわきを走りぬけ、道路ぎわのビルのひとつにスピードも落とさずに突入していった。
「ありゃ、たしか……ナイトセイバーズ！　またオレたちをだしぬこうってのかっ」
ビルに逃げこんだとすると、Ｅ作戦をとらざるをえません。命令を——」
「エマージェンシー・オペレーションだと！　こんな人間だらけの街のまん中で、たった五分で住民を全員退避させ、そのうえで建物を破壊するっていうのかっ!?」
「し、しかし、そうしなければ、被害は広がるばかりですっ」
レオンは腹立ちとくやしさに思わず唇をかみしめた。
（どうなってるんだ、今夜のブーマは。人工皮膚をかなぐりすててバトルスタイルになったブーマは、細かい動きができなくなる。あらかじめ建物の構造を作戦に組みこんでデータをインプットしてるのでもないかぎり、建物に入るのはやつには不利なはず。しかも、今は戦闘だぞ。なのに迷路みたいな雑居ビルに逃げこむなんて……）
「ようし、Ｅ作戦発動だ。ただし、破壊は一〇分後まで待て。そのあいだに、レスキュー班と協力して、あのビルの両どなりと裏側の住人を退去させるんだ！」

「はっ！　ですが、あのビルの中にも住人が……」
「オレが踏みこんでブーマを追いたてる。なあに、人間に指一本触れさすもんか。住人には、窓から逃げるようにスピーカーで呼びかけるんだっ！」
命令を伝え終えると、レオンは先にとびこんでいったバイクを追い、五〇階建ての雑居ビルにむかって必死の形相で走った。

3

ビルの中にモトスレイヴごととびこんだプリスは、逃げまどう住民をあやうくひっかけそうになり、あわてでスピンターンして停車した。
「ブーマはどこだ？」
よろけながら出口にむかう男の首をつかまえ、おどすように問いただした。
「上、上の階にむかってる……」
男はエントランスの先のホールを指さした。建物の中央に円筒形の吹き抜けが最上階まで切ってあり、その壁面をなぞるようにラセン形の非常階段がついている。ブーマはそこをのぼっていったにちがいない。
エントランスにむかっておし寄せる人波を、クラクションを鳴らしっぱなしにしておし分け、プリスはホールに突進した。

円い吹き抜けにスロープ状のラセン歩道とは、ふた昔前ならなかなかシャレた構造だったろうが、耐久年限をとっくに越えた古ぼけた建物で、深夜営業の怪しげな店が地下と地上数階を占領しているほかは、何に使われているのかわからない雑居ビルだ。
ブーマらしき足音の響くのを聞きつけ、プリスがラセン階段を見上げると、吹き抜けのまん中に、焦点のだいぶ合わなくなったホログラム映像の広告塔が浮かんでいた。
「『KKメディアステーション・ビル』だと！　ちっ、ADポリスめ、よりによってブーマをとんでもねえ場所に追いつめてくれたもんだぜ。ここは、リンナの放送局のあるビルじゃねえか」
ホール横の二機のエレベーターはフル稼動している。ドアが開いたとたん、スシ詰めになった人々がドッと吐きだされ、ホール中を逃げまどう。が、リンナの姿はない。
そのとき、プリスのモトスレイヴの前に、いきなりものすごいスピードで人間が落ちてきた。
――グシャッ。
いやな音がして、数メートル四方に血がとび散った。わずかに遅れて、死体のそばにピストルがかわいた音をたててころがった。
エレベーターから出てきた人々が、まるい壁ぎわにサッと散り、おそるおそる吹き抜けの上を見上げた。二〇階ほどのところに、黒い金属性の物体が動くのが見えた。

（ブーマ！）

すぐさまプリスはアクセルを踏みこんだ。左足を支点に、モトスレイヴを半転させ、ラセン歩道のほうにむける。パワーを全開にし、一気に歩道を駆けのぼるつもりだ。

「おっと、ついでにオレも乗っけてくんないかな？」

プリスの耳元で聞きおぼえのある声がしたと思うと、背中に人がしがみつく感じがハードスーツを通して伝わった。

「オレ、ADポリスのレオン。いくら腕に自信があるっていっても、警察に協力を求められたら、まさかブッ倒して逃げやしないだろ？　な、ナイトセイバーズのおねえちゃん！」

プリスの肩ごしに警察の身分証明カードがさしだされた。そこにはられた3Dのホログラム写真は、いつもプリスを追いまわしているミーハー男の顔だった。ホバー・バスから命からがら脱出したプリスとエレンディラを、ブーマから救ってくれたのもこの男だ。もちろん、ナイトセイバーズのハードスーツを着こんだこの女性が、ロックシンガーのプリスと同一人物だとは、レオンには知るよしもない。

「ふり落とされたって責任持たないよっ」

「モチ、遠慮なくぶっとばしてくれよ。ほんじゃ、レッツ・ゴー！」

モトスレイヴは爆音を残して歩道のスロープを駆けあがった。

四階、五階、六階……のぼるにつれて吹き抜けから見おろす下のホールが小さくなってい

く。六階以上は危険防止のために、下の階では手すり状になっていたガードが天井までのびており、二〇センチほどの間隔で鉄筋が植えこまれている。

だが、そのわきを高速で走りぬけるプリスたちには、猛スピードのために鉄筋はごくぼんやりとしたものにしか見えない。地上数一〇メートルの断崖絶壁に、わずかにせり出した足場をつたってのぼっていく感覚なのだ。

しかも、高速の円運動。並みの人間なら、目をまわして吹き抜けにフラフラと吸い寄せられてもおかしくない情況だ。プリスが少しでもハンドル操作をあやまれば、保護用の鉄筋などいとも簡単に突き破って空中にとびだしてしまうだろう。

それでも、プリスはまだハードスーツを身につけ、メットの後部にはジャイロセンサーがあるから平衡感覚を失うことはない。だが、レオンは生身で、風圧をモロに受けている……。

「ひでえビルだな。今んとこ、通り過ぎた通路にブーマの暴れた形跡はねえが、どこも荒れ放題だ。浮浪者や密入国者が寝ぐらにしてるとしても、三分の二はここしばらく人の立ち入った様子のねえ部屋ばかりだぜ！」

プリスの耳元で、レオンが怒鳴るように言った。

（ほう――）

プリスは思わず感心した。ふつうなら目を開いていることさえむずかしいはずなのに、レオンは各階の様子をちゃんと観察し、なかなか鋭い判断まで下しているのだ。

（この男、見かけは軽薄このうえないけど、口先だけの威勢よさじゃなさそうだな）
プリスが心の中でそうつぶやいたときだった。
「ブーマがいたぞっ！」
レオンが叫び、数階上の歩道めがけて発砲した。
だが、レールガンの銃弾は歩道の天井壁にあたって破裂し、直径二〇センチほどの穴を開けただけだった。とび散った模造コンクリートの壁材が、吹き抜けをバラバラと落下していった。
「ちぇっ、ちゃんと狙って撃ったのかよ。あたしたちの通る足場をぶっこわしたってしょうがねえだろ、ったく！」
感心したのもつかの間、プリスはレオンに罵声をあびせていた。
「こんどこそはずしやしねえぜ。ブーマ野郎の逃げこんだ通路は確認した。あと七つ過ぎた通路入口を曲がってくれ」
レオンは、言いながらすばやくレールガンに新しい弾をこめた。

4

「ええっ、なんですって——ブーマがリンナのいるビルに侵入!?」
シリアは思わず聞き返した。コマンドキャリーで警察無線を傍受しているマッキーから通

信が入ったのだ。

シリアとネネのモトスレイヴは、超高速からハビテーション・ゾーンに入ったところだった。シリアは、街路に面してひときわ高くそびえる円筒形のビルを見上げた。あの中で、ブーマが暴れまわっているのだ……。

「リンナは……リンナはどうしちゃったの？」

ネネの不安そうな声が、メットのスピーカーを伝わって聞こえた。

「マッキー、リンナになんとかコンタクトはとれない？」

シリアはせきこんでたずねた。

「コンタクトをとるまでもないさ。今んとこ、リンナさんは無事だよ」

「えっ？」

「だって、リンナさんたら、あいかわらず放送用のマイクにむかってわめきっぱなしだもの。もうこの距離なら、ＦＭ電波は充分キャッチできるんだ。リンナさん、まだブーマが近くまで来てるの知らないらしいよ。『あたしは命がけでＤＪやってるんです。ブーマくらいでへこたれてたまるもんですかっ！』なんて意気まいて放送してる。自分の置かれてる情況を知ったら、どーすんだろうね？」

「のん気なこと言ってる場合じゃないでしょっ！」

ネネがマッキーにくってかかった。

「あ、警察無線が何か言ってる……E作戦？……住人退避……破壊!? た、たいへんだよ、姉さん。ADポリスは非常手段に出たらしい。ビルごとブーマをぶっつぶしちゃうって言ってる。あ、あと六分しかない！」
「マッキー、急いでリンナに連絡しなさい。一刻もはやく逃げるようにって！」
「わかった！」
シリアとネネはモトスレイヴをとばし、裏通りからビルに接近した。が、いくらも行かないうちにADポリスの非常警戒網にさしかかった。『危険！ 進入禁止』の文字の書かれた通行遮断板が立てられ、数人の武装警官が警備にあたっている。
「止まれ。ここから先へ行っちゃいかん！」
モトスレイヴの突進を見て、警官が叫んだ。
「ネネ、突破するわよ！」
シリアはそう叫びかけながらスピードをあげた。
制止を無視する気配を感じたらしく、警官たちの間にサッと緊張が走り、つぎつぎとライフルや銃をかまえるのが見えた。
シリアの指示がとんだ。
「モトスレイヴモード、スタンバイ――」
「スタンバイ、オッケー！」

た。
すぐさまネネが応答する。
肉眼でも、驚きと恐怖に目をみはる警官たちのひきつった表情がわかるほどの距離になった。
「うわっ、突っこんでくる気だぞ!」
「撃て、撃てっ!」
警官たちが口々に叫び、いっせいに銃口を上げた。
「チェンジッ!」
シリアが叫ぶのと、銃弾が飛来するのがほぼ同時だった。
銃弾の雨をとび越えるように、二台のバイクが宙に舞った。
と思った瞬間、それぞれのバイクのシルエットががらりと変化した。
「く、空中分解か――!」
警官のだれしもが一瞬そう思った。
通行遮断板のはるか上で、二台のバイクがクルリと一回転した――ように見えた。が、実際はそうではない。回転したのはバイクだけで、ふたりのライダーは空中に跳躍したままの姿勢で宙を飛んでいた。ライダーの背後にまわりこむような形になったバイクは、パックリとまん中から割れ、ライダーにおおいかぶさるようにして合体したのだ!
それはまるで鳥人のようだった。

　左右に広げられた車輪は、翼のように展開し、はばたきはしないものの、空気をはらんでふたりのライダーをふわりと滑空させる。そのまま警戒網の上をとび越え、地上に降下すると見えた瞬間、強烈なジェット噴射で地面を蹴ると、あっという間に上昇していった。

「な、何なんだ、あれは⁉」

　武装警官たちが、キツネにつままれたような表情でたがいに顔を見合わせたときには、ふたつの奇怪な影は、すでに背後のビルのどれかの屋上に消えてしまっていた。

5

「やっと見つけたぜ！」

　叫ぶがはやいか、レオンはバイクのタンクを蹴って通路にとびこんでいった。

「バカっ、あせるんじゃないよっ！」

　モトスレイヴを歩道にころがし、プリスはあとを追った。

　建物の中央をたてにつらぬく吹き抜けから、通路は三方向に放射状にのびている。そのひとつにレオンの後ろ姿が消えた。

　プリスが曲がり角までさしかかったときだった。通路で激しい銃声がおこった。

「レオン！」

　その呼びかけに答えたのは、レオンではなく、ブーマのレーザー砲だった。

プリスはとっさに歩道を前方にころがり、あやういところでレーザーをかわした。
眼の端にとまったのは、床にはいつくばったレオンと、通路の奥に立ちはだかり、いましもレーザーを吐きだそうと口をパックリと開いたブーマの姿だった。
プリスはすぐさま反転して角に身を隠し、通路をのぞき見た。
レオンが腰を浮かせ、レールガンをぶっぱなした。だが、ブーマは機敏に首をすくめて弾丸をかわし、ふたたびカッと口を開いた。
「どけっ！」
プリスはレオンにむかって怒鳴り、ブーマに正対した。ブーマの眼球にしこまれたセンサーが、新しい攻撃目標としてプリスをとらえ、ニョキニョキと忙しく動く。
そのすきをついて、プリスは右腕に装備したレールガンを発射した。一発目はブーマのひたいに当ったが、ぶ厚い装甲にはねかえされた。
「チッ」
だが、レオンの持つバカでかいレールガンとはちがい、プリスのハードスーツのアタッチメントに組みこまれているのは、威力はおとるものの、三基あって連射が可能だ。二発目はそれたが、三発目の硬質ニードルがみごとにブーマの大口に命中した。
ブーマはのどをおさえ、異物をのみこんだ人間のように苦しげに体を折り、激しくせきこんだ。

「うまいぞ。よーし、とどめはオレがさす」
レオンが意気まいてブーマに歩みよっていく。
「調子にのるんじゃないよ！」
レオンをおしとどめようと、プリスは前に出た。
――ゲボッ、ゲボッ。
ブーマののどが気味の悪い音をたてた。その音におし出されるように、ブーマの口からわずかな液体とともにとがった固まりが床の上に落ちた。命中したはずの硬質ニードルだ！
ブーマはなにごともなかったかのように立ちあがり、またカッと口を開いた。
プリスはレオンの体を反対側の壁に突きとばした。そのとたん、プリスとレオンのちょうどまん中をエメラルドグリーンの光線が走った。
「くそっ、レーザーまで元通りにできるのか！」
レオンがくやしそうにうなった。
C系列の戦闘用ブーマの特徴のひとつは、〝フュージョン機能〟と呼ばれる物質融合機能だ。人間でいえば筋肉にあたる太い触手状の組織の先端から、特殊な液体と高熱を噴出させ、あらゆる無機的物質に触手をもぐりこませ、体の一部に同化させるのだ。
それはブーマ自身の体内に対しても可能であり、この場合、弾丸くらいなら体組織を融合修復しながら外におし出してしまう。恐るべき自己修復機能なのだ。

だが、ブーマはレーザー砲を一回はなったきり、くるりと身をひるがえして通路の奥にむかって駆けだした。

「ブーマ野郎、やっぱり狂ってるぜ。絶対有利の態勢なのに、シッポをまいて逃げだしやがった」

（たしかにブーマの反応ぶりには、おかしなことだらけだ。しかし、そのためにADポリスの対ブーマ陣形が破られ、あたしたちまでふりまわされてる……。人間の欲望のために、その手先となって動くブーマだったら、いっそ対処のしようもあろうってもんだが、これじゃまるで血にうえた猛獣——いや、それだって満腹しちまえばおとなしくなる。凶器だ、破壊の快感と血を見るためだけに踊りつづける凶器の自動人形——！）

プリスは、狂ったブーマの恐しさをあらためて思い知らされた気がして、ゾッと背筋が冷たくなるのを感じた。

レオンはためらうことなくブーマを追って駆けだした。プリスも、ハッとしてその背中に追いすがるように通路を進んだ。

通路はすぐにつきあたりになっていた。そこから左右にのびる通路はどちらもゆったりとカーブしており、三つほど先のドアまでしか見通せない。吹き抜けの壁にめぐらされたラセン歩道と同じように、建物の中をぐるりと一周する回廊になっているらしい。

どちらにもブーマの姿はない。

「エレベーターはもう動いてねえ。建物の中にいた人間は、あらかた避難したんだ。ってことは、ヤツはこの階のどこかにいやがる」

通路のつきあたりのエレベーターの表示を確認してレオンが言った。

「待てよ……いけねェ、あと四分しかねえぜ！」

「どうした？」

「Ｅ作戦――つまり、このビルごとブーマをふっとばしちまう作戦が進行してるんだ。ここまでブーマを追い上げとけば、逃げられっこねえだろう。オレたちも、マゴマゴしてるとブーマ野郎と心中だ。この手でしとめられなかったのは心残りだが、しかたねえ。さっさと引きあげようぜ」

レオンは舌打ちしながらエレベーターのスイッチをおした。

「ＡＤポリスってのは、そんないいかげんな作戦しか立てらんないのか？　万が一、人がビル内に残ってたらどうすんだよ！」

「けどなァ、ブーマがこれ以上暴れてみろ、被害はとてもこんなもんじゃすまなくなっちまうんだぜ！」

「もういい。あたしだけでブーマを探しだしてやっつける。あんた、一応リーダーなんだろ？　すぐ下に行って作戦を中止させとくれ」

そう言うと、プリスは回廊の右手にむかってツカツカと歩きだした。

「ち、ちょっと待てよ、オイッ。カウントダウンが五分を切ったら、もう作戦の中止は不可……」

プリスを引きとめようと、レオンが大声をあげたときだった。

――キャーッ!!

だれもいないはずのビルの中に、くぐもってはいるが明らかに女の悲鳴が聞こえた。

レオンとプリスは、同時に回廊を左右に分かれて駆けだしていた。

6

「もっちろん、みんなはブーマの騒ぎなんてとっくになれっこよネ♡　ブーマがコワクって、ティンセル・シティで生き抜いてけるもんですかっ。まあ、さっきはチョッピリとりみだしちゃったけど、あたしはもう元気いっぱいだからね。ブーマが暴れてんのを横目で見ながらのダンスってのも、なかなかオツじゃない？　オシャベリがちょっと長くなったみたいだから、そろそろ次の曲にいってみよっか――アレッ？」

夢中でマイクにむかってしゃべりまくっていたリンナがふり返ると、ミキシングルームにはだれもいなかった。

（ど、どーしちゃったのォ？　まさか、オーナーもミキサーも、ブーマって聞いてビビッて逃げだしたんじゃ……）

見るとディスクもかかっていない。これでは、手元でいくら操作(そうさ)したって音楽が流れるはずもない。

（アッタマきちゃうわねー。いったいどこ行ってんのよ！）

リンナは回廊側(かいろうがわ)のドアをそっと開き、キョロキョロと左右を見まわした。スタジオに入る前は、うろつく人影(ひとかげ)もあったし、ふたつ隣(となり)の部屋は終夜営業のマージャンセンターで、ドアを通してさえ騒音(そうおん)が聞こえていたのに、今はシンと静まりかえっている。

（ヘンねえ……）

いささか不安になってドアを出かかったときだ。

突然(とつぜん)、重い足音が近づいてきた。

（ブ、ブーマっ!?）

声をあげるよゆうもなかった。リンナを発見したブーマは、いきなりリンナをおしこめるようにしてスタジオに侵入(しんにゅう)してきた。

ブーマにはねとばされ、リンナはDJ用のチェアーにすわりこんでしまった。

（ど、どーすればいいの。なんとか助けを呼ばなくっちゃ！）

ブーマはスタジオの中央に仁王立(におうだ)ちになり、ものめずらしげに周囲を見まわしている。狭(せま)い部屋の中いっぱいに置かれた機材を探(さぐ)っているのだろう。

「あ、あの、たった今、飛び入りでゲストがいらっしゃいました。と、とってもたくまし

くって、み、みなさんもよくご存じの方です……そ、それが、ブーマなんです！」

リンナがマイクにすがりつくようにそう叫んだ瞬間、黒い巨大な手が横からのび、マイクをリンナから奪いとると、まるで紙細工のようににぎりつぶしてしまった。

「キャーッ!!」

とうとう忍耐が限界にきたリンナの口から、ふりしぼるような悲鳴が、せきを切ってほとばしった。

マイクを投げすてたブーマの手が、こんどはリンナにむかってさしのばされた。

（こっ、殺される……）

「リンナじゃないの!?」

ドア口に現われた人影が叫んだ。ナイトセイバーズのハードスーツ！　それも、マリンブルーのハードスーツの主といえば……。

「プリス、助けてェっ！」

ブーマはぐるっと首をめぐらせ、ドア口のプリスをふり返った。と、何を思ったか、いきなりリンナの体を軽々とこわきにかかえあげると、プリスのいるドア口にむかって胸の熱線砲をはなちながら突進してきた。

プリスはとっさに回廊に出て、強烈な熱の放射をかわしたが、部屋の壁材はアッというまにアメのように融け崩れ、ドア口が三倍もの大きさに広がった。

「しまった。まだ人が残ってたんだ！」

反対方向から回廊(かいろう)をまわりこんできたレオンが、リンナをかかえたブーマが部屋からとびだしてきたのを見て、サッと顔色を変えた。レオンのたじろぎを察知(さっち)したのか、ブーマはレオンの目の前をゆうゆうと走りぬけて回廊を走った。

多少の犠牲(ぎせい)はやむをえない、といったんは心めたレオンだが、自分の手のとどくところで若い女の子が連れ去られるのを見過ごすことはできない。カウントダウンが刻々とゼロに近づいていることなど、気にしてはいられなかった。

「待て、ブーマっ！」

「バカっ。あんたももうあぶないんだよ。さっさと逃げるんだ！」

レオンとならんで駆(か)けだしたプリスが、大声で怒鳴(どな)りつけた。

カーブの先を行くブーマが、さっきのエレベーター前の角をラセン歩道(スパイラル・ウォーク)のほうへ曲がっていくのが見えた。

「冗談(じょうだん)じゃねえや。見捨(みす)てて逃げたら、ＡＤポリスの名が泣いちまわァ！」

レオンは決死の覚悟(かくご)で言いはなった。

（なんて大時代的な野郎(やろう)なんだ、こいつは！　しかたない……）

プリスはサッとレオンの前にまわり、一発腹にパンチをくれた。ほんの軽く当てただけだったが、なにしろハードスーツは着用している者の筋力(きんりょく)を九〜一〇倍にも増幅(ぞうふく)する。疾走(しっそう)し

ていたレオンは、たまらずもんどりうって回廊（かいろう）にころがった。

さいわいエレベーターはさっきこの階に呼んである。プリスはレオンの体を引きずってエレベーターボックスにおしこんだ。苦しそうに顔をゆがめるレオンの前で、エレベーターはゆっくりと機械的にドアを閉じた。高速で降下するボックスの中で生じる浮遊（ふゆう）の感覚が、レオンの無念（むねん）さをよけい強く感じさせた。

歩道（ウォーク）にたどりついたプリスは、ブーマの姿（すがた）がどこにもないのを知った。

（まさか……）

プリスは、さっきブーマがプリスたちめがけて発したレーザーでグニャグニャになった鉄筋のところから首を出し、目のくらむような吹き抜けの奈落（ならく）の底をのぞき見た。が、三〇数階ある歩道（ウォーク）のどこにもブーマの影はない。上は……。

プリスは思わず「あっ」と声をあげた。

六章

1

プリスの頭上数十メートル、五〇階建てのこのビルに、カサのようにおおいかぶさる強化合成樹脂ガラスの塔まで、あと数メートルを残すばかりのところ、最上階に近い歩道にそって植えこまれた鉄筋を、スルスルと猿のようにのぼる黒い塊があった。

（あんなところに――）

ブーマは、プリスが今首を出している鉄筋の切れ目から、吹き抜けに出たにちがいなかった。そして、まるでやむにやまれぬ熱情にとりつかれた者のように、人工的に造られた深いたて穴をひたすら上へ上へとのぼっていったのだ。その頂上には、激しくうず巻きながら流れる不気味な雨雲が見えていた。

そのブーマの姿は、なぜかプリスの野性の血をふつふつとわかせた。

ビル爆破のタイムリミットが迫っているというあせりがあった。ナイトセイバーズとして数々の修羅場をともに切り抜けてきたリンナを救わなければという使命感もあった。が、しかし、プリスをもっとも強く駆りたてたもの、それは、猛獣を追う原始時代の狩人のような言い表しがたい熱情だった。

エレベーターも歩道もある。それを使えば、すくなくとも吹き抜けをはいのぼるよりはずっとはやく最上階へ達するのに——そう考えるのはもっともだ。だが、ブーマは楽な道をわざとさけるかのように壁面をのぼる。なぜかと問われれば、頭上にあんなにはっきりと天が見えてるじゃないか、ここにさえぎるもののない巨大な通り道があるじゃないか、プリスはブーマにかわって堂々とそう答えてもいいとさえ思えてきた。

人間の形をしていながら、人間よりも数段ずるがしこく、正確で、緻密で、力強い。そんなブーマを、プリスは、いまわしい、憎たらしい、おぞましい存在と思いつづけてきた。だが、狂った——たしかにそうかもしれないが——ブーマは、人間の裏をかき、人間をあざ笑うかのような、そんないつものブーマではなかった。体内から突きあげてくる衝動に身をまかせ、思うさま暴れまくり、追われるままに必死に逃走し、ついに残されたただひとつの脱出口をめざしてはいのぼる——そういうことなのではないか？　だが、それは生物にも動物にも人間にもある、極限状態とあまりにも似ている。極限状態に至って、ようやくブーマと人間に共通する何かが生じたのではないか？

生活も思考もどっぷりと文明につかりきり、自分を、野性を忘れさり、夢見ることをとっくにあきらめた現代人には、そのときのプリスの心情を理解することは不可能だ。プリスは、やっと正面から対決すべき相手として、ブーマを認めた。そのブーマを倒すことが、自分自身を証明する唯一の方法であると、プリスは確信したのだ。



「ちくしょう。待ってろ、ブーマめ！」

のぼりつづけるブーマにむかって吐きすてるように言うと、プリスは歩道の途中にころがしてあったモトスレイヴのところにすっとんでいった。

アクセルを全開し、加速をつけるために、このような狭い曲路では無謀と言うしかないジェット噴射の使用も辞さなかった。なめらかな床面を、後輪が左右に横すべりする。ハンドルをとられ、ハードスーツが壁をこすって火花を散らす。鉄筋にひっかかれば、もんどりうって床面にたたきつけられるか、ヘタをすれば吹き抜けに投げだされ、一〇〇メートルも下のホールまで一気に転落してしまう。

イチかバチかの賭けだった。だが、プリスは、体中がカッと燃えあがるような充実感の中で、たくみにモトスレイブをあやつった。身の危険や恐怖の感覚など、猛スピードでとびさる周囲の光景にまぎれて、どこかへふっとんでしまったようだった。

――ガシャッ。

（ン――？）

どうやらブーマはとうとう最上階へ達し、強化合成樹脂ガラスをたたきこわしたらしい。粉々にくだけ散ったガラスが、キラキラと輝きながら吹き抜けを落下していくのが、プリスの眼の端に映った。それとともに、頭上からいきなり突風が吹きおろしてきた。

「おっと、なんのこれしき――」

プリスは歯をくいしばって体勢のくずれを修正した。
すぐに屋上への非常口が見えてきた。レールガンで錠をはじきとばし、モトスレイヴごと屋上に乗りつけた。ブレーキングの感触が妙になつかしかったのは、ここまで一度もブレーキをかけずにのぼってきたからだった。
横なぐりの雨の中だった。ビルの四すみや頂上の塔のてっぺんにとりつけられた警戒用の赤ランプが、やけにボウッとかすみ、下界はほとんど見わたせない。低くたれこめた雨雲がビルの上をつつみこんでいるのだ。
メットのバイザーの赤外線センサーをオンにし、激しい雨にようやく眼がなれると、モトスレイヴの一〇メートルほどむこうに動くものが見えた。
バタバタしている白いものはリンナの足だった。あいかわらず、ブーマはリンナを腕にだきかかえているのだ。だが、モトスレイヴでとびだしてきたというのに、ブーマはこちらに背をむけたままだ。
(なんだ、前方に何かあるのか——?)
眼をこらすと、ブーマのさらに一〇メートルほど先、ビルの角のところに、なにやら人影のようなものが……。
そのとき、ブーマの胸から熱線砲が火を吹いた。いくすじものしゃく熱した光線が、ビルの屋上をまるくとりかこむ保安用の鉄条網をつらぬいた。

と、一瞬にして燃えつきた炎の中に、ひらりと身をかわしてとびあがった人物の姿が浮かびあがった。
「シリア――!?」

2

「助かったぜ。リンナがブーマにつかまっちまって、まいってたんだ！」
メットにしこまれた通信機で、プリスはシリアに呼びかけ、それと同時にブーマの足元めがけてレールガンを撃った。ブーマの注意をシリアからそらすためだ。案のじょう、ブーマはこちらをふり返り、のどからレーザーを放射してきた。モトスレイヴを一瞬にしてスタートさせ、ビルの中央にそびえるガラスの塔の裏側へ逃げこむ。
「プリス、それより、はやくこのビルから離れないと、たいへんなことになるのよ！」
プリスの援護で有利な位置を確保したシリアが応答した。ブーマを混乱させるため、こんどはシリアがブーマの横の床にむけて手のひらからレーザーを照射する。鉄板が焼け、ジュッと激しい水蒸気があがった。
「ADポリスのE作戦のことか？　知ってる。もうほとんど時間がねえ！」
さらにプリスがレールガンをはなつ。
「正確には、あと四二秒よ」

ブーマは、バイクモードで走るプリスと、モトスレイヴモードで蝶のように舞うシリアにかく乱され、リンナをかかえたまま立ち往生している。

「それっぽっちでブーマをやっつけるのはムリだぜ。だいいち、リンナがつかまってちゃ攻撃もロクすっぽできやしねえ」

プリスがいらだちの声をあげた。

「わたしに考えがあるわ。プリス、しばらくブーマを引きつけてちょうだい。そして、わたしが合図をしたら、屋上の南側へブーマを追いつめるのよ、いい？」

「わかった。こうなったら、心中する覚悟だ。リンナひとりを死なせはしないぜ――」

プリスはわざと爆音をとどろかせてブーマの鼻先を駆け抜け、レールガンを派手に撃ちまくって挑発する。

ブーマはプリスの誘いにのり。レーザーを乱射しながらじょじょに南側の壁に近づいていった。

「キャーッ！」

ブーマにふりまわされてリンナが悲鳴をあげる。

「リンナ、かならず助けてあげるから、どうか落ち着いて聞いてちょうだい――」

外部音声に切りかえたシリアが、リンナをなだめるように言った。

「ビー・チップを投げるから、うまく受けとめてブーマに取りつけるのよ。どの場所かは

知ってるわね？」
「も、もちろんよっ。でも、そんなことしてるまに――」
「わたしを信じなさい！　さあ、いくわよ」
シリアは、ブーマの注意がプリスにいった瞬間を見はからい、ビー・チップをほうった。のびあがってそれをつかんだリンナは、ブーマの腕の中で体をやっとひねり、なかばヤケぎみにブーマの首のうしろにビー・チップをおしつけた。
「すんだわよ。で、どーすんの？　これであたし助かんの？」
リンナがわめいた。
「プリス、離れて。そして、あなたも南側からとびおりるのよ！」
「な、なんだって!?」
ブーマの熱線砲をさけて、プリスは太陽光受光板のかげにまわりこんだところだった。
ブーマは南側の端に立っていた。
なにを思ったか、シリアはまったく見当ちがいの方向にレーザーを発射した。
ところが、そこを起点にして、黄色い光のすじが床の上を走った。その線はブーマの立つ場所をぐるりととり囲むように進んだ。そして、ビルの端までそれが達した瞬間、ズズズズズッ、とにぶい音が足元からはいあがってきた。
（E作戦が、とうとうカウント・ゼロになったのか――!?）

プリスは、瞬間的に足のすくむような思いにとらわれた。
だが、崩れだしたのは南側、ブーマの立つ場所だけだった。
そこにあった太陽光受光板、フェンス、保護壁、床、そしてリンナをかかえたブーマが、急に、そして一挙に何かに強引に引っぱられ、はがされるように、百数十メートル下の地上にむかってなだれ落ちていった。
「プリス、飛ぶのよ!!」
シリアの声が、ムチのようにプリスのメットの中に響いた。
プリスはフェンスをとび越え、雨雲でもやった虚空に舞った。
そのとたん、周囲の街区で最高高度を誇るＫＫメディアステーションの全体が轟音につつまれた。壁が砂のように崩れ、粉々になったガラスはキラ星のごとく輝きながら流れ、地上付近ではさながら巨大ロケットの発射台のようにもうもうたる土煙がさか巻いた。
モトスレイヴモードにチェンジし、ビルを周回しながら降下してゆくプリスがふり返ってみると、たった今そこを足場にしてとびだしたはずの屋上が、下のほうほど急激にではないだけ、かえってよけいに印象強く、もろくも崩れさっていくところだった。
（あの中にいたら、それどころじゃない。アッというまになすすべもなく……）
プリスは、自分が今いる世界のもろさ、あやうさを見る思いだった。そのあやうさは、そしてさらに何重にも積み重なったものなのだ。やっとバランスのとれた表層に、人間はへば

りつくように生きている。

(こうやってモトスレイヴで逃げだしたとしても、いったいあそこからどれほど飛翔したことになるというのだろう? どれほどの難をのがれたと言えるのだろう——)

いくら強く願ったとしても、このまま飛びつづけるわけにはいかないのだ。なぜなら、ティンセル・シティの生はすべてそのあやうい表層の上にあり、プリスの生きる理由もまた、そこにしかないものなのだから——。

3

「キャアアアアアアア——!」

リンナは力のかぎりせいいっぱい叫んだ。そうでもしなければ、きっと気絶してしまうことだろう。死ぬのなら気絶したままのほうが楽に決まっている。だが、シリアはきっと助けると言ったのだ。

(シリアがウソつくはずないもん。あたしは助かる。助かるにきまってる。気絶なんかしてらんないっ!)

祈るような気持ちで心の中でそう叫び、恐怖感をすこしでも遠ざけようと両目をしっかりつむり、歯をくいしばった。

実際にリンナがブーマの腕からはなれて空中を落下していた時間は、ほんの二秒ほどのあ

いだった。だが、その時間は、リンナにとっては数分にも感じられた。

いきなり何かに体全体がフンワリとつつみこまれた。ビルの崩壊する音、激しい雨音、そして都市の喧噪、そういったさまざまの音が——もちろん、聞こえなくなってやっと『そういえば聞こえてた』と気づいたのだが——ほとんど消滅してしまったかのようだった。

二、三度大きな揺れはあったものの、リンナの体はそのたびにやわらかく心地よい布地にはずんだだけだった。

——ブツッ。

布地に細い切れ目が入れられ、とたんにドッと空気が抜けて布地が体に重くのしかかってきた。

「そっから抜けだすくらい自分でやってよネ。まさか、気絶しちゃったなんてことないんでショ?」

「ネネ——」

聞こえてきたのはネネの声だった。リンナは急に元気をとりもどして外にはいだした。

「あたし……生きてんのね? 助かったんだわ! 生きてるんだわ!」

リンナはハードスーツ姿のネネにとびつき、ピョンピョンとびあがった。

「ちょっとォ。もうDJのバイトは終わったし、ブーマからも解放されたんだから、いつまでもプッツンしてないでよね。助けてあげたお礼くらい言ってもいいんじゃない?」

ネネは皮肉っぽい口調であきれたように言ったが、声ははずんでいた。

「じゃ――」

リンナは自分がはい出してきた袋みたいなものをふり返った。レスキューバルーン――ネネのモトスレイブに積みこまれている救助用具だった。バイクのシートの下から撃ちだされ、目標物をふわりとつつみこむ。そして、わずか一秒でラグビーボール形にふくらみ、何かにぶつかっても衝撃を吸収するようになっている。ネネは、ブーマの手をはなれたリンナを狙い、みごとにレスキューバルーンで保護したのだ。

「あ、ありがとう、ネネ。こんなことなら、あんたにもっとやさしくしとくんだったわ。今夜だってスタジオに呼んだげようかなって、チラッと思ったことは思ったのよ」

「じょ、冗談でショっ。あたしはブーマになんかさらわれるのはマッピラよ。それに、もしあたしがそこに行ってたら、だれがあんたを救いだせんのよ！」

「そ、それもそうね……あら、プリスとシリアは？」

「ブーマはシブとく隣のビルに着地して助かったのよ。二、三階下まで踏みぬいたらしいけどね。でも、シリアはちゃんとそれも計算ずみで、プリスといっしょに追跡してったわ。あたしたちもこうしちゃいられないのよ。さあ、急いで！」

ネネはモトスレイブを引っぱってエレベータールームに行く。リンナが見まわすと、ここは放送局のあったビルの南側にあたる、古いホテルの屋上だった。ここからはさらに数十メ

ートルの高さにそびえていたはずの隣のビルは、どこにも見えなかった。
「ＡＤポリスのトンチンカンが早トチリして、あんたのいるビルをブーマごとぶっこわす作戦を実行しちゃったってワケ。それで、マッキーが必死にあんたの通信機に呼びかけたし、ＡＤポリスも退避命令をガンガンがなりたててたってゆーのに、あんたったら、ＤＪに夢中になって、ちっとも気がつかないんだから。ったくもー」
エレベーターに乗ったとたん、ネネはメットを取ってふくれっツラをした。
「あ……わかった！　スタジオよ、スタジオにいたからよ」
「スタジオ？」
「そう。スタジオは、防音壁でかこまれてるうえに、電波も完ペキに遮断すんのよ。だから、どんな呼びかけもとどかなかったのよ。なーんだ、そうだったのかァ。あたし、ブーマにかかえられて目のくらむ吹き抜けをのぼってるとき、みんなあたしを見捨てて逃げたんだわって、ほんとに悲しかったんだから……」
「まあ、助かってなによりよ。あ、一階に着いた。リンナ、安心してるヒマはないわよ。まだブーマは生きてんだからね。ついといで！」
ネネは無人となったホテルの裏口から忍びでて、リンナをうしろに乗せると、深夜の街をぶっとばした。ビルの爆破とブーマ騒動が鎮圧されたという話が伝わったのだろう。街区はヤジ馬と、真夜中を楽しもうという人々でふたたびざわめきはじめていた。

4

「マッキー、ブーマにアクセスできた？」

ネネが言いながらコマンドキャリーの中にとびこんでいった。ブーマ騒動のあったビルから数ブロックはなれた建物の地下駐車場の片すみに、派手な色彩をほどこしたコマンドキャリーは人目をさけるようにして停めてあった。

「ああ、二度目だからね。ビー・チップのひろうデータは、もうすべて自動的にファイルされるようにセッティングし終わったよ。今は、姉さんがビー・チップに手を加えてとりつけた発信装置で、なんとかブーマの電脳内にもぐりこもうとしてるとこなんだけど……くそっ、これがなかなかやっかいなシロモノでね」

眼をモニターの上にすえたまま、ひとりごとを言うようにつぶやいた。手は目にもとまらぬ速さでキーボードの上を走りまわっている。

コマンドキャリーの後部の一角に、応急にもうけられたコンピュータ・コンソールだ。前のように何台ものコンピュータが置かれていないのは、ここで採集したデータを屋上住居に送って、連動しているコンピュータ群に読みとらせているからだろう。

「あたしも手伝う――」

手ばやくハードスーツを脱ぎすてたネネが、バトルランジェリーのまま、マッキーの横に

あるもう一台のコンピュータにとりついた。
「あ、あたしは何をすれば……」
ひとりのけ者にされた感じのリンナが、当惑した表情でそう言いかけたときだった。
壁の受信機が鳴りだした。リンナはあわてて受話機を耳にあてた。
「リンナなの？　ネネがうまく救出してくれたのね。おめでとう」
シリアだった。しかし、ことばとはうらはらに、シリアの声は緊張した早口で、激しい息づかいが受話機を通しても手に取るようにわかる。
「ええ、シリアたちのおかげよ。で、ブーマはどうなったの？」
リンナはせきこんでマイクにむかってたずねた。
「追跡中だけど、あいかわらず建物の中なのよ。（プリス、あなたは左手の通路にまわって！　つぎの角で上に追いつめるのよ……）どう、マッキーはブーマの電脳にリンクできたよう？」
「そ、それが、なかなかたいへんらしいわ。ネネもいっしょにやってんだけど――」
それを聞くと、シリアの応答は、しばらくブーマに応戦するためのプリスとの断続的な会話で途切れた。通信をいちいち切りかえているヒマさえないくらい切迫した情況らしかった。
それが一段落すると、シリアはリンナに「戦えそう？」とたずねた。
「あたし？　もっちろんよ。あのブーマにはさんざんヒドイ目に遭わされたんだもの。あ

たしの手でヤツをしとめてみせるわよ！」

リンナは意気さかんにそう答え、シリアたちの現在地を確認した。通話を切ると、さっそく服を脱ぎはじめた。色気づいたマッキーの目なんか、この際気にしていられない。マッキーにしても、コンピュータの操作に必死で、とてもリンナの着がえをのぞく余裕などなかったのだ。ハードスーツを装着し終えると、リンナは自力でコンベアーを操作してモトスレイヴをおろし、わずか数十秒後には路上にとびだしていった。

シリアに言われた街区は、そのハビテーション・ゾーン内でもだいぶ奥まった場所にあった。大断層の東側のハビテーション・ゾーンであればさしてめずらしくもないことだが、そうした場所の通例にもれず、ブーマの逃げこんだのは迷路のような貧民街だった。

ブーマの出現を知ってバラバラと建物からとびだしてくる者もいるが、汚ない路上にゴミ袋と見まちがえるような格好で寝そべっている男や、窓から顔を出してへらへら笑っている麻薬中毒の女、騒ぎのドサクサにまぎれて浮浪者に襲われた少女が助けを求めてあげる悲鳴と、収拾のつかない混乱ぶりだ。

「ウッ、なんてひどいとこなの……」

最新流行に敏感で派手好みのリンナは、めったにこんな場所に足を踏み入れることはない。ハードスーツ姿でメカで固めたモトスレイヴにまたがったリンナのまわりに、ものめずらしげに寄ってくる者がゾロゾロいる。リンナは思わず立ちすくんだ。これだけの騒ぎになって

いるのに、いまだにＡＤポリスが駆けつけてきてないのは、通報が遅れているためばかりではなさそうだ。こんな場所に入るのはだれしもイヤがるだろう……。

「シ、シリア、どこにいんのよーっ！」

通信機のスイッチを入れると、リンナは助けを求めるように叫んだ。

シリアたちがブーマを追っているのは、さらに小路をいくつも曲がった先だった。しかし、ひとりで迷路をさまよっているよりは、ブーマと戦っているほうがよっぽどマシとばかり、リンナはあわててモトスレイヴを発進させた。

「リンナ――！」

得体の知れない小路をノロノロと進んでいると、いきなりプリスの声が耳にとびこんできた。ハッとして上を見上げると、ガラスのかわりに窓に打ちつけられた安物の合成スレートを突き破って、今しもブーマがリンナの頭上にとびおりるところだった。リンナはとっさにモトスレイヴを突きとばして横に身をかわした。

ブーマはそのまま、反対側の崩れかけた塀のむこうにとびこんでいった。

つづいてプリスが、なんのためらいもなくそのあとにつづいてとびこんだ。

「だいじょうぶ!?　リンナ」

シリアが助け起こしてくれた。ゴミバケツの山に突っこんだために、バイザーにヌルヌルしたものがベットリと付着していたが、どこにも異常はない。

「だ、だいじょうぶ——みたいよ、いちおう」
「リンナ、プリスとブーマのあとを追ってくれるわね？」
「ええ、わかった。でも、シリアは？」
「マッキーとネネが気がかりなの。わたしはコマンドキャリーにもどるわ。じゃ、あとはよろしくお願いね」
「そ、そんなァ……」
だが、シリアはリンナにかまわず、リンナの乗ってきたモトスレイヴにまたがると、アッというまに走りさってしまった。
「もう、知らないっ！　こうなったら、あのにっくいブーマを徹底的にぶちのめしてやるしかないわよ！　ったくもう」
ブツブツ言いながらも、次の瞬間にはリンナはヒラリと塀をのり越え、まっ暗な建物の中に駆けこんでいった。
そこは、ずいぶん前に使われなくなった玩具工場だった。古くさい二〇世紀の感性としか思えない人形の残骸がゴロゴロころがっている。
「いったいどうする気なんだ、ブーマのやつ……」
プリスは通路の角の壁にピタリと身を寄せて、むこうをのぞき見た。と、ブーマの索敵センサーがピクピク動き、両眼がオレンジ色に妖しく光った。ブーマのいるところは行き止ま

りになっているのだ。

「プリス――」

リンナが通路を走ってきた。

「リンナ、来るな、あぶない――！」

プリスが叫ぶのと同時に、ブーマの熱線砲が火を吹いた。

「キャッ！」

短い悲鳴をあげたものの、リンナは機敏な身のこなしで通路の天井近くまでジャンプし、はりめぐらされたパイプの一本につかまると、わずかに反動をつけただけでプリスのいる物かげにとびこんできた。

「チッ、ブーマめ、また逃げやがった」

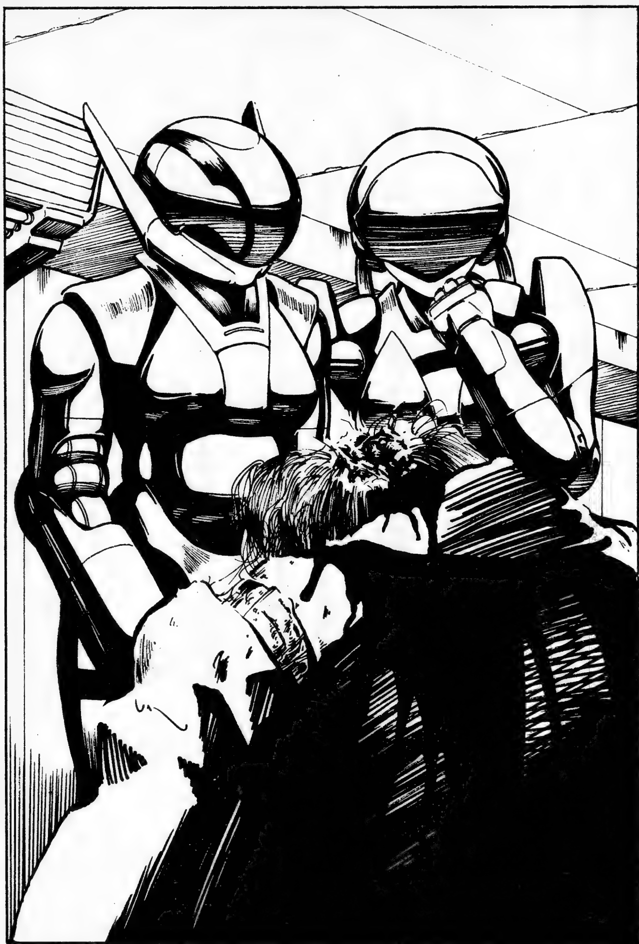
プリスが舌打ちしながら通路の奥へ進んだ。リンナがおそるおそるあとにつづく。

通路のつきあたりの上の天井壁が、アメのように融けてパックリと穴があいている。カンカンカンと、鉄の床を駆けていくブーマの足音が聞こえた。

プリスとリンナは急いでその穴にのぼった。機械類が片づけられた小さな体育館ほどの大きさの工場だった。端っこにある休憩室らしい小部屋に明かりがともっており、ドアが開きっぱなしになっている。

「くそっ、これで四人目の犠牲者だ……」

毛布から半分体を出した格好で、頭を一撃で割られて息絶えている浮浪者を見おろし、プリスはくやしそうにつぶやいた。
「よ、四人目って……じゃあ、あたしが助かったかわりに、四人もの人がブーマに殺されてしまったの!?」
リンナの声がうわずった。
「いや、そうじゃないよ。シリアの命令なんだ。ブーマを殺しちゃいけない、ってな」
「ブーマを殺すな? それいったいどういう意味よ、プリス。ブーマが暴れまくるのを、ただ指をくわえて見てろっていうの?」
「あたしたちがブーマを追ってるのは、ブーマが人間に危害を加えようとするのを極力ジャマするためなんだ。もう何人もあやういところを助けたさ。けど、ブーマを倒さずに被害をゼロにおさえるなんて、どうしたってムリな話だ」
「シリアは何を考えてるのよ!」
「ブーマの狂った理由をたしかめるためってことだ。これ以上大きな被害を出さないようにということもあるが、どうやら、この騒動の裏には、思いもかけないような巨大な陰謀が隠されているらしい……」
そう言うと、プリスはブーマの逃げたらしい破れ窓を通して、あいかわらず雨のふりしきる暗い虚空を見つめた。



5

「やった、とうとうブーマの電脳にリンクしたぞ！」
マッキーが歓声をあげた。
「ホ、ホント!?」
ネネは自分の操作していたキーボードをほうりだし、急いでマッキーのモニターのほうに寄ってきた。
「ウン。ぼくもずっとネネと同じように電脳にアクセスするコマンドを見つけようとしてたんだけど、どうにもラチがあかないんで、別の方法でやってみたんだよ」
「ヘエ、どんな方法なの？」
「ほら、姉さんが、ブーマは人間とほぼ同量の情報を吸収するんだから、電脳は穴だらけのようなものだって言ってたじゃない。『穴』ってつまり、耳とか鼻とかっていう感覚器官のことだよね。それをヒントにして、即席のプログラムを組んでみたのさ。いいかい、まず、こちらの信号に反応して、電脳内の情報をコントロールしたり、引き出したりするプログラムを作る。そして、そのプログラムをいったんバラバラに分解して、音声の波形信号に組みこんだのさ。ビー・チップの発信機を通してブーマの感覚系統に流してやったら、案のじょう音とまちがえてのみこんじゃったってワケ」

マッキーは得意そうに片眼をつぶってみせた。
「なーるほどね。ブーマが音を聞きとろうとデータを再構成したとたん、こちらの命令にしたがうプログラムがブーマの電脳の中で動きだした……。やったネ、マッキー！」
「そういうこと。あとは、姉さんが別にこしらえた電脳支配プログラムを発信し、電脳の中のプログラムにそれを引きこませれば、ブーマはもうこっちの思い通りサ！」
マッキーは勢いこんでシリアの作ったデータ・チップをコンピュータのドライブにセットし、忙しげにキーをたたきまくった。
「でも、なんだかあんまり簡単にいきすぎじゃない……」
「デヘヘ。じつを言うとね、これ、姉さんのアイデアなんだ」
マッキーがペロッと舌を出した。
「そんなこと、すぐわかったよ。だいいち、こんな短時間でそんな手のこんだプログラム組めるはずないもんね。でも、あたしの言ってるのは別のことよ。現代の最高水準のコンピュータ技術の結晶であるはずのブーマの電脳が、いくらなんでもアッサリ侵入を許しちゃうなんて……」
「だから、これからがたいへんなのさ。侵入したプログラムはブーマにとっては異物。電脳はやっきになって排除しようとかかってくるはずなんだ。まずは、ガードプログラムとの戦いだ！」

マッキーの表情が真剣になった。

モニターが、データ表示から、ビデオゲームのようなシミュレーション画像に切りかえられた。中央に位置する黄色の八角形が、音声データにまぎれて先に侵入した先導プログラムだ。それをめがけて、データの選別にあたっていた、ブーマのガードプログラムのひとつが攻撃をしかけてくる。ガードプログラムは正方形の青いワクで表されており、そこからピッ、ピッとさかんに赤いドットが先導プログラムめがけてはなたれる。赤いドットは、データを破壊消滅させる電磁素子なのだ。

マッキーは、キーボードをたくみに操作して八角形の先導プログラムを逃げまわらせる。

やがて画面の右端に、だ円形の白い電脳支配プログラムが出現した。先導プログラムやガードプログラムより数倍も大きい。だが、自由に動きまわる力はない。先導プログラムが引きつけてやらなければ、完全に入りこむことはできないのだ。

ブーマ側のガードプログラムが三つになった。おそらく聴覚ガードプログラムひとつでは先導プログラムをつぶしきれないとみて、他の感覚データの選択にあたっていたガードプログラムが呼びつけられたのだ。

三対一——先導プログラムの不利は明らかだ。新手のガードプログラムが、先導プログラムをはさみ撃ちするようにまわりこむ。

「あぶないっ！」

ネネが悲鳴に近い大声をあげた。
うしろにまわりこんだガードプログラムが、別の攻撃をかわしてななめ左上に移動する先導プログラムの通過地点にむけ、電磁素子をはなったのだ。
「くそっ！」
マッキーがキーボードをこわしてしまいそうなほど激しくテン・キーを乱打する。
電磁素子の赤い点が激突する、と見えた瞬間、いきなり八角形の先導プログラムが二つに分裂し、赤いドットはそのすき間をすり抜けていった。
二つに割れた八角形は、マッキーの両手の動きに合わせて別々に逃げまわる。
「片っぽ、あたしが引き受けるワ！」
ネネがマッキーの横から手をのばしかけた。
「いや、別々に逃げまわってたってキリがないよ。合体しなきゃ意味ない――」
画面に忙しく眼を走らせながらマッキーが言った。
「じゃ、いったいどうすれば……」
半分ほど画像にくいこんだ電脳支配プログラムは、先導プログラムが逃げまわりはじめてからすこしも動いていない。支配プログラムの全体が画像の中に完全に入りこみ、プログラムの本体を守っている卵のカラのような保護素子を突き破って、支配プログラムが画像全体に広がったとき、はじめてブーマの電脳を支配し、こちらの思い通りに動かすことができる

のだ……。

ガードプログラムのはなった電磁素子の流れ弾が、支配プログラムをつつんだ保護素子壁に当たり、あっけなく消滅した。

（そうだわ、保護素子を使えば……！）

ネネは急いで自分のコンピュータにとりついた。コマンドを打ちこむと、マッキーの画像と同じものが映しだされる。ネネは電脳支配プログラムにアクセスした。

「な、なにをするんだい、ネネ！」

マッキーが叫んだ。

「支配プログラムの保護素子をガードプログラムにぶつけんのよっ！」

だ円形の支配プログラムから、白いドットがつぎつぎとはがれ、画面を横ぎって飛んだ。保護素子の欠けた部分は、小さなへこみになって支配プログラムが露出したままだ。

「そ、そんなことしたら、支配プログラムがまるハダカに……それに、保護素子があたれば、先導プログラムだってやられちゃうんだぜ！」

なんとかふたたび合体して八角形にもどった先導プログラムが、赤いドットにつづいて飛んできた白いドットをあわててかわした。

「だって、もうこれしか方法はないわよ!!」

ネネは保護素子をガードプログラムめがけてつぎつぎ撃ちだした。マッキーは必死で逃げ

まくる。電脳内のシミュレーション・バトルは、はてしなく続くかに思われた。頭の中をひっかきまわされているブーマは、今ごろメチャクチャに暴れまわっているはず……。

「やった。ガードプログラムが全滅したわっ！」

ネネは思わず手を打ち合わせて、ピョンピョンとびあがった。

「フュー、なんてムチャなことすんだよ。あー、命がちぢまる思いだった……」

大きなため息をつきながら、マッキーがゆっくりとキーを操作する。

右端に止まっていただ円形が、八角形に引き寄せられるように画面中央に移動した。だ円形の左側は保護壁がもうほとんど残っていない。その動きが止まったとたん、保護壁を形成していた素子がスッと消えさり、先導プログラムが電脳支配プログラムと合体した。

「よーし、これで電脳支配プログラムが作動するぞ。やっとコイツの出番だ――」

マッキーはモニターをデータ画面にもどし、操縦席からなにやらゴテゴテと電極のいっぱいくっついたサンバイザーみたいなものを持ってきて、コンピュータに接続した。そして、サンバイザーを頭からスッポリかぶり、まっ黒いゴーグルをおろして眼をおおう。超LSIチップや電極がむき出しになっている様は、まるで初期のロボットのようだ。

「これも、姉さんに言われた通りに作っといたものなんだ。まだ一度も実験してないから、うまくいくかどうかわかんないけど、こんな緊急時なんだもん、ぶっつけ本番でやるしかない。名づけて『ブーマ・コントロール用ヘッドギア』かな？　さあ、ぼくはもうブーマ自身

だぞ！」

「だ、だいじょうぶぅ……」

ネネが不安そうに横で見守る。

マッキーは両手をキーボードの上にはわせ、手さぐりでいくつかのキーをおした。どうやらゴーグルは外部を見ることはできないらしい。

マッキーのほほがときどきピクピクとけいれんする。と思うと、口を大きく開き、深呼吸するようにハーッと息を吐く。首をちょっとひねったり、ひじを強くはったりする動作は、まるで機械のようだ。

「マッキー！　マッキー、どうしちゃったの？　ねえ、聞こえる⁉」

ネネはあわててマッキーの肩をゆすったが、それにはまったく反応しない。マッキーはなにもない前方をじっと見つめるようにすると、とたんに両方のこぶしをにぎりしめ、力こぶを自慢するときのポーズで両腕を持ちあげた。

（こ、このポーズは……ブーマ⁉）

そのときだ。マッキーがいきなり立ちあがり、ジャンプしたと思うと、コマンドキャリーの側壁を強く蹴りつけた。グキッ、と音がした。足の骨にヒビが入ったのは確実だ。それくらいムチャな蹴りだったのだ。しかし、マッキーはすこしも痛がる様子はない。

（ま、まさか……）

「やめて。やめて、マッキーっ！」
ネネは、頭から別の側壁に突進していこうとするマッキーの背中にとびついた。
「ネネ、この騒ぎは何なの――？」
後部ドアから入ってきたハードスーツ姿のシリアが怒鳴った。マッキーが暴れだしたために、シリアたちの服やコンピュータの周辺機器があちらこちらに散らばっていた。
「シ、シリア、マッキーを止めて。狂っちゃったのよう！」
「な、なんですって!!」

6

「やっぱり、これのせいね……」
シリアがつぶやいた。ゴーグルだけをヘッドギアからはずしてのぞいたり、耳あて部分に耳をおしつけたりして考えこんでいる。
「それ、ブーマを操縦する機械なんでしょ。どうしてこんなことになっちゃったの？」
意識を失ったマッキーを介抱しながらネネがたずねた。マッキーはものすごい力で暴れ、ハードスーツを装着したシリアが現われてくれなければ、とうていとりおさえることはできなかっただろう。ヘッドギアをはずしたとたん静かになったが、よほどのショックを受けたらしく、そのまま気を失ってしまった。骨折した足が痛むのか、ときどき顔をしかめる。

「おそらく、ブーマの電脳と一体化したとたん、マッキーの頭の中にブーマの吸収する膨大な情報が流れこんできたのよ。人間は、ブーマ以上に大量の情報をいちどに吸収しているわよね。無意識のうちにそれを選別したり、意味のあるものにだけ反応したりするから、さほど混乱することはないけど、ブーマにとっては情報はすべて等価だからね。マッキーは情報の波にのみこまれ、意識が混乱してしまい、自分が情報の内容について判断し意志を決定するよりまえに、ブーマのほうが情報に反応したわけよ。そして、電脳が発した命令が、リンクしたマッキーの体にも伝わってしまったのね」

「こ、こわい……。じゃ、ブーマをあやつるはずが、逆にあやつられてしまったってことなのね」

ネネは化け物でも見るように、こわごわとシリアの手の中のヘッドギアを見つめた。

ところが、シリアは意を決したようにひとつ深呼吸すると、マッキーのやったようにヘッドギアを頭からかぶった。

「シリア、あんたまさか……」

ネネが恐怖にみちた表情になった。

「ええ、こんどはわたしがやるわ。暴れださないように、ハードスーツを着てわたしをおさえていて。危険だと見えたらコンピュータをオフにしてちょうだい」

シリアの冷静そのものの声に、ネネはうなずかざるをえなかった。ネネはハードスーツを

装着し、バトルランジェリーだけになったシリアのうしろから腰に両手をまわしてしっかり固定する。

「いいわね？　ネネ」

シリアの指先がキーボードをまさぐった。しばらくすると、シリアの体が固くこわばっていった。首がガクンと急に動いたり、肩のあたりが小さくけいれんするのもわかった。

「シリア、がんばって……」

ネネがささやいた。

シリアはじっと目をとじていた。耳からとびこんでくる騒音も、つとめて注意して聞かないようにした。そうやってじょじょに感覚をならしながらブーマの中に入りこんでいく。

ゆっくりと眼を開くと、ゴーグルの中に作られた3Dスコープを通してブーマの視界が広がった。あちらこちらがはげかかった波形のラミネート・スレートの屋根の上だった。『首をまわしてみよう』と考えると、ゆっくりとだが視線がまわりだし、後方をとらえた。眼をこらすように念じると、カメラがピントを合わすように焦点が移動する。あざやかな色彩の装甲服を着こみ、ヘルメットをかぶった人影がひとつ、ガラスの破れた窓から屋根の上にとびだした。

（リンナ――）

さらに首を逆方向に転じると、マリンブルーのハードスーツが隣の模造コンクリートの建

物の屋上を走ってくるところだった。

「プリスッ!」

シリアはそう呼びかけたつもりだった。しかし、シリアの耳に聞こえてきたのは『ググルルッ』とうめくような、まさにブーマの声だった。

プリスは、ラミネート・スレートの上に立ちどまっているブーマを発見すると、サッと右腕のレールガンをかまえた。

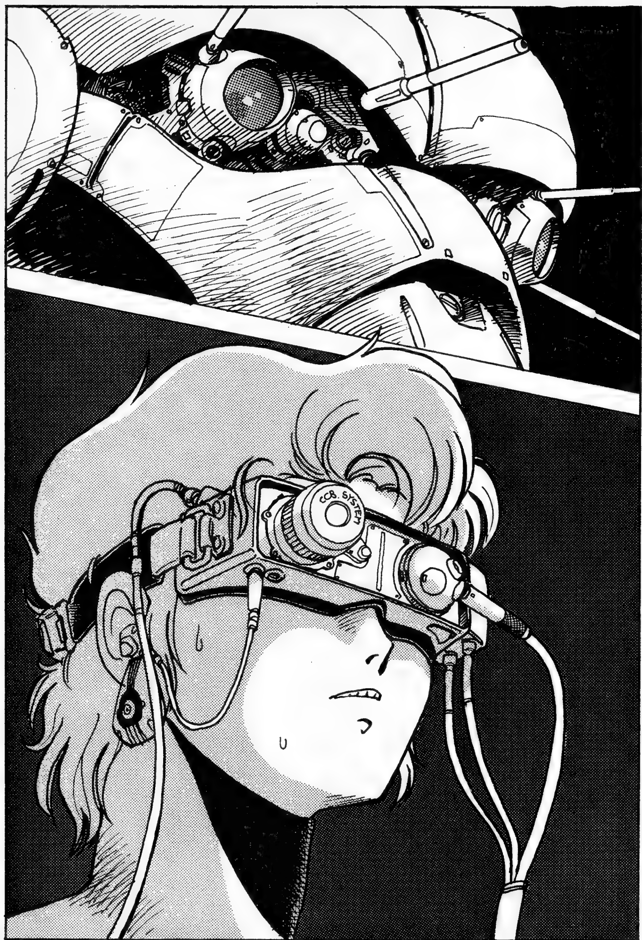
危険を察知したため、ブーマの頭脳が忙しく活動しはじめた。逃走と攻撃を同時に想定した情報が続々ととびこんできて、シリアの頭脳を混乱におとしいれる。

(この感覚は――)

シリアの頭のすみを古い記憶がかすめた。

それは、ブーマ開発の第一人者であった父、スティーブン・スティングレイ博士が、彼が所長をつとめていたウィズラボラトリーの事故、炎上によって死亡した後に、シリアのために残してくれた記憶チップを指定のマシーンにかけた際、シリアの身に起こったことと酷似していた。

ブーマ開発の途上で起こったさまざまの出来事、その印象、悪用されるかもしれないという不安、疑念――そういった父の心理的なことから、父の頭脳にたくわえられた世界の最高峰の科学知識と理論、卓越した技術、そしてはてしなく進歩する科学力と情報をなんとして


CCB. SYSTEM

も世界の平和と繁栄に役立てたいとのぞむ高い理想まで、さまざまのことがらが、まだ一〇歳そこその幼いシリアの頭脳にいっきょに流れこんできたのだ。

それは、画期的な頭脳開発法の実験でもあったのである。人間の頭脳は通常、その可能性の何分の一も発揮されていない。頭脳の持つ潜在的な力をもっと引き出す方法が見つかれば、ごくふつうの人間でさえ天才と呼ばれた人々の数倍もの能力を持てるのだ。

おそらく、シリアの父、スティンググレイ博士は、ブーマ開発の途上でその技術を作りあげていたにちがいない。父が亡くなってしまったことで、その技術が失われてしまったのか、それとも秘かにほかにも伝えられたものかどうか、知るよしもない。

だが、すくなくとも、シリアひとりには頭脳開発法はみごとな成功をおさめた。シリアは、おそらくゲノムの最高の技術スタッフ数人にも匹敵する頭脳を持った。ただ、その力を、父が開発にあたったブーマのひき起こす犯罪の根絶のために使おうと心に決めたことが、なんとも運命の皮肉と言うべきだった。

（だけど、父が開発しようとしていたサイバードロイドとは、あんな〝ブーマ〟と呼ばれるようないまわしい存在ではなかったはず。父が天国からこのティンセル・シティの混乱を見ているとしたら、どんなに悲しむことだろう……）

シリアにとって、ナイトセイバーズを結成し、ブーマと戦うことは、父への鎮魂歌でもあったのである。

（だとすれば記憶マシーンから情報が流れこんできたときにわたしが受けた感じと酷似しているのは当然か……）

プリスに銃口をつきつけられ、必死に情況を判断しようと集められる膨大な情報を浴びながら、プリスはそう考えていた。

（プリスに撃たれたくはない——わたしがそう思ったのは事実だわ。でも、逃げる方法を見つけるための情報が流れこんできたのはわかるけど、攻撃用の情報までがなぜ……）

「プ……リ……ス」

シリアは慎重に声を発した。

プリスはギョッとして眼前のブーマを見つめた。

「シリア……シリアなのか⁉」

ボンヤリとつっ立ったブーマが、ぎこちなく首をたてにふった。

「なんですってェ！——こ、このブーマがシリア？」

ブーマをはさんで身がまえたリンナが、すっとんきょうな声をあげた。

「ブ……ブーマノ、電脳ヲ……ノットッ……タノヨ」

たどたどしいことばがブーマの口をついて出た。どう聞いても男の声なのが不気味だが、変装時の男に合わせて声帯が作られているためだ。ブーマは片手をゆっくりと持ちあげ、首のうしろを指さすポーズをとった。

「コレデモウ、ブーマハオモイノママヨ！」
ブーマがシリアの口調で言った。たどたどしさがしだいになくなっていくのは、それだけシリアがブーマの操縦になれてきた証拠だろう。
「や、やったな、シリア！」
感激したプリスが、ラミネート・スレートの屋根にとび移り、握手を求めようと右手を前につきだしながら近づいてきた。
プリスのその姿をゴーグルの中にとらえ、シリアも右手をのばそうとした。――と、そのときだった。なにか、頭のうしろから、〝おびえ〟のような感覚が襲ってきた。全身の肌に悪感が走る。焦点が不安定になり、プリスの姿がボンヤリとぼやけた。
（まるで、プリスは銃をつきつけながら迫ってくるみたい……ハッ、もしや！）
シリアは急いで眼をつぶり、ふたたびドッとおしよせてくる情報の流入を無視するようにつとめ、声を正確に出すことだけに神経を集中して叫んだ。
「ハナレテ、プリス！　ブーマハ、イキテル……コレハ、ワタシジャナイ！」

七章

1

「コレハ……ブーマヨ!!」
叫ぶなり、ブーマは横に来ていたリンナをつきとばし、屋根の上を駆けだした。
「ど、どうしちまったんだ――」
プリスは一瞬立ちすくんだが、すぐにリンナを助け起こしてブーマのあとを追った。
「キャアアアアアア――!」
ブーマの中でシリアは悲鳴をあげていた。体が勝手に動きだした――そんな感じだった。シリア自身の思考も意志も、この突発的な事態に驚いていることを別にすれば、それほど乱れているとは思えない。なのに、プリスが一瞬敵のように感じられたのは事実。そして、この場をなんとか逃げなければ、というあせりのような感覚が全身をとらえたのも事実だった。
(こ、これはいったい……!?)
何かに引きずられるように走りながら、シリアは冷静になろうと必死に努力した。
(わたしの中に、もうひとりだれかがいる。ほとんどわたしと重なっているのに、プリスを敵とみなし、彼女のレールガンの銃口を恐れ、のがれようとする者――そう、ブーマが!

マッキーのリンクが不十分だったはずはない。だとすれば、乗っ取ったはずのブーマの電脳には、まだ奥があったのだ。そうか、わたしだから耐えられたけど、マッキーはこのつきあげてくるような衝動に負けて、自分を見失ってしまったのだ……)

強い切迫感、危機の意識が、シリアのすぐそばに存在していた。

シリアの感覚、意識ではないから、その高ぶりをおさえたり静めたりすることは不可能だ。が、それが動かしているブーマの体は、シリアも共有しているものだ。さっきのように、自分の意識を集中させれば止められるかもしれない。

(いや、ぜがひでもそうしなければ、このブーマはさらに破壊と殺りくを繰り返してしまうのよ。このつぎの殺人は、わたしの手にはっきりとその感触が残ることになるんだわ——!)

だが、いったん暴走を開始したブーマは、そう簡単には止められない。

(どうすれば——?)

シリアはけんめいに手がかりをさぐった。

ブーマは、激しい雨のふる深夜のバラック街を屋根づたいに駆け、しだいにもとのビル街に近づいていった。光ファイバー・ケーブルをわたり、物干しのパイプデッキを足がかりにし、非常階段をめがけてジャンプする。建て増しに建て増しをかさねた、古い雑居ビルが前方に見えてきた。

（ブーマは迷路のような複雑な場所に弱い。それは、膨大な情報が周囲をとり巻いており、どう動けばよいか判断がむずかしいからだ。よし、あそこで……）

小路のはるか上をとび越え、ブーマは雑居ビルのテラスをめがけてとんだ。

シリアは全神経をひとつに集中し、ブーマの着地の瞬間を待った。テラスの材質、構造、広さ、そういった情報が流入し、ブーマの体が体勢をととのえる。ジャンプの角度、着地のタイミングをはかるカウントダウンなどが、シリアの視野の左下の端に、文字や図形としてつぎつぎ表示される。

――ゴボッ。

模造コンクリートの抜ける音がして、ブーマは体勢をくずし、足元にできた穴に落下していった。着地の瞬間をねらって、シリアは全力でビルのテラスを踏みぬいたのだ。

そこは古い家具や足のかけた椅子、スプリングのとびだしたベッドといったものがゴタゴタ積みあげられた物置きだった。

ふつうのブーマなら、こういう場所におしこめられた場合、いきなり動きだしたりせず。情報をできるだけ豊富に吸収してから動きだす。シリアのリンクしたブーマも、一瞬その動きを止めた。しかし、また例の焼けつくような衝動がぶり返してきた。足がめりこんだソファを思いきり蹴とばし、肩にのしかかっている椅子を腕にかかえてメリメリとつぶす。そして、前方をふさぐガラクタの山を、なんと熱線砲でなぎはらったのだ。

（しまった、ブーマを落ちつかせるつもりが、よけい逆上させてしまったわ！）
シリアは後悔したが、遅かった。
ブーマは焼けただれた壁を体当たりでくずして廊下に出た。横手の非常階段から、プリスとリンナがとびおりてくるのを見ると、ブーマは反対側にむかって走りだした。つきあたりはせまい階段で、小さく折れ曲りながら下につづいている。両側の壁がくずれるのもかまわず、体をおしこむようにして強引におりる。だが、階段はどこまでも息苦しいほどせまい。右手に木のドアが見える……。
案のじょう、ブーマは、この息苦しい場所から一刻もはやく脱出する出口を求めてドアを蹴破った。
そこは、貧しくせまいながらもきちんとしつらえられた住居だった。外に出る窓はない。食器棚を引き倒し、安物のテーブルをおしのけながら、ブーマは次の部屋につづくドアに体当たりした。ふっとんだドアのむこうでスタンドがともった。セミダブルのベッドから、裸の男女が恐怖にひきつった表情でとびだし、壁に身をよせる。
ブーマはそれを無視して窓にむかった。だが、窓ぎわの小さなベッドにいた子供が、オモチャのマシンガンをブーマにむけ、敵意にみちた表情でにらみつけた。
（だ、だめよ、ぼうや――！）
ブーマの頭に、危機のボルテージが急速に高まった。

「プリス、撃つのよ。ブーマを撃って！……はやく!!」
シリアは必死に叫んでいた。
いまにも子供をたたきつぶそうと両手をあげたブーマの背中、後頭部に激しいショックが走った。シリアの意識は、その瞬間に失われてしまった。

2

四日後。ここはシリアの屋上住居。
五〇階建てのビルをひとつ完全に破壊したブーマ騒動と、ひと晩中ふりつづけた豪雨がまるでウソのように、平和でカラリと晴れあがった空がブラインドごしに見渡せる。
「やあ、だいぶ元気そうじゃないか」
エレベーターから出てきたのは、花を一輪だけ手に持ったプリスだった。一輪だけ、というのがいかにもプリスらしい。
「ありがとう。下の部屋で寝てるマッキーは、まだときどき恐怖感みたいなものに襲われるらしいけど、わたしはもう十分立って歩けるわ」
ベッドに体を起こして花を受けとったシリアは、鼻にそれを近づけて心ゆくまで香りを楽しんだ。
「でも、あなたも災難だったそうじゃない。けがはもういいの？」

「ああ――」
プリスは頭にバンダナのように巻きつけた包帯に手をやった。
あの夜のことだ――。
貧しい一家の住居を襲ったブーマは、プリスとリンナの一斉射撃を受けて窓からとびだし、頭から地上に落下して爆発した。プリスたちは急いでコマンドキャリーにもどり、気を失っているシリアとマッキーの姉弟をファッションビルの屋上住居に連れ帰った。そして、ふたりの看護をネネにまかせたプリスは、ソファの上で寝入っていたエレンディラをおぶって、リンナの車で住居にしているガレージにもどったのだ。
ところが、階段をあがりかけたところを背後から何者かに殴りつけられて気絶してしまった。気がつくと、すでに夜は白みかけており、頭からちょっと出血があった。キリキリ痛む以外はどこにも異常はなかったが、エレンディラの姿だけがこつ然と消えていたのだった。
「で、あの子は見つかったの？」
シリアの問いに、プリスは黙って首を横にふった。プリスは、雨に濡れたためにひいたカゼと傷の痛みをこらえながら、その日から足を棒のようにして少女を探したが、行方の手がかりはまったくなかった。
「きょうも、これから用事をひと片づけたら探しに行こうと思ってるよ」
「そう。たいへんね――」

シリアは同情のまなざしをプリスにそそいだ。シリアもあの夜以来、いちだんと少女のことが気になっていた。ブーマとリンクして情報の波をあび、父親の記憶チップの情報が流れこんだときの感覚を思い出したとき、何かが頭のすみをかすめたような気がしたのだ。だが、それもあの騒ぎと受けたショックのために、ふたたび闇の中にとざされてしまっていた。

そのとき、ふたたびエレベーターが開き、ネネが現われた。ネネは両手でかかえきれないほどの大きな花束を持ってきた。それもいかにもネネらしかった。

「だいじょうぶぅ、シリア？　あんとき、もっと前にヘッドギアをはずしてあげればよかったわね……」

「いいえ。絶妙のタイミングだったわ、ネネ。ブーマが爆発する直前に離脱できたから、もう体もこの通り。――それより、ADポリス側はあの事件をどう見ているの？」

「ウン。ビルをひとつ丸ごとぶっこわしちゃってブーマをやっつけられなかったんだから、指示を出したリーダーのレオンって軽ハクな男は、だいぶしかられたみたい。でも、信じられないことに、なんとあのビルもろとも死んだはずのリンナが生きてたでしょ。リンナは取り調べで当然ナイトセイバーズに助けられたって答えたから、ADポリスは大騒ぎよ。失態を隠すために、ビル破壊と貧民街の事件は、それぞれ別のブーマが狂って起こしたことにしちゃって公式発表したわよ。ひっどいと思わなーい？」

「だけど、ほとんど同時に二体のブーマが狂いだしたなんて、あんまり見えすいた言い訳

じゃないか」

プリスがあきれ顔で言った。

「そ、それがよ、あのエリア内で、あたしたちが追っかけたブーマ以外にも、どう考えても狂ったブーマのしわざとしか思えない事件が、なんとふたつもあれとほとんど同時に起こってんのよ。三件でも四件でも、そうたいしたちがいじゃないからね」

ネネの話を聞いて、シリアとプリスの顔にサッと緊張の色がひろがった。

「ほかにも二件——同じエリア内というと？」

シリアが聞き返した。

ネネは透明樹脂ボードのところへ行き、正確な位置を示した。ひとつはインダストリー・ゾーンの中で、もうひとつは隣のハビテーション・ゾーンの端だが、直線でむすべばそれぞれリンナのいたビルから一キロと離れていない。

「シリア、これはいったいどういうことだい？」

プリスが真剣な顔で聞いた。

「うーん。あの夜、その一帯に、たとえばブーマを狂わすような強力な電波が流れた、とか——」

シリアが首をひねりながらつぶやいた。

「いーえ、その点ならＡＤポリスが完ペキに調査ずみ。強力な電波なんて、ずえったいに

なかったんだから」

「じゃ、その狂ったブーマと合体してたシリアはどうなんだ？　思い当たるようなことはなかったのかい？」

「さあ……狂った、ということをどうとらえるかの問題もあるんだけど、ほら、あなたが握手しようと屋根の上で手をさしのべたときね、ブーマはそれを攻撃と受けとったようだったのよ」

「そして、また気が狂ったように駆けだしたのか……。そういえば、あたしも、リンナをかかえたブーマが吹き抜けをのぼってくのを見て、なんだか『必死に逃げてる』って気がしたんだ」

「そう、〝恐怖〟なのよ、ブーマが感じていたのは。ブーマの内部の奥深くからググッとこみあげてきた衝動のようなもの――あれを人間にあてはめるなら、まさに恐怖感だわ」

シリアはあの時の恐ろしさを思い返しながら言った。

「ほかの事件も、ブーマがコワがってやったと考えれば、説明がつきそうなことがいくらもあるわ。――でも、だれもそんなこと信じやしないわよ。だって、ブーマは殺人用兵器よ。戦闘用の機械が相手をコワがるなんて、そんなバカな!?」

ネネがプリスとシリアに交互にうったえかけるように言った。

「でも、それが事実だと仮定すると、逆から言ってもこれは大変なことよ」

シリアが思いをめぐらせながらつぶやいた。
「逆って――？」
「機械だから平気で人殺しも金庫破りもできる、ADポリスに包囲されても冷静に脱出できる――これがブーマを使う側の最大のメリットよね。そのうえ、人間以上の判断力、思考力があるんですもの。でも、これがもし、恐怖を感じるとしたらどう？　一挙に最大のメリットは失われ、まだ人間のほうが欲望や忠誠心を持つだけまし、ということにならない？」
「そうか！　ブーマを狂わせた原因を探しだして、ほかのブーマにも応用すれば、ブーマは骨抜きにできる。すくなくとも、ブーマは大きな弱点を持つことがわかって、ブーマの商品価値は急低下する。ブーマは高価だ。作るほうも買うほうも、二の足を踏むにちがいない。そうなりゃ、ブーマの絶滅までは、あとほんのわずかってわけだ。おい、これは画期的な発見だぜ！」
プリスが眼を輝かせて椅子から立ちあがった。
「そうよ、プリス。でもねえ、ブーマが役に立たないことを世界中に印象づけるということは大変なことよ。今回のような規模では、ADポリスのレベルでさえもみ消されてしまう。かといってティンセル・シティ中ですべてのブーマが暴れだしたと考えてごらんなさい。わたしたちやADポリスではとても手がたりない。USSDや軍隊が出動してきたとしても、鎮圧したころには大震災の数倍にのぼる被害が出たあとだわ。忘れてはいけないのは、わた

したちが経験したように、ブーマの恐怖心には、あくなき攻撃か、ないしは逃走しか選択肢がないことよ。それに、狂ったブーマにとっては、子供のむけたオモチャの銃でさえ恐怖心をあおるものになるということも、ね」

「そうだったな。シリアが手を加えたビー・チップといい、ブーマに恐怖心を起こさせるものといい、ブーマに対する特効薬にはなかなかならないもんだ……」

プリスはガックリと肩を落とした。

「プリスらしくないわよ、元気出して。特効薬がないからあたしたちがいるんじゃない」

ネネがプリスをなぐさめるように言った。

「その通りよ。それに、完全にブーマの電脳を乗っ取ることはできなかったけど、ビー・チップにはまだ使い道があるわ。ADポリスとの契約の期限まであと二日。なんとしても正常な戦闘用ブーマのサンプル・データを手に入れる必要があるのよ。エレンディラを探しに行くなら、そのことも忘れないでほしいの」

シリアはそう言うと、プリスの手に新しいビー・チップをのせた。

3

プリスは超高速高層道路をいったん北にむかい、ゲノム・タワーのそびえる六区にさしかかったところで右折した。

工場と住宅が地上をおおいつくし、容量の限界をとうの昔に突破したティンセル・シティだが、神宮の森は人工樹に植えかえられただけで、ほぼ二〇世紀末の姿をとどめている。周囲とのあまりの落差は、人をホッとさせるというより、わざとらしく、そらぞらしくさえあった。現在のティンセル・シティは都市環境の整備など、夢のまた夢にすぎないのである。なぜ神宮の森が唯一残されているかといえば、それはもちろん、西側世界第一の超大企業、ゲノムの巨額の資本投下があったからである。

都心を横断する六車線四層の超高速を途中でおり、プリスはバイクを並木道にそって走らせる。やがて木々のむこうに銀色の丸いものが見えてきた。各種プロスポーツ、イベントのメッカ、神宮ドームである。

まだ本体はその頂上部分しか見えないが、周囲の道路や各所の広場では、はなやかな飾りつけをほどこされたゲートや野外フェスティバルの会場が設営されている。神宮ドームが、ゲノムの主催する世界民族音楽祭の会場にあてられているためだ。

この音楽祭は、単に音楽の交流にとどまらず、ゲノムの打ち上げた放送衛星の巨大回線を通じて開始される情報ネットワークによせる政治的、経済的な期待によって、異常なほどの盛況ぶりを見せていた。

東西主要国の最高主脳、巨大企業のトップ、経済団体の代表はすでに数日前からティンセル・シティ入りしており、毎晩のようにあちこちの高級ホテルではパーティが開かれ、スイ

ートルームでの密談、取り引きもさかんに行われているらしい。

表側のはなやかさを代表するのは、世界的な音楽家、オーケストラ、歌手、ミュージシャンたちである。あらゆる音楽ジャンルから数多くの出演があるのはもちろんだが、やはりもっとも人気を集めているのは総勢八〇〇人にものぼるといわれるポピュラー歌手、グループである。これにさらにほぼその半数のビデオ・ムービーのトップスター、テレビタレントたちが花をそえる。ティンセル・シティ中の大型ホールをすべて使用するばかりでなく、神宮ドーム周辺に野外フェスティバル会場がいくつも臨時に設営されたのは、それらのスターたちをまんべんなく顔見せする場が必要だったためである。

（こういう、きれいに飾りたてたはなやかな場所ってのも、ティンセル・シティにはあるんだよな。あたしたちみたいに真夜中にブーマと戦ってたら、この光景はとっても信じられないぜ……）

プリスはにぎやかなブラスバンド演奏の音を遠く聞きながら、芝生のわきにしばらくバイクをとめて神宮ドーム周辺を見わたした。

「やあ、だれかと思ったら、プリスさん！」

フェスティバル会場のほうからバイクを走らせてきた若い男が声をかけた。ＡＤポリスのレオンだった。

「なんだ、ＡＤポリスが、こんなところで油売っててていいのかい」

「それがさァ、ゲノムがこんなとんでもねえお祭り騒ぎをはじめちまっただろ。万が一、ブーマがここで暴れだしたらコトだってんで、音楽祭の警備にまわされたってわけ。おかげで、スリを追っかけまわしたり迷い子の世話をやいたり、テンテコ舞いさ。これじゃ、ブーマのお相手してたほうがよっぽど楽だよ」

「迷い子……そうだ、あんた、いつだったかの夜、ホバー・バスをブーマが襲った事件であたしを助けてくれたよね。そんときあたしといっしょにいた女の子、このあたりで見かけなかったかい?」

プリスは、なにげない様子でエレンディラのことをたずねてみた。

「ああ、あのオーバーオールを着てハンチングかぶってた子のこと? さあ、知らないなア。けど、プリスさんも迷い子探しとは奇遇だね。どう、その子探しがてら、そのへんでハンバーガーでも?」

「急いでんだ。あんたの世話までしてらんないよ」

そっ気なく言って、プリスはバイクをスタートさせた。

約束の喫茶店は、神宮ドームを正面に見るにぎやかな場所にあった。急に呼び出してきた相手というのが、リンナがDJをやっていたミニFM局のオーナーだった。

彼は先に来てプリスを待っていた。

「呼びつけちゃってすまないね。なにしろスタジオのあったビルがあの通り、ブーマ騒動

で破壊されてしまったから、せっかくの曲が一回しか流せなかったし、私のほうもスタジオに保険をかけ忘れていたもので、資金集めやなんやかやで、とびまわってて……」
冷房がきいているのに、オーナーはさかんに汗をふき、わざとらしく親しげな口調で話を切りだしてきた。ようするに、金がなくてレコーディングのギャラがはらえないという言い訳らしい。
「そ、そうじゃないんだ。たしかに私は資金繰りでこまってるが、それがなんとかなりそうな話がとびこんできたんだよ。そこでキミに、ぜひとも相談にのってほしい……いや、けっしてキミに迷惑がかかるようなことはない。それどころか、これはキミにとってもめったにないチャンスなんだ」
オーナーはせきを切ったようにまくしたてた。どうあってもプリスを説得せずにはここを動かない、という雰囲気だ。
「はっきり言ってよ。その話って何なの？」
「じ、じつは、もうじきここに世界民族音楽祭のメイン・プロデューサーが現われるんだ。話の内容しだいでは、キミはあすからの世界民族音楽祭で、世界中の一流ミュージシャンにまじって、神宮ドームのメイン・ステージで歌えるかもしれないんだよ！」
「なんだってェ！」
声をあげたのはプリスではない。プリスと背中合わせに座っていたレオンだった。

「す、すっごいじゃないの、プリスさん！　バンザーイ、ボクのプリスがとうとう世界のヒノキ舞台に立つんだ！　大スターになれることマチガイなし！　世界のロック・クィーン、プリスだァ！」
レオンはあたりはばからず大声をあげ、ピョンピョンとびまわった。店の者やほかの客たちが、キョトンとした顔でこっちを見ている。
「な、なんだ、ついてきやがったのか。ええい、みんながこっちを見てるじゃないか。さっさと座れったら、ったくもう！」
プリスはあわててレオンを引っぱって横に座らせた。
そのときだ。いかにも高価そうなスーツをパリッと着こんだ、銀髪の威風堂々とした男と、髪をオールバックにした抜け目なさそうな三〇代前半の男が、テーブルのあいだをプリスたちのほうへやって来た。FM局のオーナーはあわてて立ちあがり、ふたりに何度も頭をペコペコさげながら自己紹介した。
「あなたが『青春の墓碑銘』をお歌いになったプリスさんですな。私は、ゲノム社の依頼で世界民族音楽祭の総指揮をとっておるフェザーストーンと申します。こちらの男性の方はどなたですかな？」
プリスに大きな手で握手した銀髪の紳士が、レオンのほうへむきなおった。
「あ、ボクは、レオン。レオン・マクニコルです。プリスさんの、まあ、恋人――ウッ」

プリスのひじ鉄がレオンの横っ腹にくいこんだ。
「イテテッ……あ、いや、友人なんです。会場の警備にあたっているADポリスのパトロールチームのリーダーです」
「ADポリス？——それが、どうしてここへ？」
オールバックの男の眼が鋭く光り、探るようにレオンを見つめた。
「パトロールの途中でプリスさんと会ったもんで、ちょっと、ええ。ハハハ。ところで、おタクは？」
「プロモーターのリチャーズです。しかし、こまりますね、関係者以外の方の同席は」
リチャーズは責めるようにオーナーに言った。
「リチャーズ君、まあ、いいじゃありませんか。ADポリスのリーダーがすぐそばで警護しているとなれば、私も安心だ。いやねえ、私はちっとも心配しとらんのだが、主催のゲノム社は、音楽祭の妨害をもくろんでいる者があるからと、そうとう神経質になっとりましてな。四六時中護衛つきなのですわ。今もリチャーズ君のうまいはからいで護衛をまいてきたんです。ADポリスに同席してもらったとなれば、ゲノムも文句を言えんでしょう。ハッハッハッハ」
フェザーストーンは豪快に笑った。
「あのう、フェザーストーンさんというと、例のアメリカ建国二五〇年祭を大成功させて

話題をまいた、名プロデューサーのフェザーストーンさんですか？」
同席を認められてとたんにリラックスしたレオンが、ぶしつけに質問した。
「ああ、私です。私の手がけたイベントになりますな。なにしろ、今回の音楽祭の規模はあれ以上——というより、歴史上最大のイベントとしては、世界の文化をひとつに融合する、というのがスローガンですからな。出演者はいまだその実数をつかみきれんほどだ。まあ、私が手がけるからには絶対に成功させてみせますよ」
フェザーストーンは自信たっぷりに言いきった。
レオンは舌を巻いた。フェザーストーンは世界の興業界を牛耳る大立者だ。今回の音楽祭でも、二、三のトップスターー、高名な音楽家が彼直々の依頼によって出演を承諾したという話が伝わっている。その超大者が、ティンセル・シティのほとんど無名に近いストリート・ロッカーに会いに来るとは……！
オーナーが、汗をふきながらおそるおそる話を切りだした。
「あのう、それでは、プリスさんはどういう形で出演することになるのでしょうか？　メイン・ステージに上げてもらえる、とだけはうかがってるんですが……」
「プリスさんには、トップで歌ってもらいます。つまり、メイン・ステージの幕開き、および、全世界放送ネットワークのすべてのチャンネルにおける第一声が、プリスさんの歌声ということになるわけです」

リチャーズが、書類を読みあげるように、冷たい事務的な口調で説明した。
「な、なんですって——!?」
レオンとオーナーは、悲鳴に近い大声をあげた。

4

「ハッハッハ、驚きましたかな？　しかし、これは冗談ではない、きわめて真剣な話なのです。いや、音楽祭が成功するもしないも、プリスさん、あなたのご返事しだいと言っても言いすぎではないのですぞ！」
フェザーストーンは、アメリカ建国二五〇年祭でひとりの少年をデビューさせた。当時一四歳の、コロラドの山奥で育った牛飼い少年は、一躍大ブームを巻きおこした。フェザーストーンは、アメリカン・ドリームをその少年に体現させたのである。建国祭の成功は、その少年の起用にあったとさえ言われた。少年は、今ではおしもおされもせぬ世界のトップスターとなり、世界民族音楽祭へもやって来ていた。
「私は、全世界の民族がひとつに結ばれるという衛星放送ネットワークの主旨からいっても、音楽祭のテーマミュージックは、全世界の全民族が、おごそかな祈りの気持ちでじっと耳をかたむけるようなものにしたいと思っておったのです。選曲が難航していたところに、リチャーズさんがプリスさんの曲を持ちこんできたというわけです。一度聴いて、これだ、

これ以外にない、と確信しました。私のカンに狂いはない。プリスさんが出演してくだされば、音楽祭の成功はまちがいないのです！」
フェザーストーンはそう力説し、出演料として四〇〇〇万という破格の金額を提示した。
レオンは眼を丸くしてため息をつき、オーナーはひざをガクガクふるわせた。
と、そこまで黙って話を聞いていたプリスが、ポツリとつぶやくように言った。
「だめだな。引き受けるわけにはいかないよ――」
その意外なことばに、フェザーストーンはもちろん、レオンとオーナーも顔色をかえた。
「な、なにを言いだすんだよ、プリスさん。これだけのでっかいチャンス、どうしたってのがす手はないじゃないか！」
レオンはプリスの腕を強くつかんで言った。
「出たくないと言ってるわけじゃないんだ。ただ、あの曲、『青春の暮碑銘』は、竹笛を吹くエレンディラって女の子抜きじゃやれない。ところが、しばらく前からその子は行方不明になっちまってるんだよ」
プリスの説明に、フェザーストーンはむずかしい顔をして考えこんだ。
「竹笛か……たしかにあの曲の魅力の大きな部分をささえているのが、奇妙な響きをもったエキゾチックな笛の音だった。どうだろう、プリスさん。南米の民族楽器であれと似た音色のものがあったはずだ。超一流ミュージシャンをその代理に起用して――」

フェザーストーンが言うのを、リチャーズがさえぎった。
「いや、私はむしろ、それほどテクニックがあるとは言えない、その少女の素朴な奏法が効果的だったと思うんです。録音されたデジタル・マスターからあの笛のパートだけを抜きだして、歌のバックに流すということでどうでしょう」
「そうだな。重要なパートの奏者がステージにいないというのはよくないが、形だけの代役を立てればなんとかごまかせるだろう。よし、その線でいこう」
フェザーストーンが立ちあがりかけたのを、プリスがとめた。
「待ってくれ。あたしは、あの子といっしょでなければ出る気はないよ」
フェザーストーンは驚いてプリスを見返した。
「どうしてだね？　こんなチャンスは二度とないんだぞ！」
「あたしはスターになんかなりたくない。でも、あの子といっしょにやる曲を、世界中の人がよろこんで聴いてくれるんだったら、ぜひやってみたいと思う」
「し、しかし……」
返答にこまったフェザーストーンの横から、リチャーズがふたたび身をのりだした。
「わかりました。その女の子をわれわれがかならず探しだして、出るように説得しましょう。ですから、あなたはすぐにリハーサルに入ってください。ですが、見つからなかった場合には、ディスクから音を取る方法で……」

「あたしは自分で見つけたいんだ。出演の時間までに見つからなければ、別の曲をやってもらってくれ。この条件がダメなら、話ははじめからなかったってことでいい」
プリスは固い決意のこもった眼で、リチャーズの鋭いまなざしに応じた。ただならぬ緊張感が、ふたりのあいだの空気を凍りつかせた。
（こいつは、まさか――）
リチャーズの顔をま近に見つめるプリスの脳裏を、ある疑念がよぎった。
「しかたあるまい。リチャーズ君、プリスさんの条件をのもう。なに、代理の候補はいくらでもいる。カケをやってみるのもよかろう」
フェザーストーンがそう提案した。
それでも、なぜかリチャーズは『青春の墓碑銘』にこだわり、幕間に流す間奏曲としてディスクを使わせてほしいと申し出た。だが、プリスも強硬で、エレンディラが見つからなくて出演できなかった場合には、ディスクの使用もことわると断言してゆずらなかった。
リチャーズとフェザーストーンは、一方的なプリスの主張をしぶしぶ全面的に受け入れ、にがりきった表情で喫茶店を出ていった。
ふたりを送りだしたオーナーは、緊張がとけたのと、先行きどうなるかわからない不安で、グッタリと椅子にもたれこんだ。レオンは、どうしてあんなムチャなことを言い張ったのかと、プリスに猛然とくってかかった。プリスはそれを完全に無視して、さっきから気にかか

っていたことをオーナーにたずねた。
「リチャーズ君？　さあ、ゲノム関係のプロモーターではないらしいよ。まあ、キミのような無名の歌手に四〇〇〇万という大金を払うんだから、彼にもそうとうの金が入るんだろうが、あんな熱心な人はいないね。なにしろ、あの深夜に、キミの曲が終わるか終わらないうちにスタジオに問い合わせてきたんだから」
「なに？　どんな問い合わせだったんだい？」
「もちろん、曲名や、やってる歌手とグループ名さ。その場ですぐ、世界民族音楽祭に出演できるようにプロモートするから、至急会いたいと言ってきた。リンナ君がブーマに襲われたときにミキシングルームにだれもいなかったのは、ミキサーはほかの部屋の騒ぎを聞きつけて逃げだしたんだが、私はリチャーズ君に会いに行ってたんだよ。その人に対して、あんなひどい口のききかたをするなんて……」
「ほかにも聞かなかったかい？　たとえば、あたしの住所とか」
「ああ、言ったかもしれないな。キミのよく出演するライブハウスの住所とかといっしょにね」
「やっぱりそうか……」
プリスは急いで電話ボックスに走った。
ビジ・フォーンの画面に、レオタード姿のリンナが現われた。ミスＤＪになる夢が水のア

ワとなったリンナは、またエアロビクスのインストラクターに専念していたのだ。しょげかえった様子はまったくない。頭の切りかえのはやさはメンバー中で一番だ。

「あ、あんたが世界民族音楽祭に出演するんですってェ――ホ、ホント!?」

眼をまんまるく見ひらいて驚くリンナに、プリスは手みぢかに用件を説明した。

「……ってことよ。あんた、仕事抜けだせる？」

「まっかせなさいよ！　だって神宮ドームに行けば、世界中の有名歌手やタレントがワンサカいるんでしょ？　いいえ、それどころじゃないわ。あたしの美貌とバツグンのスタイルが、腕ききのマネージャーかプロデューサーの目にとまって、もしかしたら、あたしも未来の大スターに――キャー、すっごい！　あたし、すっとんでくわよ！」

電話を切ってバイクのところにもどったプリスは、まだそこにレオンがつっ立っているのを発見した。

「いつまで仕事サボってるつもりさ」

「そんな言い方はねえだろ。ティンセル・シティ中の全パトロール隊員の仲間に連絡したんだぜ。これこれこういう特徴の女の子を探せってサ。なんたって、プリスさんが神宮ドームのメイン・ステージに立てるかどうかがかかってんだからね。メいっぱい協力するよ！」

「そんなヒマがあったら、神宮ドームをしっかり警備するんだね。ブーマはあそこを狙ってんだよ！」

「え、なに？　それどういうことさ。ねえ、プリスさんってばァ！」

レオンがあわてて追いすがろうとしたときには、プリスの乗ったバイクは、もう超高速にむかって猛スピードで走りだしていた。

八章

1

「プリス、それじゃ、あなたはリチャーズという男がブーマだと言うのね？」

ベッドから上半身を起こしながら、シリアがたずねた。ネネとマッキーも、思わずソファのところからふり返った。

「そうだ。あたしがあれだけ幸運なチャンスと破格の金額を提示されながら、ムチャクチャな条件をつけたんだ。フェザーストーンもオーナーも、そしてADポリスのレオンも、それぞれがそれぞれの立場で驚き、あきれ、うろたえてた。それなのに、あの男は表情ひとつ変えず、頭の中で計算していたことは、どうすればあたしに『青春の墓碑銘』を神宮ドームで歌わせられるか、ということだけだったんだ。そのことがヤツにとってどれほど重要なことかは知らねえが、あの反応はふつうじゃない。ほとんど完ペキと言っていいくらいの化けぶりだったが、あれはたしかにブーマだよ」

「それで、リンナをあなたのマネージャー役として、神宮ドームのその男のトコに行かせたってワケね。リンナったら、すっごいオシャレしてここに現われたと思ったら、ビー・チップを受け取っただけで、またイソイソと出てっちゃったわ」

ネネが、いかにもうらやましそうに言った。
「あなたの住所を問い合わせてきたのは、リチャーズだけだったの？」
シリアがプリスに確認するようにたずねた。
「翌日から、自宅のほうには何本か、音楽関係者から電話が入ったらしい。だが、それじゃあたしがガレージにもどったときに襲われた時間に合わない」
「でも、プリスの住所を知っている人はほかにもいるでしょう？　通り魔のしわざかもしれないし、あなたを気絶させた者がエレンディラをさらっていったとは、かならずしも言えないし……」
シリアはあくまでも冷静に分析した。
「そうだよ、プリスさん。大スターになるチャンスを、みすみすのがす手はないよ」
マッキーが、プリスのかたわらに来て言った。
「そうね。不確実な当て推量にまかせるのは危険だわ。あなたが、好きな歌で成功を手にするのは、わたしたちにとっても喜びよ。たとえそのためにナイトセイバーズを抜けることになったとしても……」
「シリア！　なんてことを言うんだ。あたしは歌は愛してるけど、きらびやかな成功なんてのぞんじゃいない。それに、仲間を抜けるなんて――」
プリスは、にぎりしめたこぶしをブルブルふるわせて言った。

そのとき、会話にわりこむようにビジ・フォーンのコール音が入った。
「プリス？　あたしよっ。ねえねえ、見える？　あたしのうしろ！　世界中のスターがゾロゾロいんのよ。もう感激で足がフラフラしてるわ――」
ほほを紅潮させたリンナが、モニターのむこうでうれしそうに言った。
「そんなことより、例のことはどうなってる？」
プリスが言うと、リンナは急に声を低めてささやくように言った。
「モチ、うまくいったわよ。プリスの言った通り、リチャーズって男はブーマだったわ。あたしがビー・チップを首のうしろにくっつけても、何の反応もなかったモン。でも、今んとこ怪しい行動はないわ。今夜は夜通しあすの開幕をひかえて打ち合わせがつづくらしいから、何かあったらまた知らせるねっ」
電話を横で聞いていたマッキーが、さっそくリチャーズにアクセスを開始した。ブーマにアクセスするのはこれで三度目。なれた手つきでコンピュータのキーボードをあやつった。
「アクセス完了だよ。でも、電脳にリンクするのはムリみたいだね。やっぱり正常なブーマはガードが固いや」
「マッキー、あんまり強引なことはしないで。逆にブーマに気づかれる危険があるわ。そのまま、ブーマの行動を監視しててちょうだい」
シリアはマッキーにそう命じてから、プリスにむかって話しかけた。

「あなたの言った通り、リチャーズはブーマだったわね」
「だろ？　だからエレンディラもあいつがさらったんだ！」
「落ちついて、プリス。まだそうと決まったわけじゃないわ。もう一度問題を整理してみましょ。まず、リチャーズがブーマだったことで、あなたの音楽祭出演をプロモートした裏には、陰謀がひそむ可能性が大きくなったわね。じゃ、彼の目的は何かしら？」
「さあ？　まさかあたしを狙ってるわけじゃ……」
「喫茶店での会話の内容をもう一度検討してみれば、リチャーズが出してきた案には、どこかすべてに共通したところがあると思うのよ」
「共通したところ？　……ええと、なんだったろう。笛のパートをディスクから取って使うこと、エレンディラをきっと探しだすと約束したこと……それから、幕間にディスクを流したいとも言ってたな」
プリスが指を折って数えあげると、シリアはぐっと身をのりだした。
「いいこと？　プリス。すべてに共通しているのは、エレンディラの演奏を流したい、ってことなのよ。彼は一貫してそのことにこだわっているわ」
「エレンディラの演奏だって？」
「そうよ。なぜ彼がそうしようとしているのか——それを考える前に、エレンディラの笛のことを最初から考えてみましょう。ホバー・バスに乗っていたときが最初よね。そして、

ブーマが、バスを襲ってきた……」
「二回目がスタジオだな。録音のときに吹いた」
「けど、それは防音壁で密閉された場所。それよりも、FMで流されたときよ」
「狂ったブーマがリンナを襲ったな。そういえば、近くでも同時刻にブーマの発狂と思われる事件がほかに二件も起きてる。……もしも、そいつらがみんなFMを受信してるラジオのそばにいたとしたら――そうか、ブーマの狂った原因はエレンディラの笛の音だっ！」
「すくなくとも、狂ったブーマはすべて笛の音を聞ける位置にいたわけよね。でも、ただひとつだけ、例外があるのよ。それがリチャーズ」
「そうだ。ヤツは曲を聞いたはずなのに狂ってない。それどころか、曲の問い合わせをしてきてるくらいだからな」
「考えられることは、リチャーズが――」
シリアがそこまで言いかけたときだった。
「姉さん、プリスさん。ブーマの様子が変だよ！」
マッキーが大声で呼んだ。

2

ほぼ同時にビジ・フォーンが鳴りだした。

「ネネなの？　リンナよ。今、リチャーズがむこうの机で電話してんだけど、声を落としてモニターも腕で隠しながら話してんのよ！」

「ウン。こっちもなんか気がついたみたい。目を離しちゃダメよっ！」

ネネは受話機を置くと、すぐにコンピュータ・コンソールのシリアたちのところにとんでいった。

モニターをのぞきこんだネネは、悲鳴をあげそうになってあわてて口を手でおさえた。そこに映っていたのは、たくましい筋肉の動きがダブダブの粗末な服の上からすけて見えるほどの、大柄で無表情な労務者風の男。そのむこうには、全身がケロイド状に焼けただれた女が下着だけの姿で立っており、そして……。

「あ、あれ、もしかしてエレンディラなの!?　か、かわいそ……」

壁に目のあらいロープで両手をつるされ、ちょうどはりつけにされたような格好で、グッタリと頭をたれた全裸の少女。ケロイドの女が革ベルトのようなものをふるうと、少女の体がピクッとそり返り、小さな悲鳴が聞こえた。

コンピュータのモニターに映っているのは卓上型のビジ・フォーン。リンナの言っていた通り、背広の男の手がビジ・フォーンの画面をまわりの目から隠すようにしている。エレンディラがほんの小さく映っているのはその画面の中だ。

「どうしてもウンと言わないのか？　エレンディラは」

冷たい男の声。これがきっとリチャーズだ。

「あのプリスという女を裏切りたくないと言ってな。その女がいっしょにステージで演奏したがってるんだぞと説得しているんだが、聞き入れようとしない。何かあったんだ。あの女、ただ者ではなさそうだぞ」

「そうか。いざとなったら、エレンディラを殺すと脅迫してでも、あの女をステージに出させるが、おれがそちらに行くまで、説得をつづけてくれ――」

リチャーズはそう言って電話を切った。

「なんて卑劣なヤツらなんだ……。はやくあの子を助けださねえと――」

プリスは唇をかんだ。ほほに涙がひとすじつたっている。

「リチャーズはまだ出かけそうにないわ。ネネ、別のコンピュータで、今の画像を解析してみて。何か場所の手がかりがあるかもしれないわ」

シリアに言われるまでもなく、ネネはすでに作業にかかっていた。エレンディラの映っていた画面を再生し、まずビジ・フォーンの画面をコンピュータのモニターいっぱいまで拡大する。それをさらに部分に分けて拡大していくのだ。

「エレンディラの横の小さな窓、カーテンのすき間に何か見えそう……塔かな？」

プリスがあわててモニターをのぞきこんだ。

「ちがう、こいつは灯台――第八埠頭に保存されているメモリアル・ライトハウスだ。ク

ソッ、あたしのガレージの目と鼻の先に隠れてやがったんだ。ネネ、プリントアウトしてくれっ！」

プリントが出てくるやいなや、もどかしげにその画像の部分をひきちぎり、プリスは屋上住居をとびだしていった。

3

同じころ、ゲノム本社ビル、ゲノムタワーの最上階にある会長室では、クインシーがメイスンの報告に聞き入っていた。

「……ということでありまして、フェザーストーンは成功まちがいないと大見栄をきっております。最後まで難航していた、幕開きを飾る歌手と曲目もやっと決定したようです。ティンセル・シティで発見した若い女性シンガーで、この音楽祭が終わるころにはティンセル・シティ一の人気歌手になっているだろうと、フェザーストーンは言っております」

「ふん、たかが興業屋のくせに、なまいき言いおって。あの業界の連中の言うことは、ほとんどがホラと宣伝だからな。まあ、お手なみ拝見というところだ。あすになって不測の事態が発生したなどと言い訳しおったら、すぐさまクビだ」

クインシーは、軽蔑しきった笑みを唇の端に浮かべた。

「それから、四日前の深夜、スミダ・リバー沿いで世界民族音楽祭のサブプロデューサー

の死体とともに発見された、女性型の情報収集用ブーマの件ですが——」

メイスンは言いながらタブロイド版のホログラム・フォトを数枚取りだした。焼けただれて黒い鋼鉄の膚が露出した胸と、その乳房からつき出した二本の超合金製の刃が不気味だが、それ以外のところはまったく人間の女と変わらない。乱れた髪、恐怖にゆがむ表情、苦痛のために腰をくねらせた格好と見ていくと、かえって人間の女よりも男の気をそそる色気がただよっている。

「なかなかよくできたブーマじゃないか」

クインシーは一枚ずつ手に取り、いやらしい眼つきでながめている。

「足のかかとの部品から流通経路を割りだしてサーチしました。ブラジリア・テクニカル社が製造したブーマと思われます」

「ブラジリア・テクニカルだと？　あの会社がまだあったのか」

「ええ。兵器産業部門では、八年前まではわが社につぐ規模で、中南米唯一の世界企業と言われるほどでしたが、わが社がブーマの製造を手がけるにいたって急速に衰退し、護身用の拳銃をほそぼそと生産する工場しか残ってなかったはずなのですが」

「そこがなぜ、いきなりブーマを造ったのだ……？　しかも音楽祭を狙うとは。いまさらわが社のメンツをつぶして喜んだとてしかたあるまいに」

「極秘ルートからの情報ですが、アンデス山中にひそかに工場を建設しているらしいので



す。ユーロ・ダラーでかなりの借り入れも最近あったそうです」

「巻き返しか。だが、世界大戦でも起こらんかぎり、もうやつらの食いこむ市場は残されておらん。わが社主催の世界民族音楽祭をたとえつぶせたとしても、兵器、とりわけブーマ生産におけるわが社の圧倒的な信用に傷がつくわけでもない。つまらん対抗意識など持たずに、子会社にしてくれとすなおにたのめばよいものを——」

そう言ってクインシーはさも愉快そうに笑った。

「わが社はそんな低いレベルの競争をしとるわけにはいかん。音楽祭はなんとしても無事に成功させるのだ。ADポリスの警備などあてにできん。戦闘用ブーマを五〇体ほど神宮ドームのガードに増強しろ、メイスン」

「しかし、会長。おことばではございますが、その女ブーマ、殺したのはどうやら、サブプロデューサーのガードにあたっていた、わが社のブーマらしいのです」

「ほう、それならよけい安心ではないか。わが社のブーマの性能が上だったというわけだからな」

「いえ、それが、殺したブーマのほうは、例の五〇階建てビル破壊の事件の張本人となった、発狂したブーマと思われるのです」

「なんだと!?」

「神宮ドームが狙われているとしたら、ブーマを増強するのはかえって危険ではないかと。

警護するはずが、逆に音楽祭を混乱におとしいれる凶器となりかねないのです」

「ウーム……」

クインシーは思わずうなって腕組みをし、背もたれによりかかった。

4

「さっきこの角度から陽があたってたとすると、やはりこのへんだな……」

バイクをおりたプリスは、つぶやきながら歩きだした。第八埠頭の倉庫街だ。ふり返って、もう一度メモリアル・ライトハウスを確認する。

「ふむ、この倉庫だ——」

プリスは外装のだいぶはげた古い倉庫の前に立って、上を見上げた。

突然、首すじにツーンとくる痛みが走った。

（これは……あのときと同じ……）

一瞬、エレンディラがさらわれた夜明けのことを思い出したが、それっきりプリスの意識は失われてしまった。

背中を強烈な力で突かれ、気がつくとプリスは、ビジ・フォーンで見たあの部屋にいた。

ぼんやりしていた視界がだんだんはっきりするにつれ、今はシーツを体に巻きつけたケロイド状の膚の女、そして労務者風のたくましい男が見えてきた。

「おれに二度も殴られながら殺されなかったとは、運のいい女だぜ」

男が低い声でボソボソと言った。男のうしろのほう、壁の角のところに、気を失っているのか眠っているのか、エレンディラが汚ない毛布にくるまり、眼をとじて横たわっているのが見えた。

「エレンディラをさらったのは、あんたたちだったんだね」

男はそのことばを無視し、プリスに問いかけてきた。

「どうしてここがわかったんだ？」

どう答えるか——プリスは迷った。自分の出方しだいでは、エレンディラとともに無事に解放されるのぞみもあるかもしれない。

「ティンセル・シティ中探しまわったってしょうがないじゃないか。案外近くにいるかもしれないと思ってこのあたりをぶらついてみたのさ」

ケロイドの女が眼の前に来てしゃがみ、敵意を隠して話しかけてきた。

「そうだったのかい。あたしはてっきり、エレンディラをよくないことに引きこもうとしている女かと思ってたんだが、そう悪いお人じゃなさそうだね」

（この声……どこかで聞いたことがあるぞ）

「あんたたちは？」

「この子の両親だよ。南米から仕事を求めてティンセル・シティに来たとたん、はぐれち

まってねえ。なにしろ一文なしのもんだから、こんなところに住みついたわけさ」

「ところで、これはあんたかね？」

男のほうがま新しい新聞をプリスにさしだした。プリスの写真が大きく出ており、『ティンセル・シティから新星誕生——ロック・クィーン、プリス音楽祭の主役に！』という見出しがおどっている。

「あ……ああ」

「こういうのに出れば、さぞ大金が入るんだろうねえ」

女がわざとらしい、さも感心したようなため息をもらした。

(そうか……こいつら、あたしにエレンディラを説得させる気なんだ。エレンディラは、あたしの言うことなら聞き入れるにちがいないと、こいつらは踏んでいるのか……いや、あたしさえ音楽祭に出ることに決まってしまえば、エレンディラをとにかくステージに上げることができると考えているのだろう。もしエレンディラが笛を吹こうとしなければ、そのときは、マスター・ディスクをうしろで流してしまえばいい……クソっ、そんな手に乗ってたまるか！　だが、今はとにかく話に乗ったふりをしてでも、エレンディラをこちらに取りもどさなければ……)

「そ、そうだとも。実は、そのこともあって、必死にエレンディラを探していたんだ。あたしの曲が、すげえ音楽祭で歌わないかって誘われるほど認められたのは、エレンディラの

笛の音のすばらしさのおかげでもあるんだ。音楽祭に出れば、そこにも書いてあるみたいに、一躍世界のスター。あたしはその夢を、エレンディラといっしょに果たしたいんだ。だから、あすの音楽祭まででいい、エレンディラをあたしにあずけてほしいんだ！」

「ほ、ほんとかい。このエレンディラがそんな立派な舞台に！」

「かあさん、まったく夢みたいな話じゃないか」

男女は抱き合ってさめざめと涙まで流した。

「それじゃ、いいんだね。さあ、エレンディラ、あたしといっしょに行こう——」

プリスはそう言いながら、汚ない毛布ごとエレンディラの体を背負おうとした。

——バタン。

いきなり背後でドアが開いた。

「おっと、待ちな。プリスさん。おたがいクサい芝居はそのくらいにしときな」

皮肉っぽい笑みを浮かべながら入ってきたのはリチャーズだった。そして、彼に腕をとられ、引きずられるようにして、革のミニスカートをはいたきれいな女性が現われた。

(リンナ——!?)

「プリス！　ごめん、みんなバレちゃったのよう」

「な、なんだって——」

プリスはエレンディラの体をかかえたまま、凍りついたように立ちすくんだ。

「その通り。この娘は、神宮ドームの楽屋裏に来たときから、どうも様子がおかしいと思っていたのだ。キラ星のごとく行きかっている大スターたちには眼もくれず、私のほうばかりチラチラうかがっていたからな。私がここに来るために車に乗りこむと、この娘の車が案のじょうあとをつけてくるじゃないか。待ちぶせしてつかまえたら、この娘、私の姿に驚いて思わず声をはりあげたんだ。『ブーマ！』ってね――」

リチャーズは、リンナの体をドンと部屋の中に突きとばした。ハイヒールがポキッと折れ、リンナはプリスの前に倒れた。ミニスカートがめくれあがり、すらりと形よくのびた脚が、無残なほど白くさらけだされた。

「われわれがブーマだと知っているなら話がはやい。ブーマの残酷さはわかってるな？痛い目にあいたくなければ正直に答えるんだ。おまえたちは何者だ――？」

リチャーズがゆっくりと重そうな鉄のドアをしめた。ドアのきしむいやな音が、汚ならしいむき出しの壁に反響した。

5

「ナイトセイバーズ。どっから来たのか知らないが、ティンセル・シティでスパイ活動をしてるなら、あんたたちも名前くらいは聞いたことがあるだろ？」

しばらく沈黙のにらみ合いがあったあと、プリスはゆっくりとそう言った。

「プ、プリス――」
リンナが驚きの眼でプリスを見上げた。
プリスは、「心配するな」というようにリンナに目配せした。
目の前の相手は、どういう理由でか、ゲノム製のブーマを狂わすことが目的なのだ。下手に隠しだてして警戒されるより、ここは素直に身分を明かし、相手の真意を聞き出したほうがいい。ナイトセイバーズがゲノム製ブーマに敵対する存在だと知っていれば、相手が気を許さないともかぎらない――プリスはとっさにそう判断したのだった。
「――そうか、おまえたちがうわさのナイトセイバーズだったのか。金を報酬に仕事を請けおうブーマハンター。ADポリスよりも優秀な連中らしいな」
リチャーズは大きな足どりで部屋を横切りながら、プリスとリンナを興味深そうにかわるがわる見やった。仁王立ちになっている労務者風の男があとを受けるように口を開いた。
「ADポリスが五〇階建てのビルごと発狂したブーマをかたづけようとして失敗した事件、あれは近くのビルからとっくりと拝見したが、屋上に追いつめたブーマから人質を奪い返して、みごとに脱出した手並みとチームワーク――そうか、助け出されたのは遠目だったがたしかこの女だ。あれは、おまえたちナイトセイバーズだったんだな」
リチャーズはニヤリと笑った。
「それなら話ははやい。おまえたちにとってはブーマは宿敵。われわれの目的もブーマの

撲滅にある。もちろん、われわれも、エレンディラ以外はブーマであるわけだが、われわれの数などとるにたりない。われわれの敵は、今や世界中に広がり、どこでも悪魔の使いのように恐れられているゲノム製のブーマだ。つまり、おまえたちもわれわれも、狙う相手はまったく同じというわけだ。どうだ、この際われわれと手を組まんか？」

「あんたたちの戦法はわかってるよ。ゲノム製のブーマは、ティンセル・シティだけでも実数をつかめないほど人間社会に潜入している。それをあやつっている者はさまざまだし、ときとしてブーマ同士の戦闘さえ起こる。だが、元をただせばゲノムの造りだした同じもの。弱点も共通してるってわけね。それがエレンディラの吹く笛の音だと――」

プリスはリチャーズを正面から見すえて言った。

「そこまで気がついていたか。エレンディラの笛の音は、ある特殊な波形を持っており、人間には心地よく、なつかしささえ感じさせるやさしい音色らしいが、ゲノム製のブーマにとっては、電脳の奥深くまでほとんどストレートにとどいて狂わせる、恐怖の音色なのだ。おまえを世界民族音楽祭に出演させようとしたのは、つまり、放送衛星ネットワークを通じて笛の音を世界中に流し、ブーマの恐怖を全人類に知らせるためなのだ。世界の最先端をゆく大都会、とりわけティンセル・シティではブーマ犯罪は日常的なことで、その恐ろしさもよく知られているが、ブーマの機能的な優秀さ、兵器としての有効性にだけ目をうばわれて大量に買いつけ、局地戦や破壊工作に使用している国は多い。ブーマがいかに危険なものか

を人々に思い知らせなければ、ブーマの増強は果てしなくつづくだろう」
リンナはやっと話の全容がのみこめたらしく、リチャーズのことばに大きくうなずいた。
「なーるほどね。世界民族音楽祭は、どの民族、どの国家、どの地域でも同時に聴かれるはずだもんね。笛の音が流れたとたん、それまでブーマを重宝がって使ってた連中も、目の前で自分が頼りにしてたブーマが狂って暴れだせば、ブーマの危険性がやっとのみこめるにちがいないわ。機械を信用しすぎた人間たちが、けっして機械にはまねのできない素朴な歌によってやっと目をさます……」
リンナがうっとりと夢見るように言った。
「そうさ。だから、あすの音楽祭の幕開けに、エレンディラといっしょにステージに立ってくれるな？　プリス」
リチャーズが、言いながら握手を求めてプリスに近づいてきた。
プリスは、だが、エレンディラをうしろにかばうようにしながら身がまえた。
「ふん、調子のいいことを言うんじゃないよ。人類に対する警告だかなんだか知らないが、狂ったブーマのためにどれだけの人間が犠牲になると思ってんのよ。あたしは、そんな危険なひきがねの役をつとめるのはまっぴらごめんだね。――そうか、エレンディラがさっきそのみにくい女にムチ打たれながらも、ステージに立つことを承知しなかったのは、そのためだったんだ！」

そのとたん、労務者風の男の体が、メリメリと音をたててさらにたくましく盛りあがった。服がビリビリと破れ、その下の人工皮膚が粉々にとび散る。にぶい光沢のある鋼鉄の肉体が現われた。

リチャーズがヒステリックに叫んだ。

「ガルシア、エレンディラもろとも、この小娘どもを殺ってしまえ。こっちにはあの曲のディスクがある。娘の身代りなどなんとでもなるさ。南米が世界に誇る、ブラジリア・テクニカル社の戦闘用ブーマの恐ろしさを見せてやれ！」

ブーマの鉄拳がプリスの頭をかすめてとんだ。壁にぶちあたった衝撃は、建物さえゆるがせた。

プリスはエレンディラをかかえたまま、ブーマの足元をころがってリンナのそばへ逃げた。

リンナはエレンディラをまん中にかばうようにして、プリスとともにブーマとむかい合う。

「ど、どーすんのよ。プリス。こんな狭いとこで、しかもハードスーツもなしにブーマを三人も相手にするなんて、助かりっこないわよォ……」

リンナが泣きだしそうな声で言った。

「ガルシアにまかせといたら、倉庫ごとぶっこわしてしまうわよ」

ケロイド状の膚の女が、舌なめずりしながら体に巻いたシーツを取り去った。下着からのびている四肢は、吐き気をもよおさせるようなひどい火傷でおおわれている。

「そうだな、マリア。三人で一気に片をつけてしまおうか」
余裕たっぷりの笑みを浮かべながら、リチャーズが一歩前に踏みだした。
プリスたちがあとずさる。絶体絶命のピンチだ――！
が、リチャーズの足が急にガクッとかたむき、床にひざをついた。
「こ、これは!?……まさか、そんな……」
リチャーズが体をふるわせ、眼を大きく見開いてつぶやいた。そのゆがんだ表情は、ちょうど突然の恐怖感に襲われた人間のものとそっくりだった。
「リチャーズ、どうしたの？」
マリアと呼ばれた女ブーマが驚いてふりむいた。
「グァアアアアアア――！」
リチャーズは両手で頭をかかえ、天井にむかって悲鳴とも苦痛の叫びともつかないブーマ独得の声をあげた。スマートな体つきが、あっという間に筋肉りゅうりゅうたるブーマの体形に変わっていく。
「リチャーズ！」
ブーマたちが立ちすくんだ。
――ガシャーン！
小窓が大きな音をたて、部屋の中にむかってガラスがとび散った。と、それにつづいて反

対側の鋼鉄のドアが爆発音とともにガタンと開かれた。
女ブーマがあわてて両方に視線を走らせる。
われた窓ガラスの上にひとつ、そしてドア口にひとつ、戦闘スーツ姿の人影が立った。
窓ガラスを踏んですばやく立ちあがった人影が、高らかに言いはなった。
「闇の仕置人、ナイトセイバーズ参上！」

6

「シリア、来てくれたのねっ！」
リンナが歓喜の声をあげた。
そのとたん、ガルシアが、ガラス片の上に立つシリアめがけてとびかかった。シリアはその巨体をガッと受けとめた。
だが、力の差は明らかだ。上から太いブーマの腕におしつけられ、シリアの体がじょじょにかたむく。シリアのひざがガクッと折れて床にめりこんだ。
「シリア！」
リンナが悲鳴をあげた。
シリアがつぶされる！――と見えた瞬間、ブーマの巨体が宙を飛び、小窓のあるあたりの壁を一気に突き破って外に落下していった。相手の力を利用した、逆転の投げ技だった。

「ふたりとも、エレンディラを連れて逃げるのよ！」
シリアはそう叫ぶと、ブーマを追って、パックリと開いた壁の穴からとびおりていった。
ネネは、右腕のアタッチメントのレーザーバレルで女ブーマと戦っていた。女ブーマはバトルスタイルに変型してもケロイドはそのままだった。
「あの女の声、どっかで聞いたことがあると思ったら、例の安ホテルの爆発のとき廊下に立ってて吹きとばされた女だ。そうか、あの火災で地膚までケロイドになっちまったのか」
「プリス、感心してる場合じゃないわ。はやく逃げんのよっ！」
ネネが叫んだ。
女ブーマは、ひるむことなくネネに体当たりしていった。ネネの体が一回転してドアの外へころげ出した。
そこはすぐ階段だった。ネネの体は、階段の手すりを道連れにして落下していった。ブーマはそれを追ってジャンプする。胸から突き出した二本の鋭利な刃が、倉庫の中に充満しているほこりっぽい空気をつらぬいてギラリと光るのが見えた。
「ネネ！」
戸口に駆けだそうとしたプリス。
だが、その前にバトルスタイルに変型したリチャーズが立ちはだかった。プリスもリンナも、武器を取りあげられてしまっている。プリスは無我夢中で近くにあったものをつかんだ。



――ビシッ。

プリスがふるったのは、女ブーマがエレンディラを拷問していたときに使っていた太い革ベルトだった。

「プリス、そんなもの効くわけない。ダメよっ！」

リンナがうしろで叫んだ。

といって、ほかに手はない。プリスはそれにかまわず、ビシビシとベルトをリチャーズにあびせた。

と、どうだろう。リチャーズは、両手を顔の前に交差させてベルトの衝撃をさけながら、ジリジリと後退しはじめたのだ。

「そのイキ、そのイキよっ。プリス！」

意外なリチャーズの反応に驚きながらも、リンナは必死に声援を送った。

「リンナ、今よ！」

戸口のところまでリチャーズを追いつめ、プリスが叫んだ。

プリスはベルトを投げすててリチャーズにタックルする。そのうしろから、リンナがジャンプしてリチャーズの胸に体当たりをくらわした。

ブーマとはいえ、完全に逃げ腰になっていたリチャーズは、プリスに足をとられたところをリンナに体当たりされ、グラリと体のバランスをくずして階段をまっさかさまに落ちてい

った。

階段のま下では、ネネが女ブーマの上に馬乗りになっていた。ネネのハードスーツの背中からとびだしている三対の短い翼のようなものが、ピッピッと反応した。

それはネネのスーツにだけ取りつけられた高性能センサーである。ネネが自覚し、行動しなくても、ハードスーツが異物の接近を察知し、作動する。ネネは何かの危険がせまっていることだけを感じた。と、足が勝手に鉄板張りの床を蹴った。

ネネの体が女ブーマからはなれ、クルリと空中で回転する。ネネの視線の端を、落下してきたリチャーズがかすめた。

「グォオオオッ！」

リチャーズの叫びが、倉庫の高い天井に反響した。

ネネがスタッと着地した。

「キャ、あ、あぶないとこだったんじゃない！」

ネネがそこに見たのは、抱きあうようにしてころがっている二体のブーマだった。上にのしかかっている格好のリチャーズの背中には、胸をつらぬいた女ブーマの鋭い刃が二本、先端を光らせて突き立っていた。

エレンディラを背負ったプリスとリンナが、階段を駆けおりてきた。

「はやく。ブーマが爆発しちゃう！」

ネネが叫び、プリスたちを先導して出口へとむかって走る。
と、女ブーマがムックリと起きあがった。胸の刃にくしざしになったリチャーズの体を引き抜き、横に投げとばす。リチャーズの体のあちこちから、いっせいに熱い煙が吹きだした。その煙の中に立ちあがった女ブーマの両眼が、ギラギラと赤く輝いた。糸を引くような細い光線が、まさに倉庫をとび出そうとするプリスたちの背後を襲う。
「アウッ!」
だれかが苦しげなうめきをあげた。
と、その瞬間、倉庫の中で大爆発が起こった。
半開きになっていた表の大扉が勢いよく外にむかって開き、プリスたちはむかいの倉庫の前まで吹きとばされていた。
「みんな、だいじょうぶ⁉」
道路のむこうからマッキーが走ってきた。
「ねえ、ねえ、リンナさん、リチャーズが急に狂いだしちゃってビックリしなかった?」
「え……じゃ、あれ、あんたのしわざだったの?」
リンナがミニスカートのほこりをはらいながら言った。
「けど、リチャーズはゲノムのブーマじゃない。リンナの放送を聞いたときだって狂わなかったんだぜ」

プリスが不思議そうに言った。

「ブーマのように精巧な電脳は、たとえ製造元がちがったって弱点は同じさ。ただ、あの笛の出す音波を遮断するフィルターがついていただけなんだ。電脳にリンクするのと同じ方法でフィルターの中まで信号を運び、再構成して電脳にとどけたワケ」

「よくやったわよ、マッキー。おかげでブーマ三体を相手にせずにすんだわ」

いつのまにかマッキーのうしろに来ていたシリアが言った。

「あの戦闘用ブーマは？」

ネネがたずねた。

「手強い相手だったけど、メモリアル・ライトハウスからまっさかさまに落下して大破したわ。どう、だれもケガはない？」

シリアがそういってみんなの顔を見まわした。

「そ、そういえば、さっきのうめき声……あ、エレンディラは？」

リンナが言うと、全員ハッとしてうしろをふり返った。

7

エレンディラはすこしはなれた場所にうずくまっていた。プリスがまっ先に駆けていって助け起こした。

「エレンディラ、エレンディラ、しっかりするんだ！」
「プリスさん、よかったね、ブーマはもう気が狂ったりしないよ。あたし、もうちょっとでほんとに恐ろしいことするとこだった……」
「笛のこと、知ってたのか？」
エレンディラはコクンとうなずいた。
「あたしのパパが作ってくれたんだもの。悪いヤツが近づいたら、それを吹けば追っぱらえるって。そして、悪いヤツっていうのは、ゲノムの造ったブーマだって言ってた」
「あなたは、どこから来たの？」
メットをはずしたシリアがたずねた。
「海のずっと、ずっとむこう。ブラジリアってとこよ。でも、パパはティンセル・シティの人だったの。一年前に死んじゃうまでは、ティンセル・シティがにくい、ゲノムがにくいって、いつも言ってたわ。あたし、だからパパのうらみをはらすために、パパの造ったガルシアたちと潜水艦でティンセル・シティに来たのよ」
「そうか、思い出したわ！　あなたのパパは、ウイズラボラトリーで働いてたのね？」
シリアのことばに、エレンディラはふたたびうなずいた。
シリアがエレンディラを見たことがあるような気がしたのも当然だった。エレンディラの父親は、シリアの父が所長をつとめていたブーマ開発の研究所でその部下だったのだ。シリ

アの父をはじめ、研究所員はすべて謎の爆発で研究所もろとも灰になったと思われていたのだが、エレンディラの父親はたまたま爆発現場に居合わせなかったのだろう。そして、その後あいついだブーマ研究機関の謎の爆発事故に身の危険を感じ、ひそかに国外脱出をはかったにちがいない。ゲノムがブーマ生産を一手に握ったことで、爆破の犯人をゲノムだと確信し、いつか復讐することを心に誓って独自にブーマを造りあげたのだ。

「エレンディラ、どうした、しっかりしろ！」

プリスがエレンディラをゆさぶった。

「血……！」

背中にまわしていたプリスの手に、ベットリと血がついていた。女ブーマにやられたのだ。

「プリス……さん」

エレンディラがうっすらと眼を開いた。

「しゃべるんじゃない。今、病院へ運ぶからな——」

「もひとつだけ……大事なこと」

「大事なこと？」

「そう。パパの造ったブーマたち、恐ろしいこととたくらんでたけど、ゲノムはもっと恐ろしいことしようとしてるのよ。それとめるの、もう時間すこししかない……」

エレンディラは苦しい息の下で必死にうったえるように言った。

エレンディラの語ったゲノムの陰謀とは――。

ゲノムが世界にむけて大々的に発表した放送衛星ネットワーク構想は、利益第一で世界のトップにおどり出た超集合企業体の平和攻勢として話題をまいた。

もうけすぎ、権力的、金のためなら手段は選ばない……等々といった悪評をぬぐい去るためだと言う意見や、平和に貢献するイメージを前面におしたてて、ゲノム自体の産業構造をさらに多角的に広げていくための布石だという意見が一般的であった。事実、東西先進国間の情報システムは、光ファイバーケーブル網のほぼ完成した現在では、これ以上の進展はのぞめないところまできていたし、それにともなう財貨の流れも、いつ停滞してもおかしくなかった。

行きづまった現状を打開するのは、世界戦争か、新しい世界経済体制への転換かと言われて久しい。ゲノムのとった道は後者であると、だれしもが思った。しかし、実は、ゲノムがひそかに狙っていたのは前者、しかも、巧妙に平和の仮面をかぶった戦争拡大だったのである。

ゲノムが放送衛星と称して打ち上げたものは、もちろん放送用の送受信設備をそなえてはいるが、同時にUSSDのビーム軌道衛星以上に強力なレーザー砲を持っていたのだ。しかも、そのレーザー砲の照準がつねにつけ狙うようにセットされているのは、ほかならぬビーム軌道衛星だというのだ。

二〇世紀後半以来つづいてきた核戦略体制は、ビーム軌道衛星の出現によって無力化された。もちろん、中東、アフリカ、中南米では、今もなお第二次世界大戦なみの極地戦が行われている。しかし、それもビーム軌道衛星の絶対的な管理のもとでの戦争ゲームにすぎなかった。ＵＳＳＤが権力システムの一方の雄となったのはそのためである。

だが、もしもそのビーム軌道衛星の力を、絶対的なものから相対的なものに引きおろしたらどうなるか？

ゲノムの発想の根源はそこにあった。天空からの監視がなければ、敵国に知られずに作戦行動をとれるし、敵国をはるかに上まわる戦力の増強も可能だ。いや、もし監視されていても、敵国にその情報がもれなければいいのだ。そして、そのためには、絶対的存在であるビーム軌道衛星に天敵を作り、自由に行動できなくすればいい。

各国が軍備拡張合戦をくりひろげれば、当然、世界一の兵器産業を持つゲノムは、果てしなく利益をこうむることになるのだ——。

エレンディラがたどたどしいことばで語ったことをおぎなって言えば、以上のようなことになる。

「ブーマは、自分たちはブラジリア・テクニカル社製だと言ってた。あそこは昔はゲノムにつぐ軍需産業だったはずだな。てことは、ゲノムの独占がブーマ以外のものにまでおよび、さらに強大化することを恐れたわけか」

プリスがつぶやいた。

「そうね。それにしてもゲノムのやり方は巧妙だわ。放送衛星ネットワークと世界民族音楽祭という平和的イメージを、まず全人類に印象づける。同時に、光ファイバーケーブルのネットワークに組みこまれていない地域や、新しいネットワークシステムを求める者たちのための情報網を完成する。こうしておけば、ゲノムの放送衛星は、不可欠なものになり、人類全体が支持するものになるわけよ」

「そっか。ビーム軌道衛星みたいに、恐ろしい見張りってだけじゃないんだもんね。放送衛星を攻撃したら、人類の敵ってことになっちゃうわ」

ネネが感心したように言った。

エレンディラがふたたび眼を開いた。

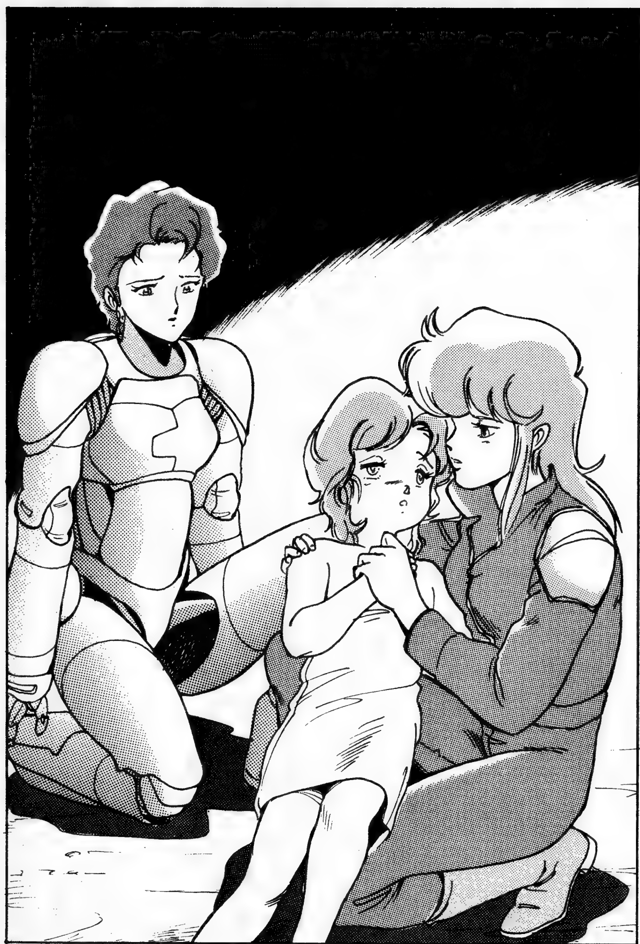
「プ……リスさん、そして……ナイトセイバーズの……みなさん。あたしの最後の……おねがい。あたしの生まれた南米は、貧しいけれど……いい人たちのたくさんいるところ。そこを戦争にまきこまないで……」

「エレンディラ――」

「プリスさんに……会えたから、ティンセ……ル・シティは……おもいでのまちよ」

少女の体から、スッと力が抜けていった。

リンナが涙声で叫んだ。



「なんてことよ！　こんなにかわいい、年端もいかない女の子が、全世界の運命をふたつも握ってたなんて。そ、それもよ、どっちをとってもたくさんの人が犠牲になってしまう、恐ろしい選択をまかされてたんだわ。ねえ、シリア、こんなひどいことってないわよねえ。こんなひどいことって！」

プリスが顔をあげた。青ざめてはいるものの、眼に涙はなかった。

「エレンディラは、自分の命を犠牲にして、狂ったブーマが全世界で暴れだす危機から人々を救ったんだ。そして最後にはあたしを……あたしはこの子を背負ってた。エレンディラは、あたしの代わりに死んだんだ。リンナ、あんたの言う選択肢の片方はなくなった。もう片方の危機をたたきつぶすのはあたしたちの役目だぜ!!」

シリアはプリスの眼をまっすぐ見つめ、黙ってうなずいた。

エピローグ

1

「ヘッ、なんだよ、大スターだかなんだか知らねえが、みんなオツにすましちまって。オレたちが守ってやってるから安心してられるってのによ。それを、なんでェ、ポリ公はあっちに行けだとっ。ああ、行ってやるサ、行ってやるとも。ブーマに襲われてから泣き叫んだって、オレぁ、助けてやらねえからな。バッキャローッ！」

レオンは悪態をつきながら、楽屋の立ちならぶ一角から出てきた。ビデオ・ムービーで数年前に天才少女といわれてデビューしたフランス人と、アメリカの若いミュージカル女優が楽しそうに話しているのに、ちょっと仲間に入れてもらおうとしただけなのに、そのフランス人の女の子にはほっぺたを思いっきりなぐられ、アメリカの女優には『ポリ公は、あっちへ行ってな！』と口ぎたなくののしられたのだ。

ムカムカしながら、通りすぎる歌手やミュージシャン、俳優なんていう連中の顔を見ていると、そのどれもが一様に、警察などには関心のカケラすらなく、人間としてさえ認めていないように思えてきた。

（てめーら、おぼえてろよ。あすになってひとりの女性ロックシンガーがデビューしたら、

人気はその子がみーんなかっさらっちまうんだからな。その子は、てめーらみたいにオレをコケになんぞしやしねえ。ホントに気持ちのいい子なんだぜ！）

通路に出て、楽屋のほうをもう一度にらみつけてやろうとふり返ったとき、レオンはそこに、自分が今頭の中に思い浮かべたばかりの女の子が立っているのを見て、とびあがらんばかりに驚いた。しかも、だいぶ願望をこめてやさしい笑顔を想像していたのだが、その笑顔がまったく寸分たがわない形でそこにあったのだ。

「プ、プリスさん！　神宮ドームへ来たってことは……やっぱ音楽祭に出ることにしたんだね！」

「さあ、どうしようかな。あたし、まだ迷ってんだ。心を決めちまおうと思ってフラフラここまでやって来たんだけど、よく考えてみたら、あたしのことに親身になって相談にのってくれる人間なんて、こんなとこにいるわけないもんな」

「そ、そんなことないぜ、プリスさん。きっとオレのことが無意識のうちにプリスさんの頭に浮かんでたんだよ。そりゃ、一生一度のターニング・ポイントに立ってるんだからね、心が揺れるのはあったりまえさ。オレが相談にのってやるって！」

レオンは、さっきまでの不機嫌はどこへやら、だらしない笑みを満面に浮かべている。

「そうだなあ、相談相手になってもらおうか。でも、こんなにぎやかじゃ……どっかふたりっきりになれるとこに連れてってくれよ」

プリスはめずらしく甘ったるい声で言った。
それを聞くやいなや、レオンは恋人気取りでプリスの肩に手をまわし、ひと気のほとんどない野外ステージのベンチへ連れていった。
「ここならガードマン以外は来やしねえ。安心して胸のうちを明かしなよ」
レオンは、せいいっぱい気取ってプリスにささやきかけた。
「ねえ、ひとつ聞いていいか？　きょうゲノムからガードマンが新たに派遣されてきただろ。このステージを見まわってる中にもいる？」
眼をトロンとさせ、レオンの首に腕をからめているのに、プリスはまったく奇妙なことをたずねてきた。
「え？　そりゃいるさ。ドーム周辺もふくめたら三〇人もおしつけてきやがったからな。エート、ほら、今あそこに立ってるヤツもそのひとりだ」
「そう。もしかすると、ブーマかもしれないな。いや、きっとそうだよ。それも、最近テインセル・シティ中を騒がせてる、気が狂ったブーマ……」
「そうかなあ、マトモそうに見えるけど」
「いや、これから気が狂うのさ。あたしのカンはたしかだよ。あんた、あの男をピッタリマークしときな。きっと手柄をたてられるからサ。……じゃ、あたしもう行くね」
「あれ？　ねえ、悩みの相談はいいのかい。ねえ、プリスさんてばァ……」

「あんたの顔見たら、悩みなんてふっとんじまったよ」
プリスはそう言うなりサッと立ちあがり、いきなり駆けだした。
「ま、待ってよ、ねえったら！」
レオンがあわてて追いかけようとする。
と、プリスは何を思ったか、下になにも着けていない革ツナギのジッパーをヘソのあたりまで引きおろし、片方の肩をむき出しにした。
「た、助けて！　あの人が、あの人がいきなりあたしを！」
プリスはレオンを指さしながら、ゲノムの派遣してきたガードマンにむかって一直線に駆け、ヒシッとその男の首にしがみついていった。
ガードマンが三、四人、たちまちレオンに銃をつきつけてとり囲んだ。
「や、やめろ。オレはADポリスのレオンだぞ。怪しいモンじゃねえっ！」
レオンはじたんだ踏んでわめき散らした。
「あら、ADポリスだったの？　あたし、カンちがいしちゃったみたい。なんでもないのよ。あたしは、あすの音楽祭でトップに歌うプリス。その人を離してあげてね。それじゃ、オヤスミなさ〜い」
プリスは明るい声でそう言うと、たちまち夜の闇にまぎれてしまった。
「プリスさん、よっぽど緊張してんだろうなァ。完全にプッツンしちゃってるぜ……」

レオンはあきれかえった顔で、プリスの消えたほうをしばらく見つめていた。

2

プリスが深夜の超高速高層道路（スーパーエクスプレスウェイ）をぶっとばしてファッション・ビルの屋上住居（ペントハウス）へもどると、そこは、ピンと張りつめた、ただならぬ空気が支配していた。

「作戦第一段階は完了したぜ、シリア」

プリスは足ばやにシリアのほうへ歩みより、感情をおし殺した声で報告した。

「〝ターゲット〟は？」

「ゲノムが神宮ドームへ派遣（はけん）したばかりの、まっサラなやつだ。持ち場をはなれるような気づかいはねえ」

シリアはプリスの顔をまっすぐ見つめ、深ぶかとひとつうなずいて立ちあがった。

「上出来（じょうでき）よ。ブーマの相つぐ発狂事件については、ゲノムも血まなこになって調査を進めているはず。当然新（あら）たに派遣されたブーマは、念入りにチェック済（ず）みでしょうからね。ゲノムに与えるショックはそれだけよけい大きくなるし、むこうもわたしたちのことばを信用せざるをえなくなるわ」

シリアは言いながらマッキーに指示を出した。

マッキーは、待ってましたとばかりコンピュータ・コンソールにすっとんで行った。

「リンナ、それじゃわたしたちは第二段階にかかりましょう」

シリアは横にすわっていたリンナをうながし、ハードスーツに着がえるために隣室へ行きかけた。

ネネがぴょんと立ちあがった。

「ま、待って。リンナの役、あたしにやらせてほしいわ。だって、こんどの事件じゃ、あたしたいして活躍の場面なかったんだもん。そ、それに、あたしだってエレンディラのかたきを討ってやりたいのよう！」

にぎりこぶしをふりまわしながら叫ぶネネに、シリアはなだめるように言った。

「いいこと、ネネ。この作戦は、エレンディラの願いをかなえてあげるためであると同時に、全世界の危機を救うことでもあるのよ。そして、神宮ドームに世界民族音楽祭を見に集まる多くの観客を危険にさらすことになるのを忘れちゃだめよ。全世界というのは、けっきよくそういう生身の人間ひとりひとりの集合のこと。犠牲者をたとえひとりでも出せば、エレンディラの願いをかなえてあげることにならないでしょ？　あなたにも大切な役目があるはずよね。それをしっかりと果たしてちょうだい」

ネネは肩にのせられたシリアの手をにぎり返し、コクンとうなずいた。

「わかったわ、シリア。あたし、さっき言われた通りＡＤポリスのオフィスに出勤する。作戦がカウント・ゼロになったら、神宮ドームから通報があるなしにかかわらず、ただちに

非常警戒命令を発して観客の安全をはかるのね。チョッピリはりあいのない役目だなって思ったけど、これ、あたしでなきゃやれないもんネ。まかせといてっ！」
「そうよ。この作戦は、メンバーのだれかひとりでも役目をおこたれば、けっして成功しないわ。派手なバトルはないかもしれないけど、計画通り、正確に遂行しなければならないのよ。みんなも、いいわね？」
シリアはそう言ってメンバーの顔をひとつひとつ見わたした。
「けど、あたしの仕事はもう終わったはずだぜ。いっしょに行っていいだろ？」
そう言ったのは、立ったままのプリスだった。
「じゃ、やっぱりあなたは世界民族音楽祭のオープニングを飾る気はないの？」
シリアは、プリスの気持ちをたしかめるように問いかけた。
「そうよ、プリス。あたしたちの作戦は、なにも音楽祭までぶっつぶそうっていうんじゃないわ。プリスの出演をしかけた張本人は、ブラジリア・テクニカル社のスパイ・ブーマだったとはいえ、メイン・プロデューサーに認められたのはあなた自身の力よ。意地はることない。こんなチャンス、二度とないんだから――」
リンナがしきりにうなずきながら、プリスをけんめいに説得しようとした。
「あたしだけの力じゃないよ。エレンディィラ抜きじゃ魅力の半分も出やしない。いや、あの歌は、あの子といっしょにやったことで、はじめて魅力を持てたんだ。だが、エレンディ

ラにとっては、あれはあたしとの心のきずなをたしかめるための手段だったんだ。他人に聴かせる必要は、最初からなかった。番組で流したことが、そもそもまちがいだったと、あたしはやっと気がついたのさ」

言い終えて口をつぐんだプリスの眼に、うっすらと涙が浮かんでいた。

屋上住居にしばらくの間、重い沈黙がおりた。

「あなたの気持ちはよくわかったわ、プリス。でも、エレンディラに対する気持ちはわたしたちも同じよ。わたしたちも、それぞれの役目を果たすことで彼女の遺志にむくいたいの。わかってくれるわね――」

シリアのことばに、プリスを見つめているすべての眼が同意を表していた。

「あたしだけセンチメンタルになりすぎてたようだな……」

プリスはフッと息を抜き、小さな笑みを唇の端に浮かべた。

「あたしはステージには上がらない。けど、予定通りに行動するよ。神宮ドームに行って、作戦がうまくいくかどうか、ゆっくり見物させてもらうことにしよう。いずれにせよ、こんどの作戦は大きなカケだ。成功することを祈ってるぜ」

世界民族音楽祭を翌日にひかえた夜は、ブーマ犯罪の発生を告げる警察無線が聞こえてくることもなく、静かにふけていった。

屋上住居の広い窓にかかったカーテンに朝陽がさしそめるころには、部屋の中には人影は

ほとんどなくなり、非常事態にそなえてソファで仮眠をとっているマッキーのかすかな寝息だけが、規則正しく聞こえてくるだけだった。

3

「ナイトセイバーズだと？」

クインシーは、超高級服地で仕立てたモーニングのえり元を直しながら問い返した。

ゲノムの総本山、ゲノムタワー最上階の会長室である。朝の透明な光が、片側の全面ガラス壁をななめに横ぎっている。

明と暗、地上と宇宙、地球の表と裏——世界のすべての場所と時間が同時に存在する超集合企業体の頂上では、光と闇がつねにそれぞれの表情を持って息づいている。

クインシーは光から闇へと歩を進めた。

陰にとけた黒いモーニングは、クインシーを神官のようなシルエットに見せた。

現代の神話をつかさどる男の姿——そしてここは現代の聖域である。

「ここへ——この部屋へ通すというのか？」

クインシーははじめて立ちどまった。胸ポケットにハンカチをさしこみかけた手を抜き、ハンカチを広い机の上に投げすてる。

「いいか、メイスン。ここへは、アメリカの大統領の表敬訪問をただ一度認めたことがあ

るきりだということを忘れていはしまいな?」
机上のインターホンから細い声がしばらく聞こえていた。
「USSD?……USSDがその会見を要請したのだと? まさか、そんなはずが……」
(このゲノムの命運のかかった日に、なんということだ――)
「……わかった。会おう。通せ」
クインシーは堅い意志力を表すみけんの深いたてジワを作り、チェアーの背もたれに身をまかせて眼をとじた。
やがてドアが開き、三つの足音が入ってきた。
「ナイトセイバーズとおっしゃるおふたりです、会長」
メイスンが声をかけた。
クインシーはゆっくりと眼をひらいたが、その眼はそのまままん丸く見ひらかれた。
「こ、これは、どういうことだ!? メイスン、なぜそのまま通したのだ!」
クインシーは思わず声を荒げた。眼の前に立っていたのは、バトルスーツで完全武装したふたり組だったのだ。
「失礼はお許しください。わたしたちは、この姿をしていてこそナイトセイバーズ。会長がこの立派な建物の最上階に、数々の警護設備に守られていらっしゃるのと同じことと存じますが」

一歩前へ進み出た人物が、バトルスーツを装着しているとはとても信じられないほど優雅なしぐさであいさつした。
「女……？　いや、失礼。ですが、他人の家へ上がる格好としては、いささかものものしすぎるのではありませんかな」
すばやく落ちつきをとりもどして、クインシーは興味深げにバトルスーツを見つめた。
「そのようなことはないと思います。わたしたちがきょうこちらへ参りましたのは、あるお願いを聞いていただきたいからです。聞き入れていただけない場合は脅迫という手段にうったえるつもりですから、この格好も不自然ではないはずです」
「脅迫？　それはおだやかではありませんな。聞けば、ＵＳＳＤの紹介──というか、あなたがたにかならず面会してくれるようにという申し入れがあったそうだ。それほどにして私にどのようなお求めですかな？」
「ゲノムが打ち上げた放送衛星を、即刻廃棄していただきたいのです」
「は？……今、なんと申されましたかな。まさか、本気でおっしゃってるわけではありますまい。ご存じのように、本日正午に世界民族音楽祭を皮切りに、わが社の長年の願いである、人類の福祉に貢献する放送がはじまるのですぞ。冗談でもそのような相談にのるわけにはまいりませんな。しかし、せっかくお会いしたのですから、放送衛星を廃棄しろとおっしゃる理由くらいはおうかがいしましょうか」

「それを申しあげてもしかたないと思います。わたしたちにも確証がないのですから」
「それは妙な話ですな。はっきりした根拠もなく、ただ廃棄しろとは——」
クインシーは皮肉っぽい小さな笑みを浮かべた。
メイスンは無表情のままバトルスーツのふたりをじっと見つめている。
今まで黙っていたほうのバトルスーツの人物が一歩前に出た。
「えーと、時間があんまりないんで脅迫にうつらせてもらいますね。現在、USSDの哨戒シャトルが四機、おたくの放送衛星のいずれか四基にむけて飛行中です。あ、もう宇宙空間で待機中かな？ それで、これから五分後に神宮ドームで起こるはずのある事件を確認したら、あたしたちが数時間前にUSSD長官に会見して話したことがウソでないことがわかるだろうから、ただちにおたくの放送衛星に乗りこんで、調査を開始することになってます……と、こんなもんでいいかしら？」
もう一方のほうにたずねた。
「ええ、けっこうよ。では、壁のご立派なモニターを、神宮ドームからの中継に合わせていただけるかしら？」
一方的にまくしたてられたクインシーが、怒りをあらわにして立ちあがった。
「待ちたまえ。USSDがわれわれの放送衛星を勝手に調べるとは、どういうことだね？ 宇宙空間とはいえ、所有者のはっきりしておるものに無断で乗りこめば、侵入罪になるの

だぞ」

「さあ、あたしたちに言ってもらってもこまるわよ。USSDがやるんだもん。でも、調査の結果、放送衛星にもしヤバイものでも見つかったら、侵入罪とはくらべものになんないくらいの罪がおたくらにかかってくるんじゃないの？　たしか、二〇世紀のSDI――スターウォーズ計画の廃止が調印されたときに、宇宙空間に兵器は持ちこまずって協定ができてたはずよねえ。国連合意で、USSDには例外措置が認められたけどさァ」

「何のことを言ってるんだね。さっぱり意味がわからん」

クインシーはぶ然とした表情で眼をそらし、いらだたしげに机を指でたたいた。

「とにかく神宮ドームの様子を見ていただきましょうか」

もう一方のバトルスーツ姿の人物が言った。

4

神宮ドームの円屋根のバイオ合成樹脂ファイバーの銀色の照り返しの中を、ごっつい体格の男が、左右を順番に見まわしながらゆっくりと歩いている。リズムをとるように、右手に持った黒い棒で左の手のひらを規則正しくたたいている。

その歩調と棒の動きはピッタリと正確だが、かといってむこうのステージで演奏しているデキシー・バンドの軽快なホーンのリズムと合っているわけではない。

ストップウォッチを使ってその男の動きを追っている者がいれば、おそらく〇・八秒きざみの正確な周期を持った、単調なくり返しの動作であることがわかっただろう。
男は、自分の周囲五メートル以内に近づいた人間の性別、推定年齢、身長、体型、顔と服装の特徴といったものを、この二時間あまりのあいだにすでに一五〇〇〇人以上記憶していた。だぶって憶えこんだものはひとつもない。二回以上見かけた者は、その位置と行動をかならず前回と比較し、変化をチェックしている。不審なところを発見した相手については、約七〇におよぶチェックポイントのどの項目に該当するかがきちんと整理されており、男のほうで意識的に特定の相手の動きをサーチする行動に出ることもある。
神宮ドーム周辺の六つの野外ステージのひとつを巡回しているその男の、見かけの動作の単調さは、はんらんする膨大な情報を吸収、整理し、対応するのに、彼の知覚機能がフル稼動しており、そのために生じる動作のぎこちなさをおおい隠そうとしてとっている偽装パターンのせいだ。
男の名はロバートソン。昨日付けでゲノム社から派遣された警備要員のひとり――すなわち、彼の正体はブーマ、C系列の戦闘用ブーマだった。
ロバートソンは、アイスクリームを売る模擬店の前の人だかりに行く手をさえぎられ、偽装パターンの動作を一時的に解除せざるをえなくなった。同時に、知覚・識別機能に占領されていた電脳の稼動容量にわずかなゆとりができた。すると、自動的にそのすき間を埋める

ように別の行動パターンが挿入される。
「ふーむ……」
ロバートソンは長くため息をつき、いかにも警備の仕事にあきあきしているといった渋面を作り、黒い警棒で肩を二、三度たたいた。警備について丸一昼夜が過ぎている。人間ならば心身ともに疲労は極限に達している。それをシミュレートする行動パターンなのだ。
人だかりの八割がたはすでに記憶された人間だったし、要チェックの人物もまぎれこんでいなかった。それで、ロバートソンの電脳にさらに余裕ができた。彼の思考中枢は、「ランダム思考」の項目を選択していた。目の前の現象と自分の存在の関係からみちびき出せる連想を、さしたる根拠も目的もなく頭の中で展開する思考——人間にたとえるなら、ぼんやりと感慨にふけるというやつである。
（なにも、こんな混雑した場所に集まって長い時間列を作ってまで、融ける寸前のクリームのかたまりを買うこともなかろうに。人工着色料や甘味料でわずかばかりの差異をつけたものを、あれがいい、これはイヤだと騒ぎたてている。そんなことが、また楽しいというんだからな。人間てやつはまったくくだらねえ、わけのわからねえ考え方をするもんだぜ。音楽祭なんていうものもだ。一部の音楽はそれなりに論理的な構成と要素を持っているが、それにしたってコンピュータで正確にコントロールされた再生システムを通せばいいものを、こんな雑音だらけの劣悪なコンディションでわざわざ聴こうなんて、まったくどうかしてる

としか思えねえ……）

ロバートソンがそんなことを考えているときだった。背後から近づいてきた人影が、彼の肩をポンとたたいた。ロバートソンはランダム思考を中止し、すばやくふり返った。

「音楽祭なんてどうでもいいってツラをしてるな、え？」

なれなれしくそう言ったのは、革ジャンにTシャツ、下は洗いざらしのジーンズというラフなスタイルの若い男だった。

ロバートソンの電脳は、ただちにその人物を識別した。ADポリスのパトロール・チームのリーダー、レオン・マクニコルである。ゲノム派遣の警備要員であるロバートソンも、特殊ケースの非常事態（ゲノム社の機密・利益を損じる事態）以外は、ADポリスの命令系統に組み入れられている。つまり、レオンは平常時には上官である。ロバートソンは対応のパターンを「上官」に合わせた。

「いいえ、そんなことはありませんが、ただ、ちょっと疲れてるだけでして……」

「ほう、そんなふうには見えなかったがなあ」

レオンは表情には表わさずに相手のことばをまぜっかえした。

それを冗談と判断できなかったロバートソンは、自分の偽装パターンが見破られたのかと疑念のプログラムを作動させた。

レオンはロバートソンの肩に手をまわし、さも重要な話があるといった感じでささやきか

けてきた。

「なあ、おまえさ、昨夜のこと憶えてるだろ？　きょうのステージでまっ先に歌うことになってるプリスって女の子がさあ、おまえに抱きついたじゃねえか」

その記憶はある。たしか、このレオンという男に襲われたとカン違いして、ロバートソンに助けを求めてきた女のことだ。

「そんとき、あの娘はたしか革ツナギのジッパーおろして、オッパイの片っぽがポロンとむき出しだったよなあ。おまえ、あの形のいいオッパイにさわったんだろ？」

「は？」

ロバートソンは質問の意図を判断しかねた。

「いや、おまえを責めちゃいねえよ。ただ、どんなぐあいだったか知りてえんだ。恋人のオレでも、実はまださわらせてもらえねえんだ。だからよ、知りたくってさ。どんな感じだった？　やわらかかったか、それともこうはずむ感じか？」

「全体に脂肪がついていて、先端に尖起がありました。あの年齢としてはふつうの乳房で、これといった異常は認められませんでした」

レオンの真険な表情に合わせるつもりでロバートソンはそう答えたが、なんのためにそんなことを知りたがっているのか、いぜんとして理解できなかった。

「ケッ、そんなこと聞いちゃいねえんだよ。ま、いいか。おまえはモミモミしようなんて

気は起こさなかったらしいからな」

レオンはますます不可解なことをゴチャゴチャ言い、ロバートソンをジロッとひとにらみして、そのまま解放した。

（このレオンという男とは、昨夜の一件をふくめて九回も顔を合わせている。この回数は、他の者にくらべてもっとも多いが、相手はＡＤポリス、しかもリーダーだ。たしかに顔を合わすたびにかならずおれの顔をじっと見つめていたが、おれは相手の職務から判断して、最初から要チェック人物リストから除外していたのだ。あいつもチェックしておく必要があるかもしれん……）

忙しくそう計算しながら、ロバートソンはふたたび歩きだした。模擬店の並ぶ一角をはずれ、野外ステージと神宮ドームのちょうど中間、人影のまばらな人工芝のところにまわってきていた。

（ん……なんだ、この音は？）

突然、ロバートソンの聴覚に、ゆったりとした調べが流れこんできた。

ピアノ、ベース、マラカスのトリオ演奏だ。それ自体はまったくおかしくない。だが、耳から入ってきた音なら、人間以上の正確さで、どの方向から、どれだけの距離をおいて聞こえてきているのか、瞬時に識別できるはずなのだ。それができない……まるで、頭の中で音が鳴っているようだ。

つづいて歌が聞こえてきた。
「時代が忘れていったあたしたち
　フリーウェイ駆ける迷い子たち
　何に追いつこうとしてあせるのか……」
そのとたん、ロバートソンの電脳に、雷鳴のように突きささってきた奇妙な音があった。
「こ、これは、いったい何だ……どうしたことだ!?」
思わず口をついて出たことばは、ついぞロバートソンが発したことのない、驚きと、不審と、恐怖の最高ボルテージに達した状態をシミュレートする表現だった。
最新鋭技術の結晶であるロバートソンの電脳の奥をめがけて、とどろきわたる音のかたまりは、何度も何度も津波のようにおしよせる。
電脳に流入する情報が、あるものはバラバラに分裂し、あるものはまったく関係のないものと結合し、すでにあったデータも逆流し、果てしなく混濁していった。
神宮ドームの銀屋根の反射光は、無数の刃物の切先となって飛来する。と思うと、足元の人工芝がグラグラ揺れだし、とうてい立っていられないほどの角度に傾斜する。アイスクリームの雨、熱線砲の逆流、血を流すブーマ、泥のようにとび散るレーザー光……。
さまざまの、ありえないイメージが交錯した。ロバートソンは思わず頭をかかえ、叫びあげた。

「グワォォワワワッ、グェェェェェエー!!」

ロバートソンの体は、いまや光速に近いスピードで、宇宙の深淵にむかってまっ逆さまに転落しつつあった。頭上には、そのロバートソンを追う、無数のきらめく超硬度ガラスの破片があった。足元は、底知れぬドス黒い奈落となって、ロバートソンをどこまでもどこまでも吸いこんでいくようだった。

「こ、この感じ……いったい何だ？　何がおれの上に起こっているんだ――!?」

見知らぬ場所、とり残された感じ、永久につづいていく何か――ロバートソンは、はじめて経験する事態に、必死に秩序を与えようともがいた。そしてそれが、単に知覚・感覚系統の故障にすぎないのだと、冷静に判断をくだそうとつとめた。

（もうすぐだ……もうすぐ自己修復機能がはたらいて……）

「てめえ、やっぱりブーマ！　さっきの反応のしかたといい、どうもおかしいと思ってたが、プリスさんの言った通りだったぜ！」

ロバートソンの頭上で、レオンの怒鳴り声がした。

ロバートソンははじかれたように頭を上げた。

さっきの雷鳴のような音は消えており、メチャクチャに混乱していたイメージのはんらんもウソのようになくなっていた。

ロバートソンがそこに見たものは、さっきまでの神宮ドーム周辺の情景だった。だが、目

の前に突きつけられているものに対して知覚が構成されたとたん、こんどはロバートソン自身の内部から、形のない、なにか異様におぞましいものがこみあげてきたのだ。

レオンは、芝生の上に倒れたロバートソンをまたぐようにして立ち、レールガンをピタリと両眼のまん中にむけていた。

（レールガンの銃口……火煙……弾丸……衝撃!?）

ロバートソンの電脳がつぎつぎと連想をくり出していった。が、それは、緻密な反撃戦略をねりあげるためのものではなかったのだ。

（……破壊……死……破滅！　おれが、このおれが――――！）

なぜそんなことを考えるのか、という、判断修正プログラムの発する反問は、まったく役に立たなかった。

それは、さっきの音に刺激され、電脳の奥深くに隠されたあるものが、通常の役目を越えて働きだしたためだった。

二〇世紀末に出現した第五、第六世代コンピュータは、たしかに人間の思考形態や反応をシミュレートするところまで進んでいた。だが、それだけでは完全ではない――すくなくとも、生物とはいえなかったのだ。限りなく人間に近い存在を造りだそうとしたサイバードロイド計画の、最大の課題がそこにあった。

ごく下等な生物であっても持っているのに、機械にはけっして存在しないもの――それが

〝衝動〟、すなわち内部から行動に駆りたてる力である。さらに、動物ともなれば、その上に意識を持つ。もっと言えば意識する主体を持つ。

主体とは、自分が自分であり、他とは異なるかけがえのない存在であると自覚する根拠、そして、果てしなくつづく今、今、今の連続と、とらえどころのない空間の広がりの中で、「今、ここに、自分がいる」と意識する根拠――つまり〝自我〟のことである。

愛情も、憎悪も、欲望も、軽べつも、あらゆる感情は関係性の形としてシミュレートできるものであった。しかし、この〝自我〟だけは、データとして計量化することができなかった。なぜならば、これはそれ以上の単位には分割できないもの、その背後には何も存在しないものだったからである。

しかし、この〝自我〟なくしてブーマを造りだすことはできなかった。「敵」を認知するとは、「自分」とは異なる存在で、しかも「自分」に危害を与えようとする「何か」を識別することなのだ。そしてそれを破壊しようという意志、〝衝動〟を持たなければならないのだ。

亜人たるサイバードロイドを造りだそうという熱情に駆られた研究者たちは、バイオテクノロジーの最先端技術を応用して、ついに〝自我〟の「核」としてのみ生きる細胞のかたまりを作りあげることに成功したのだ。

「核」はブーマの電脳深く埋めこまれ、ブーマのあらゆる判断の根拠として機能しつづけ



である。

ロバートソンは恐れていた。自分が破壊されること、排除されようとしていること、抹殺されようとしていることを――。しかし、その恐怖感は、シミュレートされたものではない。ロバートソンの全身全霊を突きぬけ、がんじがらめに縛りつけていた。それは、今や、恐怖感を越える「恐怖」そのもの、いや、「恐怖」さえ越えるなにものかだったのだ。

レールガンのむこうにはレオンの憎悪に燃える眼があった。

「死ね！」――その眼はそう叫んでいた。

気がつくと、ロバートソンを遠まきにする人垣ができていた。その眼、眼、眼――。

「人殺しのブーマよ」、「こ、こわい」、「人間の敵だ」、「ブーマを破壊しろ」、「ブーマを殺せ」、「殺せ！」、「殺せ！」……。

ロバートソンは、すべてが敵だと知った。が、その敵の意識、憎悪と恐怖の莫大なパワーに、ロバートソンの〝自我〟は、今やはっきりとおびえていた。何かの力――そう、あの奇妙な音の力――によって目覚めたものが、存在の危機を感じておびえていた。

「ギャアアアアアアアアアアアアアア――!!」

ロバートソンの口をついて、内からこみあげてきたものが叫びとなってほとばしった。

そして、ザワッと動揺した人垣の一部をかきわけ、ロバートソンは必死に駆けだしていた。

『逃げるんだ、人間から逃げるんだ、殺されるぞ、殺される――！』

それはもはやロバートソンのコンピュータが計算した戦略でも、模倣行動による叫びでもなかった。それは、けっしてあらがうことのできない命令、内部からの存在の悲鳴だったのである。

人垣を突きぬけたロバートソンの目の前に、神宮ドームのゲートのひとつがうす暗い口を開いていた。それを見た次の瞬間には、ロバートソンは存在の危機からの脱出口を求めて、ゲートの中へと突進していた。

5

バトルスーツの人物の指示に、メイスン・はためらうことなく机の上からリモコンを取りあげ、壁にむけてスイッチをおした。

黒い壁に大きな画像がたちまち浮かびあがり、それと同時に、モニターと連動している輝度調節ガラスの窓がうっすらと青みがかっていき、画像がより鮮明に見えてきた。

大型モニターに映しだされたのは、神宮ドームに接して特設された野外ステージだった。

黒山の人だかりの中で、女性レポーターがふたりの人物にマイクをさしだしている。ひとりは威風堂々とした銀髪の中年で、もう一方は二〇歳そこそこのブロンドの青年だ。手ぶりをまじえながらにこやかに話しているのは、青年のほうだ。

「……とぼくは信じていますね。なにしろ、八年前のアメリカ建国二五〇年祭を大成功させ、ぼくをスターにしてくれたフェザーストーンさんがプロデュースしてるんですから、まちがいありませんよ」

青年はそう言って観客たちにVサインを送り、横にいる銀髪の紳士とあらためて握手した。満場が拍手の嵐につつまれる。レポーターはカメラのほうにむき直った。

「フェザーストーン氏とジャック・ローディさんに、いよいよ開幕まで三時間とせまった世界民族音楽祭について語っていただきました。えー、次にですね……」

女性レポーターの声が群集のざわめきにかき消された。レポーターはあわてて何事が起こったのかと周囲を見まわしている。

「……大スターのどなたかが入場されたのでしょうか……会場はわきにわいております。現在確認しておりますが、なにしろ今回の大イベントには、世界中から……」

騒ぎはだんだん大きくなり、ただならぬ空気がただよいだしたのが、画面を通しても手にとるようにわかる。一般客がつぎつぎとステージに駆けあがり、インタビューを受けていたふたりとレポーターの両わきを走りぬけていく。レポーターはたえきれずに立ちあがり、ヘッドホンをしたディレクターを呼びつけた。

「ブーマ？　え、ほんとうですか？……どこですって、え……」

画像が切りかわった。音声はあわただしく走っていく数えきれないほどの足音と、遠い悲

鳴ばかりだ。マイクスタンドが倒されたらしい。

カメラの前を、ななめに人影がおりかさなるようにして駆けていく。と、その人波のあいだにちらりとかい間見えたものは……。

「ブ、ブーマ――」

クインシーがチェアーから立ちあがった。

映しだされているのは、巨大な神宮ドームの内部だった。画像が客席最上段のカメラに切りかえられ、その全容が見わたせるようになった。客席にはまだ観客は入っていないが、中継の準備にあたっていたスタッフが、客席のあいだや通路を逃げまどっている。豪華に飾りつけられたステージの上には、最後のリハーサルをやっていたらしい派手なコスチュームや民族衣装の人々が、右往左往しているのが見える。そして、客席のほぼ中央、アリーナ席の最前列にたくましい体格の黒い人影がひとつあった。遠くてわかりにくいが、貴賓用にならべられたゆったりしたソファをつぎつぎに破壊しているらしい。

「……それはたしかなんだろうな……そうか、ではすぐに鎮圧しろ。観客に指一本ふれさせるんじゃないぞ！」

騒ぎを見てとるやいなや神宮ドームに問い合わせの電話を入れたらしいメイスンが、受話器にむかって鋭い声で命令した。

「会長、騒ぎを起こしたブーマは、きのう私が会長の指示であらたに神宮ドームに派遣し

た警備員のひとりだそうです」
モニターの前で、会場をみるみるガレキの山に変えていくブーマをぼう然と見上げていたクインシーが、メイスンの報告を聞いてサッとふり返った。
「な、なんだと――!?」
「しかも、突然狂ったように暴れだしたということです。いっしょに派遣していたほかの警備員には異常は表われていないようですが、とりおさえようとした二名がやられました」
メイスンは驚くほど冷静に報告をつづけた。
「そ、そんな……まさか、おまえたちが――」
クインシーは、あぶら汗でぎらつく顔をバトルスーツの二人組にむけた。
「あら、わたしたちのしわざかとおたずねなら、ノーとしか答えようがありませんわ。でも、見ていただきたかったのはこれです」
バトルスーツの一方が、画面の中で暴れまくるブーマを指さして言った。
「最近たて続けに起こったブーマ発狂事件、するとあれも……」
クインシーは悪夢を回想するように、うつろな視線を天井に迷わせた。
「それについてもお答えできませんわね。ただ、そちらもそれなりに調査を進めていらっしゃるでしょうから、ブーマの発狂についてくどくどと説明しませんけれども、一連の事件を考え合わせていただければ、さきほどの放送衛星廃棄の件、納得していただけますわね。

では、わたしたちはこれで――」
バトルスーツの二人組は、ゆっくりとドアにむかいかけた。が、ドアが開くと同時に片方がメイスンをふり返った。
「ねえ、この廊下のあちこちにしかけてあるぶっそうな装置、とめてくんない？　あたしたちが無事に出てかないと、お迎えがここに探しにくんのよ」
それと同時に、頭上で低くうなるような音が聞こえた。メイスンが、壁と見わけがつかないほど黒くなっていた窓ガラスの輝度をもとにもどした。
「むむ……」
クインシーが窓の外を見てうなった。
軍用の大型ヘリ数十機が、ゲノムタワーの上をグルリととり巻いて旋回していたのだ。
「ＵＳＤ――!!」
ぼう然と立ちすくむクインシーにかまわず、メイスンはクインシーの机に手をのばし、ボタンをひとつおした。廊下の警備システムが、かすかな音をたてて解除された。
「それじゃあネ、ヨロシク～」
女の明るい声が、とじていくドアのむこうに消えた。
「どう思う、メイスン」
机にひじつき、両手をにぎりしめたクインシーが言った。

「ブーマ発狂のメカニズムは不明ですが、きのうご報告したように、スミダ・リバーぞいで狂いだしたブーマは私の手の者でした。それと同時に、付近でも数件の発狂騒ぎが起きています。いずれもわが社の製品ですが、売却先も別ですし、関連は考えられません。以上のことから申しますと……」

「何者かのしわざなら、広域でも発狂させられる、ということだな。すると、やはり電波か音波によるものか――」

「さっきの女たちの言いたかったことは、それかと。もし、衛星放送によってその音波が世界中に流れれば、放送を聞いたすべてのブーマが暴れだします。そうなってみなければ事実かどうかはわかりませんが、事実とわかったときには、もう取り返しはつきません」

メイスンは淡々とした声で言った。

「放送衛星ネットワークの存続と引きかえにできるかな？」

「USSDとまっこうから対立するわけですから、やはり世界中の民族からの支持が必要かと思います。ゲノムの放送でゲノム製のブーマが世界中で狂ってしまうという事態になれば、おそらく……」

「バカな大衆どもは、実質を見ずに表面に現われたことに左右されるか……」

「しかしそれは、今回のプロジェクトで私どもが頼りにしたことでもあります。会場も、すでにあの有様ですし……」

そう言ってメイスンは、つけっぱなしになっていた壁の二〇〇インチモニターを見あげた。
画面では、無残に破壊された会場入口前が映しだされており、入場するためにならんでいた数万人の観客が遠まきに見守る中、今まさにブーマが爆発したところだった。
観客たちがいっせいにどよめき、歓声があがる。
重機動装備したADポリスが、黒煙をもうもうとあげるブーマをとり巻いている。そのうちただひとり私服姿の若いADポリスが、レールガンをこわきにかかえ、観客たちの歓呼に手をふってこたえている。

6

「なーんだ、衛星放送のことは一時延期としか出てないわね。これじゃ、レーザー兵器が処分されたかどうかなんて、ぜーんぜんわかんないじゃない」
ネネが、床いっぱいに数紙の新聞をならべ、その上をはいまわりながら言った。
「でも、ほら、すみっこのほうに、『USSD、緊急訓練のために世界各地の基地から三〇機のシャトルをいっせい発射』って出てるわよ。三〇機っていえば、ゲノムの放送衛星とピッタリ同数じゃない。USSDがレーザー砲を廃棄したのか、それともすでにゲノムが廃棄装置を作動させたのをUSSDが確認しただけなのか、どっちにしても、USSDとしたらほっとけないことだもんね。カタはついてるわよ。ねえ、シリア」

リンナが別の新聞を読みながら言った。
「ええ。わたしとリンナがゲノムタワーを出たころには、ゲノムの会長とUSSDの長官のあいだで合意が成立したにちがいないわ。放送通信機能には手をつけず、レーザー砲についても公表しない条件で、ゲノムはレーザー砲廃棄と世界民族音楽祭の中止をのんだのよ。データ通信回線も使用しない方針とあるから、ゲノムの手に残ったのは放送ネットワークだけ。スポンサーもなしに、あのゲノムが世界放送なんていう慈善事業をやるかしらね?」
シリアがにこやかな笑みを口元に浮かべて言った。
「まあ、やらないだろうね。だれかが放送リストの中にプリスさんのあの曲をまぎれこませたら、ゲノム自身の評判は一発でメチャクチャになるんだから」
マッキーがさも愉快そうに言った。
「バッカねー、マッキーったら。あの曲にブーマを狂わす原因があるとゲノムに知られたら、プリスがあぶなくなっちゃうじゃないの」
ネネがマッキーをにらみつけて言った。
「そ、そっかぁ。……アレ、でも、姉さんはビー・チップで採集したデータをADポリスに送っちゃったんだろ? そっちからゲノムに秘密がバレちゃう恐れはないの!?」
マッキーがあわててシリアのほうを見た。
だが、シリアは少しもあわてた様子はなく、平静な声で答えた。

「その点はだいじょうぶ。データをうまく切ったりつなげたりして、なんとか知られないようにしたから。でも、ちょっと気がかりなことが、ひとつだけあるのよね……」
シリアは言いにくそうにことばじりをにごした。
「え、な、なによ？　シリア。まさか、ギャラ――」
リンナの顔がサッと青ざめた。
「そうなの。ADポリスから依頼されたのは、第一に戦闘用ブーマの戦略データだったでしょ。騒ぎにとりまぎれてて、まとめる段階でやっと気がついたんだけど、正常な戦闘用ブーマの、戦闘時の情報って、ひとつもなかったのよねェ。それに、さしさわりのありそうなデータもだいぶ抜いちゃったし……」
金のこととなると目の色を変えるリンナを、いつもからかっているネネも、さすがにシリアのことばにギョッとして顔をあげた。
「あ、あたしたち、いくらもらえんの……？」
シリアがカード電卓をとりだし、こまった表情でボタンをはじいた。
「違約金がこれだけ……経費もだいぶかかってるわね……と、すると、トータルは――」
リンナ、ネネ、マッキーが、はじかれたようにシリアの背後にまわり、その手元をくいいるようにのぞきこんだ。
「えーっ!?　たったそれっぽっちなのォ……！」

リンナの悲鳴まじりの声が、屋上住居じゅうに響きわたった。

そのころ、プリスは海からの風に長い髪をなびかせながら、リバーフロント・ブリッジの先端にたたずんでいた。

音楽祭の行われるはずだった日が、まさに暮れようとしていた。

ティンセル・シティの空は、くさりかけたマンダリンのようなどぎつい色がわだかまっていた。

(事件の発端となった安ホテルの炎上事件のときも、ちょうどこんな汚ねえ夕焼けが見えてたっけ……そうだ、エレンディラの乗った潜水艦は、ちょうどそのとき、まさにこのリバーフロント・ブリッジの下をくぐってティンセル・シティに接近していったにちがいない。すると、ここは、エレンディラが父親の故国にふれた、最初の場所でもあったってわけなんだな……)

プリスは橋の上をぐるりと見わたした。ガードレールがあちこちで破れ、折れ曲がった先端がどれも海のほうにむかって突きだしている。塗料のはげたその部分から、ガードレールはまっ赤にさびついている。

(もう、あのゲームははやらないようだな。それでいいのか悪いのか、あたしにはわからない……けど、あれで死んでいった仲間の顔は、あたしの心ん中にしっかり残ってるぜ)

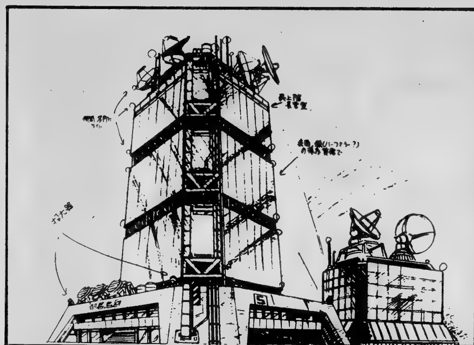
『至上の幸福』――仲間うちだけの、なんの裏づけも保証もないことばだった。

　しかし、プリスは、キラキラと一面に金色の破片(はへん)を散らばせたような海面を見つめながら、そっとそのことばをつぶやいた。

「至上の幸福(ハピネス・シュプリーム)……このことばを、ティンセル・シティでせいいっぱい生きたおまえたちにも送るぜ、エレン、そしてエレンディラ――」

　プリスは手に持っていた花束(はなたば)を、力いっぱい夕陽(ゆうひ)にむかってほうった。

　花束は、クルクルと舞(ま)いながら海面に落ち、さほど時をおかずに水中に没していった。花束には、重(おも)りのようなものがくくりつけられていたからである。それは、ドーナツ型の黒い板状(いたじょう)のもの――レコーディング用のマスター・ディスクだった。

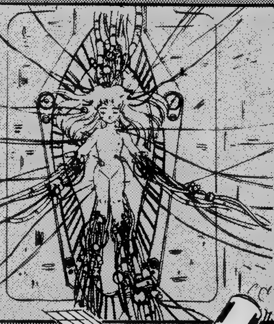


◀ＵＳＳＤビル

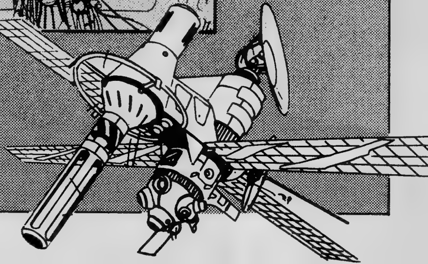
ＵＳＳＤ（宇宙防空軍）は宇宙開発の影の部分を支える。ゲノムと同様に多くの謎を秘めている。

U.S.S.D





◀シンシア(左)少女の姿をしているが実はビーム衛星の"歩く標的"なのである。ゲノムが奪取を企む程の高性能ブーマ。



▶ＵＳＳＤの対地上攻撃用ビーム衛星。シンシアと同調することにより作動する。

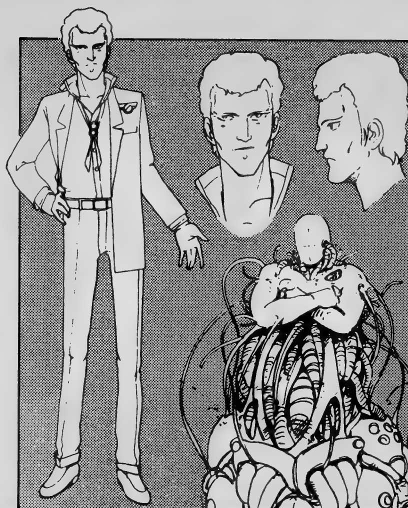
◀ADP隊員。武装は任務によって変わり、その基本スタイル。

▶対ブーマ戦用小型ヘリ"ファイア・ビー"。

◀ADP輸送トラック

▶レオンのパトカー"ロードチェイサー"

▼一般隊員用突撃銃。

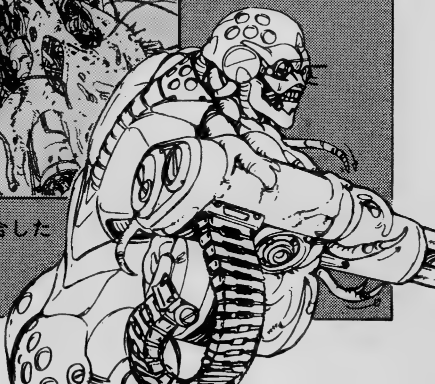


◀人間の姿より、ブーマへと変形し、形状記憶合筋と物質融合機能により大きさを自由に操ることが出来る。

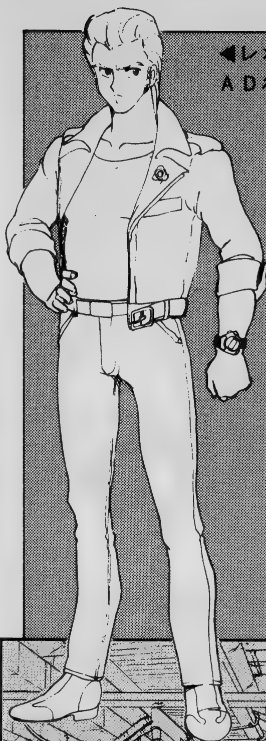
▼頭部レーザー砲。

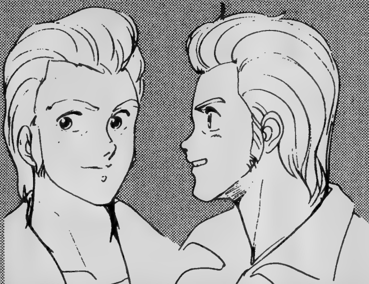






▶ガトリングガンと融合したブーマ。





◀レオン・マクニコル（25才）
ADポリスの刑事。ブリスの大ファン。

行政上7分割されている警察機構で時代の要求に応え新設された暴徒鎮圧隊。激化するブーマによる犯罪に対処するのが事実上の主目的である。

A.D.POLICE

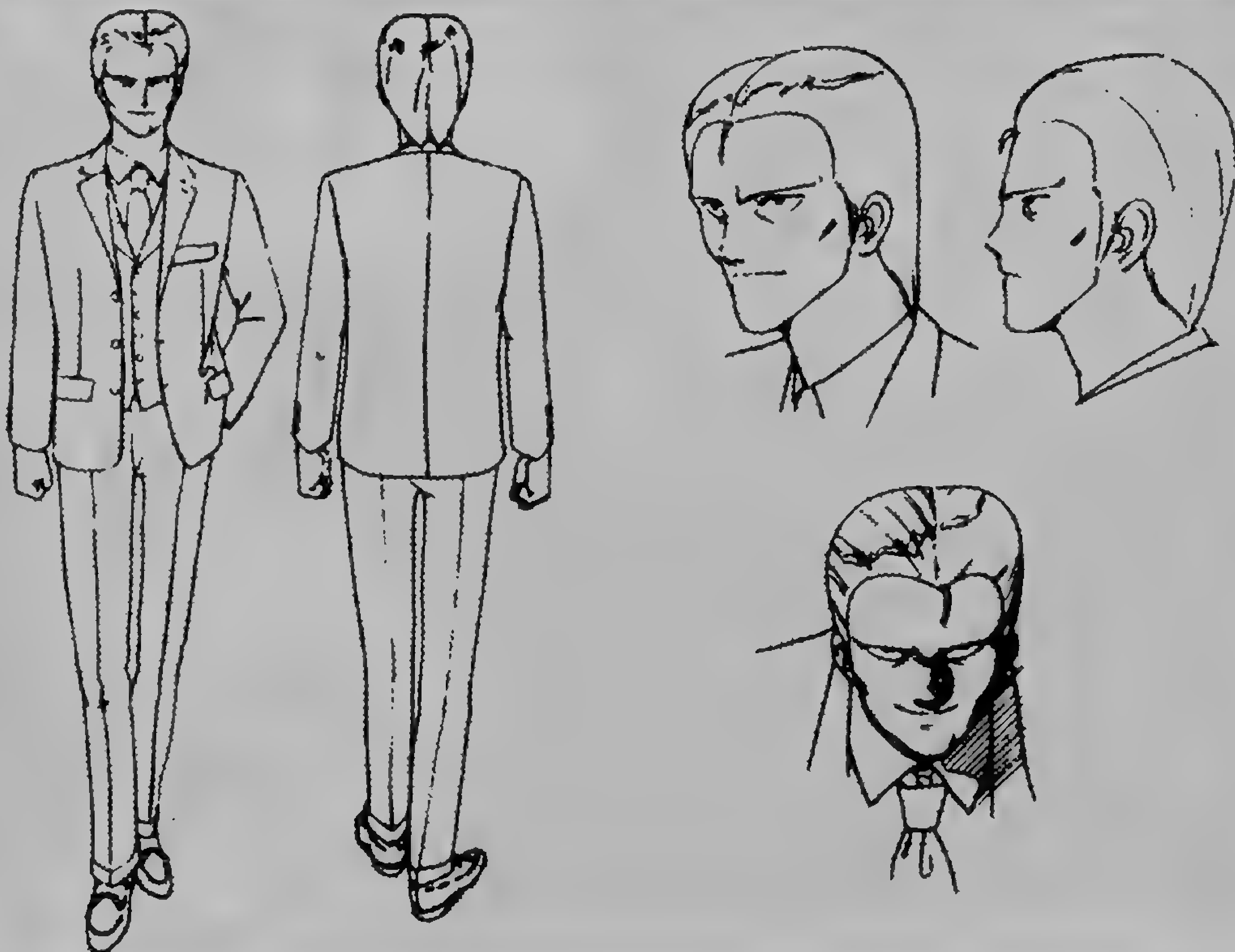


◀ADP署内。室内中央部に見えるのがネネの机。

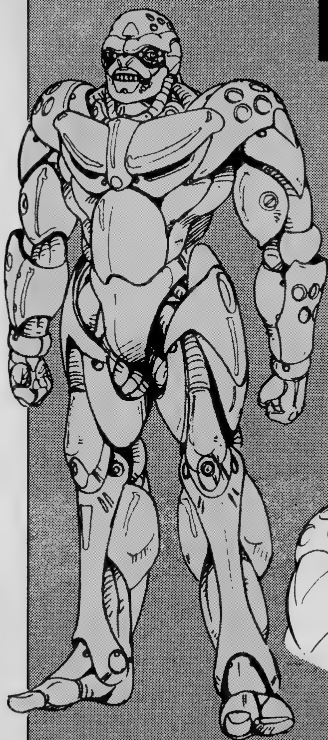


◀ゲノム会長、クインシー。

震災後の東京とともに巨大化して来たゲノム社、その製品は生活用品から兵器までと多様だ。そしてその力は政界へも大きく影響している。

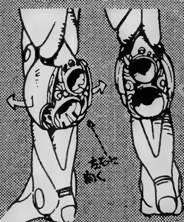


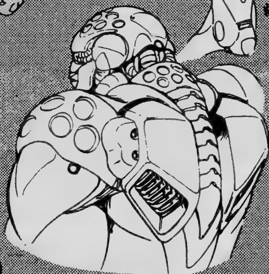
▶ゲノムの幹部メイスン。



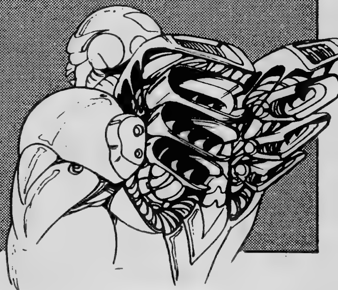
BOOMER

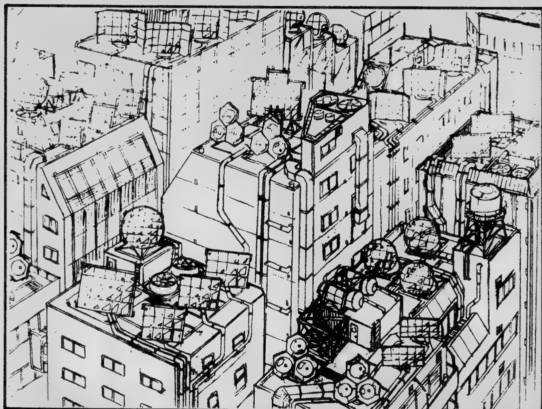
もともとは宇宙時代に備えて、２０２０年、シリアの父によって生み出される。後にゲノム社が戦闘用ブーマを開発し、東京に新たな犯罪を生み出す結果となる。



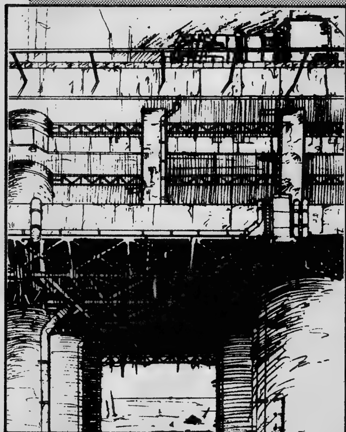


▶ブーマの背面ノズル。これと脚部のノズルによりホバー走行が可能となる。



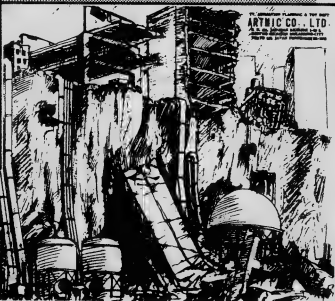


◀再建された町並。そして人々の生活の一部を支える太陽熱集光器群。

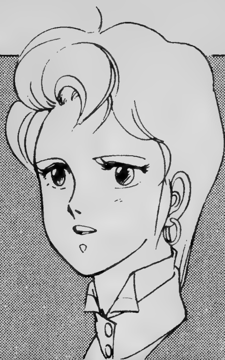


◀過密化した都市の人口を海上へと移住させるべく作られた水上都市。

▼２０２５年の関東大震災によって生じた大断層。現在は工業プラントが作られ、大小のパイプラインが地を埋めている。

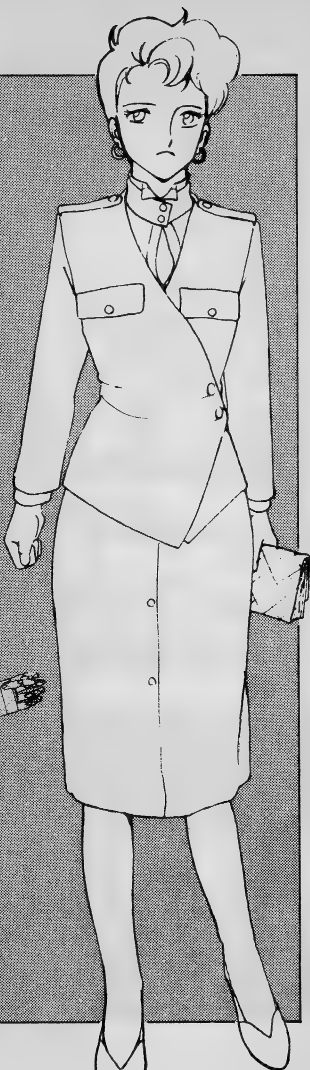


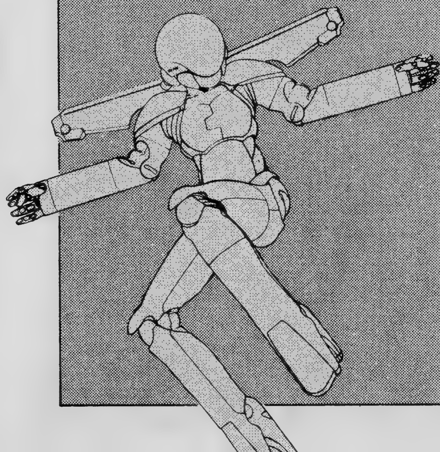
TOKYO

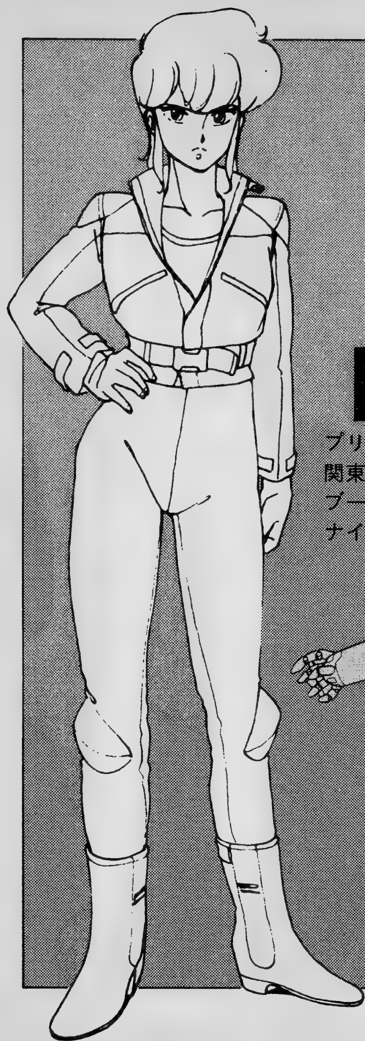


SYLIA

シリア・スティングレイ（22才）闇の仕置人ナイトセイバーズのリーダー。彼女たちの着るハードスーツは、今は亡きシリアの父、スティングレイ博士が作った。



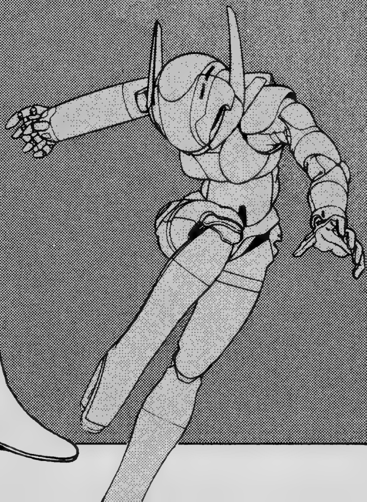


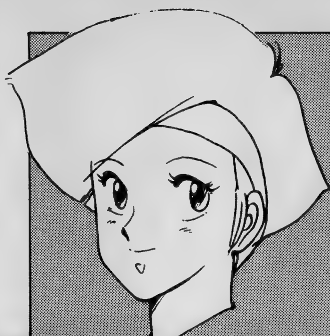




PRISS

プリス（19才）
関東大震災の時両親を失い、後にブーマによる事件に巻き込まれ、ナイトセイバーズの一員となる。

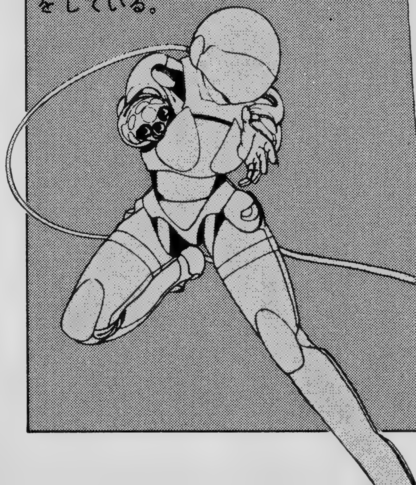


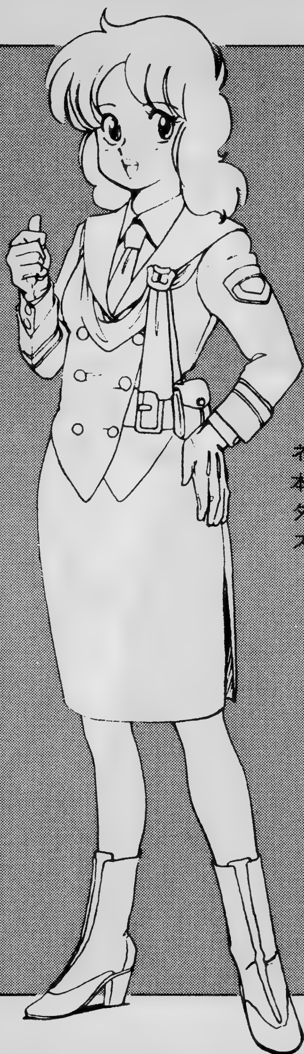


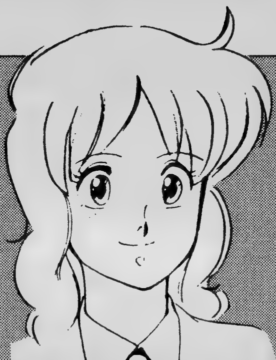
LINNA

リンナ山崎（20才）
ナイトセイバーズ参加の動機は不明。街のアスレチックセンターでエアロビクスのインストラクターをしている。



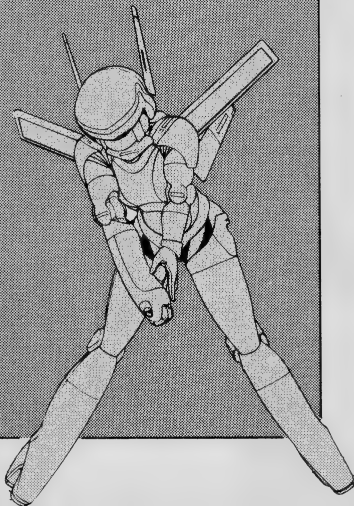


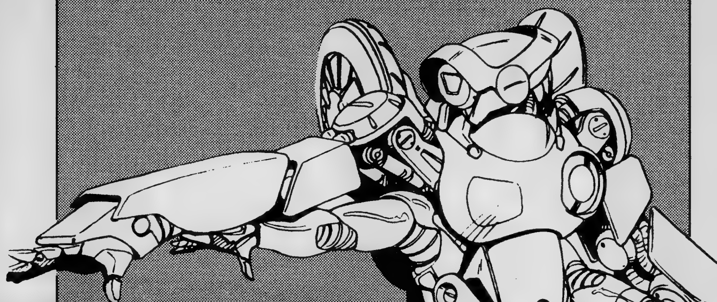




NENE

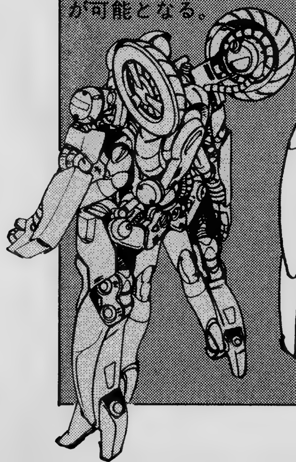
ネネ・ロマノーヴァ（18才）
本職はＡＤポリスの通信オペレーターだが、同時にナイトセイバーズの情報収集と分析を担当。

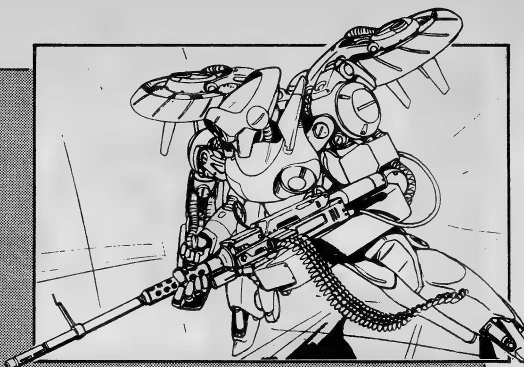




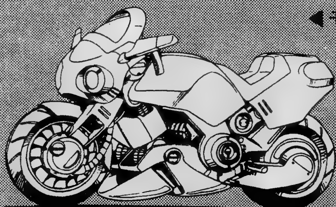
MOTOSLAVE

モトスレイヴ
ハードスーツの上に着用することにより、戦闘力、防衛力、作戦行動時間等の能力アップが可能となる。



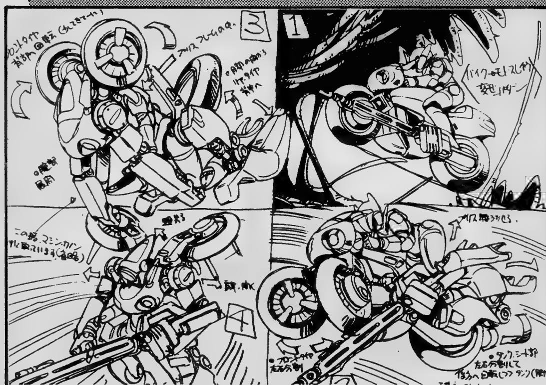


▶2基のファンローターによるホバーリング状態のモトスレイヴ



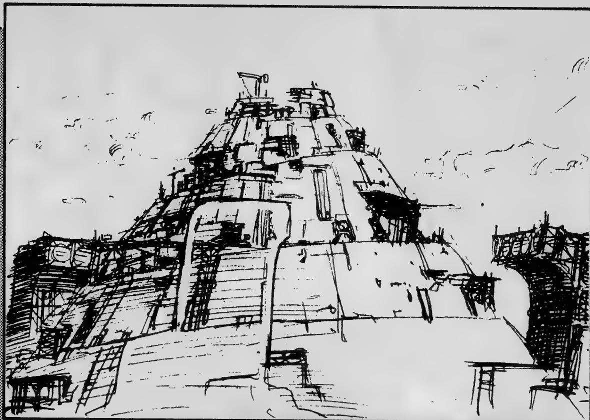
◀モーターサイクルモード

DATA
速度／170km/h
重量／167kg、279kg
全高／2.46m



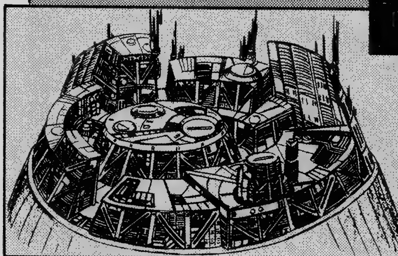
◀バイクよりモトスレイヴへの変形パターン。

▶全高約一〇〇〇mのゲノムタワーは正に未来のバベルタワーだ。



GENOM

世界をも手中におさめんと、発展を続ける大複合企業ゲノム。

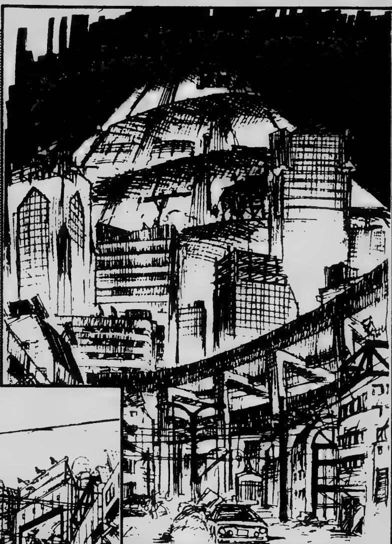


▲現在も建設が進められているゲノムタワー最上部。



▶ゲノムタワー正面入口。

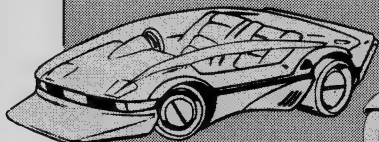
▶2032年TOKYO。数多くのビルが建ち並び複雑にからみ合う道路、そして、それを見下ろす様にそびえ立つゲノムタワー。

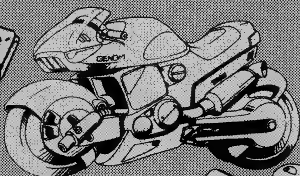


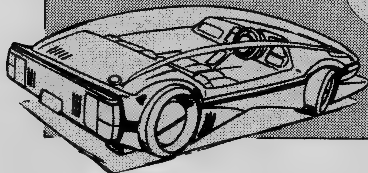
▼繁華街。人ごみの中それぞれ何かを求めて町は活気に満ちあふれている。

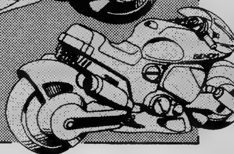


▼新エネルギー、"ガソール"によって走るスポーツカー(左)とバイク(右)。







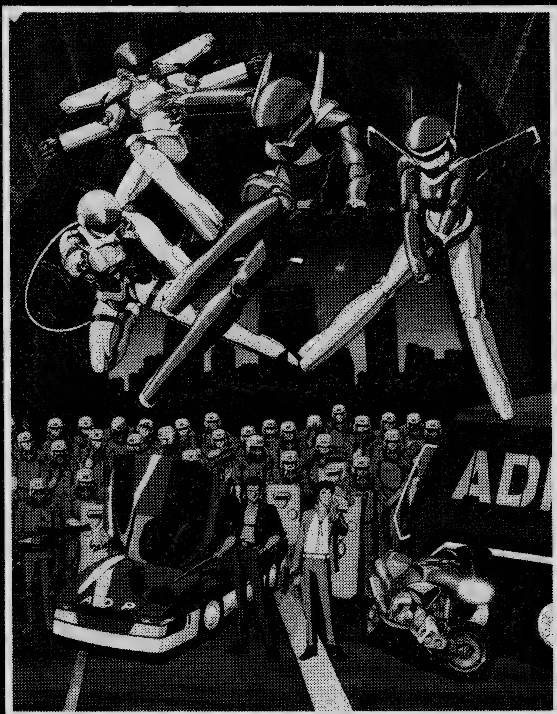


オリジナルビデオアニメーション

バブルガムクライシス
設定資料集

ナイトセイバーズ、ブーマ、ADポリス他バブルガムクライシスの世界の魅力を一挙に紹介！

構成／ARTMIC



富士見文庫

—茉莉子・冬物語—

トワイライトタイム

川本耕次

オートバイ好きな高校生山上祐一(やまがみゆういち)18歳。
下級生茉莉子(まりこ)に想いを寄せながら、
年上の女萌(もえ)に溺(おぼ)れてゆく祐一。
だが、二人の女にはそれぞれ恋人が現われ、
祐一は苛酷(かこく)なオートバイレースを
強(し)いられるはめになる…。
果たして勝利の女神は誰の手に？
揺れ動く少年の蒼(あお)い性を
オートバイに託(たく)した書下ろし青春小説！

富士見文庫

ジュラハンター・ケネス

霊女(シーラ)の誘惑

倉田悠子

首都ムーンの戦士ケネスは、
謎(なぞ)の強敵(きょうてき)ジュラを追って古都サムラに辿(たど)りつく。
町はすでに廃墟(はいきょ)と化し、
サムラの貞淑(ていしゅく)な女たちは、
夜な夜な淫(みだ)らな女に変貌(へんぼう)してゆく。
ケネスは恐るべきジュラの手先、
霊女(シーラ)の正体をつきとめるが……。
流浪(さすらい)の美剣士ケネスとおてんば美少女ナナが活躍する
書下ろしファンタジー！

富士見文庫

くりいむレモンより
いけないマコちゃん

MAKO・セクシーシンフォニー

倉田悠子

しなやかな肢体(したい)に可憐(かれん)な微笑(びしょう)を浮かべたマコは、
人一倍(ひといちばい)おくてな女子高生。
そんな彼女が、近頃ちょっとヘン!?
見知らぬ少女の出現で、
夜ごとみだらな夢に悩まされ、
ボーイフレンドの裕(ゆう)を挑発(ちょうはつ)する——。
さわやかな初夏に訪れた美少女の
性のめざめを軽快(けいかい)な筆致(ひっち)でみずみずしく描いた
傑作くりいむレモン。

富士見文庫

麻衣・夏の扉

倉田悠子

可憐な美少女が織りなすひと夏の青春！

神崎麻衣16歳。幼友達徹への淡い初恋を成就させた絵の好きな美少女。ある夏の日、古い洋館に住む大学生にレイプされる！　その添で同級生のスケバン萌が見ていたのだ……。徹との別離、父母の離婚、そして突然襲ったレイプ事件など、麻衣のひと夏の青春をみずみずしい筆致で描く初の書き下ろし小説！

富士見文庫

新くりいむレモン
森山塔オリジナルビデオ作品

5時間目のヴィーナス

吉原有紀

**三人の美少女がまきおこす
学園ラブHコメディー！**

「あたし、しめじさんが大好き！」
同級生のしめじにほのかな好意をよせる内気(うちき)な八千代。
そんな彼女が、５時間目の授業を境(さかい)に、
淫(みだ)らな夢にうなされて休学する。
一方、不吉(ふきつ)な鐘(かね)の音やシスターの亡霊騒(ぼうれいさわ)ぎなど、
しめじのまわりで不思議なことが相次いでおこる……。
美少女たちがまきおこす
学園ラブH(エッチ)コメディー！

富士見文庫

新くりいむレモンより

サマーウィンド

倉田悠子

亡(な)き恋人弥子(やこ)を忍(しの)んで
ひと足早い真夏を味わおうと、
バイクで一人旅に出る大学生日比木陽(ひびきよう)。
九州南端(なんたん)に近い浜辺で
一人の不思議な美少女に出会う。
可憐(かれん)な少女に弥子(やこ)の面影をダブらせて、
その夜二人は結ばれるが……。
バイク青年と人魚姫(マーメイド)のファンタスティックな恋を
さわやかに描くエロティックメルヘン。

富士見文庫

新くりいむレモン
森山塔オリジナルビデオ作品

5時間目のヴィーナス

吉原有紀

三人の美少女がまきおこす
学園ラブHコメディー！

「あたし、しめじさんが大好き！」
同級生のしめじにほのかな好意をよせる内気な八千代。
そんな彼女が、5時間目の授業を境に、
淫らな夢にうなされて休学する。
一方、不吉な鐘の音やシスターの亡霊騒ぎなど、
しめじのまわりで不思議なことが相次いでおこる……。
美少女たちがまきおこす
学園ラブHコメディー！

富士見文庫

くりいむレモンより

黒猫館

倉田悠子

昭和16年、信州の山奥にひっそりと佇(たたず)む
〝黒猫館〟に一人の青年が訪れる——。
美貌の女主人冴子(さえこ)に魅(ひ)かれ、
めくるめく官能の世界を垣間見る青年正樹(まさき)。
夜ごとくり広げる女たちとの性宴(せいえん)は、
彼を甘美な罠(わな)に導(みちび)くが……。
戦火間近い混乱の時代に三人の女たちが
妖(あや)しく奏(かな)でる陶酔(とうすい)と頽廃(たいはい)の世界を
格調高く描いた異色作。

富士見文庫

エスカレーション

倉田悠子

「なおみお姉さま、もう一度抱いて……」禁断の花園で夜ごとくり広げる可憐な乙女たちのみだらな痴態。リエは、上級生のなおみに教えられた愛の秘事を下級生の亜里沙に教授し、そして亜里沙も……。厳格なカトリック学園で妖しく燃える美少女たちの秘めやかな性の宴を濃密に描く。

富士見文庫

くりいむレモンより

黒猫館

倉田悠子

昭和16年、信州の山奥にひっそりと佇む
〝黒猫館〟に一人の青年が訪れる——。
美貌の女主人冴子に魅かれ、
めくるめく官能の世界を垣間見る青年正樹。
夜ごとくり広げる女たちとの性宴は、
彼を甘美な罠に導くが……。
戦火間近い混乱の時代に三人の女たちが
妖しく奏でる陶酔と頽廃の世界を
格調高く描いた異色作。

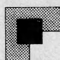
富士見文庫

旅立ち
——亜美終章——

倉田悠子

可憐な美少女亜美は、義兄の宏と禁断の愛を体験する。だが、母親にひき離され、ロンドンへ留学する宏。一人残された傷心の亜美にプレイボーイ河野の誘惑の魔手が忍びよる……。河野との過ち、スターへの甘い罠、両親の離婚など苦境の数々を十六歳の小さな胸に抱いて亜美の自立の旅は始まった。人気アニメシリーズ待望の小説化。

富士見文庫



昭和六十三年三月一日　初版発行

バブルガムクライシス
—サイレント・ファンファーレ—

原案　鈴木敏充　著者　松枝蔵人

発行者　牧野一

発行所　株式会社　富士見書房
東京都千代田区富士見一-十二-十四
電話　東京二六一-五三七五(代表)
〒一〇二　振替東京⑦八六〇四四

印刷所　旭印刷　製本所　本間製本

装幀者　岡村元夫

©アートミック

PRINTED IN JAPAN ISBN4-8291-4412-2 C0193

落丁乱丁本はおとりかえいたします　定価はカバーに明記してあります

富士見文庫

旅立ち ―亜美・終章―
SF超次元伝説ラル
エスカレーション
黒　猫　館
MAKO・セクシーシンフォニー
5時間目のヴィーナス
D　A　R　K
麻衣・夏の扉
サマーウィンド
霊女(シーラ)の誘惑
トワイライトタイム
バブルガム クライシス
e' t u d e

●登場人物


レオン


ネネ

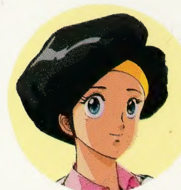

メイスン


マッキー

プリス




シリア


リンナ

カバー絵　園田健一
カバーデザイン　スタジオ・ギフ

鈴木敏充 原案
松枝蔵人 著

バブルガムクライシス

サイレント・ファンファーレ

富士見文庫

1-12
460

バブルガムクライシス
鈴木敏充 原案
松枝蔵人 著
富士見文庫

ISBN4-8291-4412-2 C0193 ¥460E 定価460円

2032年、かつての東京は〈無国籍〉のデストピア「ティンセル・シティ」へと変貌していた。不眠の夜を震撼させる殺人兵器ブーマの不可解な発狂、そして謎の美少女エレンディラ――。巨大な陰謀をあばくため、闇の仕置人ナイトセイバースが立ち上がる!! 超人気アニメのオリジナル小説、ついに完成!!